
魔法少女リリカルなのはvivid 鮮烈で桜色の物語

楚良

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは v.i.v.i.d 鮮烈で桜色の物語

【NZコード】

N3435R

【作者名】

楚良

【あらすじ】

J.S事件から4年後。成長した桜やヴィヴィオ達の物語。
みんなで楽しく、熱く、鮮烈な物語が今、始まる！！

オリキヤラがちょっと増えます。

「桜の花が咲くころに」の続編です。

キャラクターなどがわからない場合は前作を読むことをお勧めします。

プロローグ

機動六課解散から約4年。

桜の花が咲く季節がまたやつてきた。

ある日出会った、家族を失つた少女。

その子はなんだか昔の自分に重なつて見えた。

だから俺はその子を引き取るひつと思つた。

今は母さん達と一緒にじゃなく、一人で暮らしていく。

さて、どう母さん達に報告すればいいのやう……。

困つたものです。

ま、何がどうあれとりあえずこれからどうなるのかが楽しみだ。

そりゃねば、ヴィヴィオ元気してるかな？

1年以上会つてないから気になるな。

母さん達とはよく仕事場で会つけど。

でもその内戻るかもしないからな。

と並んで

「魔法少女リリカルなのは vivid

鮮烈で桜色の物語」

始まります。

プロローグ（後書き）

どうも楚良^{ソラ}です。

今日から「桜の花が咲くころ」の続編を描かせていただきたいと思^{おも}います。

オリキャラは後にキャラ紹介とかで紹介したいと思います。

これから応援よろしくお願^ねいします。

感想お待ちしております。

キャラ紹介

名前：高町 桜ハル

年齢：16歳

性別：男

身長：だいたい170ちょい

体重：60ぐらい

容姿：子供のころよりも少し大人っぽくなつて、髪が伸びている。

アルとの契約が切れているため黒髪である。

性格：だれにでも優しい。

ヴィヴィオ達やちびっこに対してはもつと優しい。

戦闘時は誰が相手だろうと常に全力の本氣で挑む。

シャナには意外に甘い方（？）

資格：教導資格、バイク免許、スター式特許権、調理師免許、他

デバイス・WHZERO
ウイズゲトゼロ
ストライダーツヴァイ
STH?

後に の2機を改造、合体させる氣である。

ZERO（改造後）
ゼロ

備考：宝石の埋め込まれたプレートに翼のエンブレムが描かれている。

WとS-Tの2体分の容量があるためモードが豊富。

ソード、ツインソード、サイズ、ヴァリス、

ハイパー・ヴァリス、バスター・ライフル、

ツインバスター・ライフルのモードがある。

エクシード、フルドライブももちろんのこと

翼もしつかりついている。

基本形態はヴァリスから。

ツインソードは連結させて長剣にも可能。

2体のメモリーを共有しているため性格などはそのまんま。

容量ギリギリまで入っているため

メンテがとても大変（桜談）

死靈秘方＝アル・アジフ

備考：最初の方に唯一壊されていない

ロイガード・ツィアールの召喚のための

ページが乗つてあるが今は召喚出来ない。

術式：スター式ミッシュド混合（正式に特許を取つてある）

魔力光：白銀

眼の色：エメラルドグリーン

髪の毛：黒

趣味、特技：料理（腕が上がつている）、

機械いじり（その気になればデバイスも作製可能なほど）、

読書、ストライクアーツ、ストライクアーツスター式、

双剣術（高町流士郎さん直伝、桜流）、他

好きな人：フェイト（恋人）、ノーヴェ（結構仲がいい）

なのは（母親だから）、ユーノ（父親に見える）

スバル（一緒にいると飽きない）

ヴィヴィオ&シャナ（妹だから）

エリオ（親友）、アギト（大親友）、他

備考：機動六課解散後に教導隊へ移動となつた。

教導隊での教え方は好評で、

自分が年下でもしつかり言うことを聞いてくれる。

13歳のころに変身魔法および年齢偽装をして

DSA Aインター ミドルに参加。

その際に優勝をしているが誰にも言つていない。

六課解散直後にスター式の特許を取り

誰にも使えないようにした。

使つているのは自分が認めた者だけ。

14歳のころから士郎に「小太刀一ノ刀御神流」
を習い始める。

15歳の時には達とは別居。

違う教導隊で教えることになる。

16歳になった翌日にはバイク免許を取りに行く。
約1ヶ月程で免許を貰つた。

3月ごろにあつた火災事件で

スバルの協力をてる際にシャナをみつける。

シャナには最初のころは警戒されていたものの
今では物凄く仲良くなつていてる。

最近ではシャナに魔法とストライクアーツを教えている。
その内学校にも行かせようと思つていてる。

名前：本名シャナ・トール・ヘイズ
後に正式に高町シャナとなる

年齢：10歳

性別：女の子

身長：ヴィヴィオより小さい

体重：教えたる殴られます by 駄作者

容姿：「灼眼のシャナ」のシャナと同じ。
ただし炎髪灼眼ではなく黒髪。

性格：ツンデレではなくお兄ちゃんっ子。

いつでもどんな時でも桜にベタ甘。
世界がどうなるかと桜さえいればいい
と思つぐらじのブラコン。

デバイス：F H (桜自作)
ハンドル

備考：桜がシャナのために作ったデバイス。

そこら辺のデバイスとは違い機能は十分。

待機状態は「灼眼のシャナ」のロキュートス。

学校に通い始めてから貰つたもの。

フォームは剣術用のソードフォーム。

ストライクアーツようにナックルフォーム。
ナックルはほとんど補助がメイン。

本人が桜の翼を見てから作ったことから
背中に赤い翼が付いている。

術式：近代ベルカ式、炎熱変化持ち

魔力光：紅

眼の色：桜と同じ

髪の毛：同じ

趣味、特技：運動、魔法の練習、剣術（シグナムも高評価）、
ストライクアーツ（桜&スバル直伝）、他いろいろ
好きなこと・桜、桜の料理、と言うか桜に関わること全部（笑）
最近は桜のベッドで一緒に寝ること。
一番好きなのは桜が作るメロンパン。

備考：3月ごろにあつた火災事件で家族を亡くしてしまった。

その際にその場でずっと泣いていた所を桜に助ける。

最初は警戒していたが毎日会いに来てくれる

桜にちょっととづつだが心を開いていく。

最終的には桜が大好きになってしまい
一緒に暮らすようになった。

毎日起きたらまずはランニング。

その後に桜と一緒に魔法の練習とストライクアーツ、**剣術**。

たまにスバルも来て一緒にやることもある。

剣術はシグナムと桜に教えてもらっている。

シグナムには高評価を貰っている。

頭の良さは「ローナと同じくらい」。

桜に教えてもらうことがよくあり、

そのおかげで頭が良くなっているとも言える。

一度桜が試しに作ったカリカリもふもふのメロンパンを食べて病みつきになつた。

一緒に寝るときに断られそうになると

涙眼+上田使い（無意識）で攻撃してくる。

風呂にはたまに潜入する。

キャラ紹介2

名前：アウル・オーシャン

年齢：10歳

性別：少年

身長：ヴィヴィオ達と同じくらい

体重：40ぐらい

容姿：短髪

性格：基本無口（桜以外）
ちょっと頭脳派。

デバイス：SPスナイプ

術式：ミッド式

魔力光：水色

眼の色：青

髪の色：水色

備考：無口だけど頼れるセンターガード。

狙つた獲物は百発百中で当ててきたスナイパー。

実力はヴァイス以上。

1年前事故で親を亡くす。

それ以来無口になり人間関係を亡くしている。

昔は元気に喋っていたが今は違う。

精密射撃が得意で、兆弾をよく利用する。

桜を兄として、家族として慕っている。

頭のよさは中の上ぐらい。

名前：リーフ・ブレイド

年齢：15歳

性別：男

身長：168

体重：50ぐらい

容姿：エリオのシンシンをやたら近くした感じ。

性格：頑張りや。ワンパターン

デバイス：○^{オーガ}

術式：近代ベルカ式

魔力光：黄色

眼の色：オレンジ

髪の色：紫

備考：剣術のできるみならいフロントアタッカ
同じ教導隊にいるサジの友達。

剣術の実力は悲しい事にシャナ以下。
まだまだ半人前だが伸びしろのある新人。
元気が取り柄？のムードメーカー。

名前：リナ・ストライク

年齢：15歳

性別：女

身長：160ぐらい

体重：不明

容姿：ちょっと長いツインテール

性格：素直で優しい。
ちょっと心配性。

デバイス：シムルグ SG

術式：近代ベルカ式ミット混合ハイブリッド

変換資質：炎

魔力光：碧

眼の色：赤

髪の色：白髪

備考：優しく仲間を常に心配するガードウイング（仮）。
夢は執務官になる事と姉を追い越すこと。

マリナの実の妹。

ストライクアーツを学んでおり

桜によく組み手の相手をしてもらうことがある。

先天魔法をスバルとノーザンに教わり

1日で習得したやればできる子。

桜に憧れていて、同時に好意を寄せている。

恋人のフェイトとはライバル関係（笑）
頭の良さはティアナ並。

名前：雅瑠璃みやびるい

年齢：12歳

性別：少女

身長：キャロと同じくらい

体重：不明

容姿：長髪で後ろで束ねている

性格：基本優しい。ドジな時がある

デバイス：テュルソス T S

術式：ミッド式

魔力光：琥珀色

眼の色：琥珀色

髪の色：黄色

備考：父親が地球出身の優しいフルバック。

レアスキルこそないがキャロ以上の実力を内に秘めている。
訓練次第ではガチンコで

六課メンバーの誰かに勝てるかも！？
エリオに一目惚れしてキャロとライバル関係。
キャロと気が合う時とそうでない時が激しい。
ルーテシアとは（後々）知り合つて
間もないものの結構中が良い。

召喚魔法、圧縮魔法は桜に直伝だ。

キャラ紹介③

名前：八神（高町） 桜（チビ桜）

年齢：不明。外見6～7歳（実年齢16歳）

性別：少年（男の娘？）

身長：シャナより小さい。と言つかマジでチビです

体重：めちゃくちゃ軽い・・・かも？

術式：^{エンショント}真正古代ベルカスター

変換資質：氷結（水、風、氷）

備考：もう一人の桜で、もう一人の主人公。

八神家の末っ子の立ち位置にすっかり収まってしまった男の娘。
容姿は昔の桜とほとんど変わらないが片目が蒼色に変わったオッド
アイになり、少し頬つきが女の子っぽくなっている。

性格は昔のものとガラリと変わりめちゃくちゃ甘えん坊且つ正直。
思つた事はほとんど口に出してしまうが本人に悪気はない。

はやてが母親として大好きで、ミウラが友達としてなのがどうかは
わからないが好きらしい。

術式は八神家全員の映像を見て完璧にコピ―、超近接特化兼奇襲型
と言つ戦闘スタイルになつた。ちなみにやはての魔法は劣化版だが
全て完璧にコピ―してある。

インターミドルに参加するためのデバイスがひじゅいやだと言つ
がはたして・・・。

名前：マリナ・ストライク

年齢：20歳

性別：女

身長：169？

体重：秘密だそうです

備考：ヒロインの1人。

教導隊での桜とのはの上司で階級は三佐。

容姿は銀髪のショートカットで目の色がリナと同じ赤。

桜が自分の教導隊に来てからの数年間、優しく強い彼が次第に好きになり告白。その際に桜に襲われかけるがリナの乱入により中断。それ以降は事あるごとに桜を誘惑している。

シグナムとは本局勤めの時に知り合った。意外に仲が良いが桜のこととなるとどうなるのかは不明。一応八神家のみんなとフェイトとも知り合っている。

番外編 ステージX 01（前書き）

サウンドステージXを番外編として書き始めます！

▼i▼iの4巻を買つまでは番外編を更新する」とが多くなると思します。

その度に更新報告で番外編を更新したと書くのでよろしくお願いします。

番外編 ステージX 01

新暦78年。

ミッドチルダで少しの間騒ぎになつていた事件。
通称『マリアージュ事件』

この事件を解決に導いたのはティアナ・ランスター執務官。それに協力した元機動六課FWメンバー、現在は災害救助活動をしているスバル・ナカジマ防災士長、自然保護隊でコンビを組み密漁者などを捕まえている竜騎士エリオ・モンディアルと竜召喚師キヤロ・ル・ルシエ。そして、かつて『翼の英雄』と呼ばれていた高町桜一等空尉教導官。

他元ナンバーズ数名、108陸士部隊のギンガ・ナカジマ陸曹。このたくさんの協力者により、マリアージュ事件は無事解決、容疑者のルネッサ・マグナスも逮捕出来た。

今から話すのはこの事件の概要。

イクスベリアと桜の出逢いの物語・・・。

s i d e o u t

「はい、もしもし」

その連絡は突然だった。

まあ、スバルさんだからしようがないだろう。

どうせほぼ毎日家に来ているんだから直接言えばいいのに、なんて

思つてしまつ。やつ言えればティアさんが来たらしい。だから最近来なかつたのかと納得し、直接言えないのがわかつた。

『それで、それで、桜も休みとれる?』

「あへ、どうですかね~。まあ、たぶん取れますよ」

『ホントー?それじゃあ』

「ん?あー」

『どしたの?』

「いや、むづ時間が!あ、あとでかけ直すんで!すいません!」

急いで電話を切り、テラスから出る。
休憩時間を惜しくも感じながら今日だけ来ることが出来た上司の元へ向かう。

意外と時間に厳しいから遅れたりしたら溜まつたもんじやない。他のヤツには時間とかとやかく言わないのに何で俺だけなんだと思いながらも脚はそっちの方へ向いていた。

「あへ、今日は遅れなかつたね~」

「毎回時間の事とやかく言わればな。マリナ・ストライク三佐

「もつ、フルネームと階級付けて呼ぶのやめてつて言つてねでしょ。ちやことお前で呼んで」

「はいはい、マリナさん

「ふふっ」

「はあ・・・」

「ため息つくと幸せ逃げるよ?」

「誰のせいだよ」

「私?」

「直覚してんのかよ・・・」

うかつだつた、わざとこんなことやつているなんて。
これからは気をつけなければ・・・とか言つけど結局は忘れるパタ
ーンだなこれ。

つて、また電話だよ。誰からだ?と云つが今日は多くな。
母さんにフロイトさん、ヴィヴィオ、そしてスバルさん。
今日はなんかあんのか?

「悪い、また電話だ」

「えへ、また~」

「六課時代の同僚だよ。あ、もしもじ」

『もしもじ、桜?』

「あ、ティアさん~」

電話の相手はまさかのティアさんだった。

珍しいんじゃないかな？ティアさんから電話をかけてくるなんて。

「久しぶりですね。」うち来てるんですよ？スバルさんから聞いてますよ」

『ええ、今はある事件を追いつけてうち来てるんだけど、ちょっと手伝つてもらえないかしら？』

「え？ 事件？」

『連續殺人事件って言えばわかるかしら？』

「・・・今から、時間空けられますか？」

『やつとやつと思つて無理言つて午後はオフにしておいたわ』

「ナイスです。じゃ、今から待ち合せで」

『了解。場所はこっちが指定するから、またあとでかけ直すわ』

「はー、では。とこりとこりと行つてくる」

「桜君はじつしていつもやうなのかな？」

「ひつひつ性格だか？」

「・・・鈍感」

「なんか言つたか？」

「なんにも」

「そうか。じゃ、後頼む」

そう言い残してその場から走って立ち去る。

別にマリナと一緒にイヤだからじゃないぞ？資料集めとかできる限りは自分でしておかないといけないから早めに行くんだ。

とりあえず、自分のデスクに向かう。

荷物整理をしてからコンソロールを叩く。

えっと、連続殺人事件つと・・・。

「キーワードが断片的だな。そいら辺はティアさんの情報に任せるとか」

そう言いながら荷物を持ち、教導隊（母さん達とは別）を後にする。まさか、この事件がどんなことになるとはこの時思ってもよらなかつた。

番外編 ステージX 01（後書き）

次回はどうしようかな。

スバルさんやエリオ達を出そうかとは思っていますがどう出そうかなーとか思つてますから。

誤字脱字、感想あればお願いします。

「お久しぶりです、ティアさん」

「久しぶり。懐かしいとかいろいろあると想ひけど、今はこいつ。
一応機密事項だから漏らしちゃダメよ?」

そう言いながらクロスミラージュを見せるティアさん。

俺が今回呼ばれたのは事件捜査の協力。出来る限り協力はしたいけど、情報が無ければ協力も何もない。

とりあえず、今わかつている事だけでも情報は頭に入れておくべきだ。

「・・・やっぱり、キーワードが断片的すぎる。『古代ベルカ文字』
と『マリアージュ』がまともに関連しているのは確かんですけど。
・・」

「さすがにこれだけじゃやっぱり無理か・・・」

「この古代ベルカ文字はオットーかディートーに頼んだ方がいいっす
ね。ちよっと連絡してみますあ」

決まつたらまず行動だ。

早速携帯を取り出し聖王教会に電話してみると、時間が開いているかな?

「あ、もしもし。」ちらり高町桜です。カリムさんですか?」

『ええ、久しぶりね桜』

「えっと、オットーがデーターいますか？替つてもうしたら嬉しいんですけど」

『ちよつと待つてね』

少しの間、電話から声が聞こえなくなる。
しばらくすると中性的な声が聞こえてきた。

『もしもし』

「あ、オットー久しぶり」

『桜か。久しぶり。ビーツしたんだい？』

「ティアさんからの頼みで捜査資料の調査依頼だ。今から送るから
頼んでもいいか？」

『うん、いいよ』

「サンキュー。じゃあ、切つたら送る」

『わかった』

そう言い残し、電話を切る。

そしてコンソロールを叩きデータを送った。

こつちはこれで良いだろ。

でも、他はどう対処したらいいもんか。

『W、S-T-Iれゴローじといてくれ』

『All right』

『Yes sir』

「そう言えばティアさんは夜どうしてるんですか？」

「え？」

「寝泊まつづいてんですか？」

「スバルの家よ。でもどづして？」

「いや、気になっただけです。もしホテルなら家にでも泊つて行けばいいのになつて」

「「めんね。あ、でも良いかもね。桜の料理、久しぶりに食べたいし」

「なら、スバルさんも呼びます？今日は無理でも明日とか

「いいわね。じゃあ今日は桜の家にお邪魔しようかしら」

「大歓迎です」

side out

翌日。

昨日は結局俺への情報提供しか出来なかつた。

情報から得られる新たな情報はなく、ヒントすら見当たらなかつた。

「ショウがないと言えばしょうがない。」

キーワードがほとんどの断片的、絡合のものもほとんどない。

マリアージュと古代ベルカ文字。

関係は深いが、それ関連の知識をあまり持っていない俺にはこれを解決に近付けるのは無理がありそうだ。

「ティアさん、おはようございます。よく眠れましたか？」

「おはよう、よく眠れたわ」

話を変えよう。

今日はスバルさん達に誘われて遊びに出かける。

ティアさんは残念ながら仕事で参加できずだ。

エリオとキャロ、アルトさんも誘つたらしい。

みんなと会つのはすごく久しぶりだ。

そう言えばこのメンバーってティアさんがいないだけで元機動六課の休憩室メンバーじゃないか。

「あ・・・／＼」「めんなさい！」

「え？」

俺の家は部屋つちや部屋だが、3部屋分つながつている。
昨日は2人だけだったから俺がリビングのソファ、ティアさんが俺の寝室で寝ていた。

一応起¹こじに来たんだが、それが失敗だつたよつだ。

ティアさんはベッドの上で寝ている姿のままだつたから、俺はその姿を見てしまつたんだ。

急いで部屋から出てドアの隣に背を預ける。

「え、えつと、ちよ、朝食の用意が出来たんで・・・」

「ありがとう、着替えたら頂くわ。それと、どのくらい見た?」

「え? も、その・・・ぜ、全体・・・」

「やあ。フロイドさんにチクつたら死ぬわね」

「い、言わないでくださいよ?」

「朝食が美味しかつたら言わないわ」

「ありがとう!」²おこます」

「あら、自分の料理が美味しいって自覚してゐる? ナルシスト発言
ね」

「な!?

何たる口のうまさだ。

やっぱり俺はティアさんに口で勝つことは出来ないんだな。六課時
で³でも今でも変わらない、この関係はビリヤつても覆せないだろ
う。

そんなことを考へていると部屋からティアさんが出てきた。

黒い制服に身を包み、俺の横で止まる。

「今日の朝食はなんなの?..」

「え、えっと、洋食です。サラダとソーセージとか、トーストは今からですけど焼きます」

「なら、お願ひするわ」

「はい」

今日の朝はそれなりに（眼福的な意味で）良い朝だった。

番外編 ステージX 02（後書き）

次回はFWメンバーとアルトが登場。
遊び先で大火災が起き、救助活動をします。

誤字脱字、感想あればお願いします。

番外編 『七夕』みんなで願いを（前書き）

時間軸は関係ありません。
チビ桜はまだ存在していません。
アルも復活していない設定です。
シャナはいます。

番外編 『七夕』みんなで願いを

「・・・ふあ~」

早朝5時起き。

あぐびをしているがしつかり田を覚まさなければ。

「・・・誰も起きてないよな。桜もまだ寝てるし」

1階の様子を見てみると母さんはおろかフロイトさんも起きてはいなかつた。休みだから咎めるつもりはないが、いつもなら起きている時間帯だと思つ。

自分の中に居るもう一人の自分、桜もまだ眠っている。
朝食を作る前に体を少し動かしておこう。

「散歩のついでに食材買っておくか。冷蔵庫の中身が少ないしな」

そんなことを呟きながら家を後にした。

s i d e o u t

散歩は特に何もなし。

面白いものも見つからず本当に何もない散歩となつたが、外の空気は以外にも心地よかつた。若干冷たさが混じっていたが、眠氣を覚ませてくれたから何よりだ。

散歩コースをちょっと外れ、朝でもやっているスーパーへ。こっちも何か特別な事はやっておらず、いつも通りのスーパーだった。

買い物を終えて数分後。
無事帰宅し、耳を澄ます。

「あれ！？ 桜がいない！」

「お兄ちゃんが消えた！」

朝5時起きで本当に助かった。
とにかく起きたんだつたらちゃんと降りてきてくれること。
はあ、とため息をつきながらも金所へ向かった。

「あ、おはよ」

「おはよう、母さん」

さすがは母さん。

休日でも早起きは欠かせないわけですね。
俺もそんなに母さんのこと言えないけど。

「何処行ってたの？」

「散歩のついでに買い物だし。冷蔵庫の中身が少なくなってきたから

「やつか。ありがとね」

「ひ

「仮にしなくてこよ。暖氣覚ましはせなかつたから」

そつ言いながら買つてきたものを冷蔵庫へ入れていぐ。
冷蔵庫の中身を見ながら朝食を何にするかも考えていく。

「やつぱは今日つて七夕だつたね」

「ん？ああ、そつか。なら雀賣わなれやな。頬んでもいこ？俺は今
日、非番じやないから」

「あれ？休み取つてないの？」

「うん。取るのあれてしま」

「やつか。わかつた。探してみる」

朝食を作りながらそんな話をしていた。
まあ、たぶん探しはあると感ひ。なかつたうじハコもいつかと感ひた
ど。

「うん、美味い」

今日も朝食は美味しくできていた。

sideoout

時間は経つて夜。

桜が家に帰つてくれる

「どうしたの」

「 「 「 「 笠が無かつた・・・」 「 」 」

「ほう・・・」

4人とも落ち込んでいた。

先ほどの言葉通り、笠が見つからなかつたようだ。

管理外世界の品を扱う店を訪ねてはみたが意外や意外、見つからなかつた。扱っている場所もあつたが、数が少ないうえに売り切れていたそうだ。

「せっかく着替えたのに・・・」

「しょうがないよ。また来年、ね?」

ちなみに4人も浴衣姿。

気分だけでも、と行きたかったのだがこの様子では逆効果なようだ。

テーブルの上には短冊も置いてある。

よほど期待していたのが見えるが、どうしたものか。

「はあ・・・予想的中」

「 「 「 「 え?」 「 」 」

「 「 「なるだれ?と予測して、笠は帰りに買つてきたよ」

ぐいっと奥の方から笠を引っ張つてくる。

ガサガサと音を立てながらも、少し小さな笠はみんなの眼には輝い

て見えた。

「」れで七夕できるだろ?」

「わっすがお兄ちゃん!」

「やつぱり桜は頼りになるね!」

とりあえず、庭の方へ出て籠をザクッと地面に突き刺す。
よし、あとほ夕食の準備とかだけだな。

「母さん、手伝ひ。ちよちやと夕食作つね!」

「うん」

side out

「ねえ、桜はなんて書いたの?」

「お、俺ですか?そ、それはちよっと・・・」

「わうだよフロイトマム。」うごくのは見せちゃダメなんだよ

「あ、そいつ」として。すいません

「そつか。見せて願い事が叶わなかつたらイヤだもんね

みんなじゅうとー緒に西へおまよひ
ヴィヴィオ

お兄ちやことひとー緒に西へおまよひ
元ひ

シャナ

」の平和がずっと続きますよひ
フェイア

桜やみんなが無理しませんよひ
なのは

こいつが、相棒アルが帰つてきますよひ

桜

短冊につづった願いが叶うのかは神のみぞ知る・・・。

「ラボ 前編 四神伝奇（前書き）

今回はハードワード・ニコーゲート様が書いている『四神伝奇』との
「ラボ前編」！
『四神伝奇』は結構面白いので時間がある方は読んでみるといいと
思こます！

ちなみにこの「ラボ内では桜はハーレムではあります。

本編第34話以降のネタばれが含まれます。
それでも良い方はお進みください。

「」ボ 前篇 四神伝奇

『高町家の皆様へ

今週末、旧機動六課隊舎でパーティーを行います。

皆様の参加をお待ちしております。

機動六課元部隊長、八神はやてより』

「 だつてよ」

一週間の始まり。

月曜日（珍しく俺と母さんは非番の日）に届いた手紙。
だがパーティーをするのはいいだが、何か祝うことがあつただろう
か。
うん・・・。

「今週末って、確か機動六課が始動した日じゃなかつたっけ？」

「ああ、そつか。今年で4周年か」

どうせまた俺が料理を作るんだろう。

まあ、別にイヤでもないし。拒否はしないだろう。

それに今年はいろいろと親しい人が増えたしな。
ちょうどいいし、教導隊メンバーもつれしていくか。

「 そう言えば、これつて任務中のフェイトさんにも行つてるのかな

？」

「 今週末に帰つてくるつて言つてたから、たぶん行つてるんじゃない

い？」

「教導隊メンバーを連れて行つてもいいと思つ?」

「いいんじゃない。みんなで楽しくだよ」

「じゃ、今のうち新メニューでも考えとかないとね」

（パーティー、パーティー！）

頭の中で声が響く。

小さい頃の自分、すぐ小さく純粋無垢なもつ一人の俺だ。

（桜も楽しみか）

（うん！）

side out

何だかんだで週末。

結局新メニューは出来なかつたが、以外と有意義な一週間であつた。

ちなみに今日のメンバーは六課メンバーに加えて、俺の教導隊メンバーとチビ達。みんなで楽しくの精神のもと俺が誘いまくつた。

「桜」

「フヒイトさん、ティアさん・・・と君達は・・・」

フェイトさんに声をかけられ、振り向いた。

ティアさんもいたのだが、その後ろにさら二人。

1人は男で、茶髪の散切り。

もう1人は女で、黒髪を腰のあたりまで伸ばしたボーネール。

六課メンバーでない事は確実だ。

なら、ティアさんの知り合いかな？

「この子たちは私達が任務先で知り合った」

「嘱託魔導師の東郷龍清とうごうりゅうせい」18歳で、この子はコニゾンデバイスの春青です」

「クキュ～」

「同じく嘱託魔導師の秋西麗あきにしれい（チヨウ・シーリー）」18歳、この子もコニゾンデバイスで白秋つて言います

「ニヤ～」

「初めてまして。時空管理局航空武装隊所属、戦技教導官の高町桜一等空尉だ。年齢は16だからそんなにかたくなならずに、お互い気軽に」

「行こう」

「そう言いながら右手を出す。

龍青が先に手を伸ばして来たのだが

「キュー～」

「ニヤー」

春青と白秋が俺に飛びついてくる。

春青は俺の頭の上に、白秋は危なかつたから抱きかかえた。

「おわっ！？っと、どうした？そこが気に入つたか？」

「キュク！」

「ニヤー！」

「俺は動物に好かれやすいな」

「まさか白秋が私意外に懐くなんて」

「春青は人懐っこいから、すいません」

「んにゃ、気にしなくていい。俺は召喚獣持つている時もあつたからそれで慣れてる」

「そ、そつなんですか」

「あれ？そつ言えば”高町”って……」

「桜はなのはの息子さんだよ。養子だけどね。それに私の恋……
人……」

顔を赤らめながら言ったフェイトさん。

そうなるなら言わなきゃいいのにと思いながらも、2人に向き直る。

「な、なのはさんのお息子ーー?」

「それにフロイトさんの恋人ってー!」

「あははは、おはすかしながらその通り。フロイトさんは六課時代からかな。て言つたか母さんを知つてゐるの?」

「知つてゐると言つたか、少し前に知り合つたんですよ」

なるほど、母さんがこの前いなかつたのはその時か。
たぶんものすご勢いでじこかれたんだろうな。
いろんな意味でかわいそうに。

「せうか、ん? も、やべ。俺はそろそろ行かなきゃな」

「また作るの?」

「うん、リアクエストあれば作るけど、ある?」

「私はないけどティアナは?」

「私もありません。2人はわかりませんが」

「ほ、僕たちは、その」

「遠慮すんなつて。めちゃくちゃ美味しいの作るから言つてみつて

「な、なら、和風なものを」

「私は中華で」

「OK。期待してりよ。あ、あぶね。この2匹は返さないと。またあとでな」

「キュク～」

「一いや～」

そう言いながら先の白秋を渡し、次に春青を渡す。
シャンタク達と気が合ってくれればうれしいんだがな。

side out

『では、みなさん。今夜は食べて飲んで騒いで楽しみましょう！乾杯！』

『乾杯！…』

主催者であるはやてさんの声でパーティーは始まった。
ちなみに、今回も”全て”俺が作った。
みんなが美味しいと言いながら食べてくれるのを見ていて、ものす
ごくうれしかった。

そして開始直後、真横を向いてみると。

「「がつがつ」」

「やべもべもべも

「やつぱりかあ・・・」

スバルさん、ギンガさん、ヒリオにアルフさん。
この大食いメンバーが一つのテーブルを占領していた。

「相変わらずすこし勢いですね」

「あ、桜。いつもも増して美味しいよーー!」

「わすが桜痴ね。もう病みつきになっちゃつわ」

「腹だけは壊さないでくださいね。壊れないと思こますナビ」

『はーー』

このメンバーはいつも通りだな。

ただ今日はバリエーションが多いから果たして全て食べられるかな
?食べられると思つたび。

「せめてちゃんと、絶対に桜にお酒を飲ませよといつやダメだから
ねー!」

「わかつてんつて、なのはけやん。もつの大惨事はイヤやからな」

(お母さんだー!)

「何物騒な話してんの」

「あ、桜」

「いや～、桜にお酒を飲まして大変なことになつたからな～。同じ過ちは繰り返さないよ！」せんと」

「もし飲ませたらまつわきにはやでさん狙いますね」

「怖ー！でも、でもちつちつわきに桜がゆるむくと・・・」

「桜を抑えつけたでも狙います」

「（めんなさい）・・・」

即座に謝ったよこの人。絶対プライドないって。

しかし、この人に狸キャラが定着してきたように感じるのは俺だけか・・・？

とりあえず、2人の話はちょっとここで切り上げる。
他の所にも顔を出した方がいいと思つしな。

「おっす、楽しくやつてるかー？」

「あ、お兄ちゃん」

今度はチビ達。

AINHARLTONもいるし、ノーヴェさんがちゃんと誘ってくれたのがわかる。

リオもコロナも楽しそうにしているし、改めてヴィヴィオに誘わせた事を言い判断だったと思う。

「す、ぐおこしいです。これ全部桜さんが作ったんですね？」

「ああ、今日は和風と中華メインだ。美味しいって言つてくれて何よりだよ」

「そんなことないですー本当に美味しいですからー」

「子供は素直でいいね。

感想はほとんど同じだけど、素直な嬉しさが倍増するよ。
さて、今度はあそこへ行こうか。
そう、動物チーム。

「よつす」

「あ、桜君」

「動物多いなー。まあ、瑠璃が一番多いんだけどな」

「そ、そつやあみんな桜さんが呼び出したんですから。アルもいい子ですし」

えー、動物が多いです。
鳴き声が多いです。

そうそう、俺の召喚獣達は現在瑠璃の召喚獣になつてこる。
瑠璃は竜召喚とかレアスキルを持つていないからちょうどいいと思つたし、何より一番ハスターが瑠璃に懐いていたから、いつそのことアルも含めて瑠璃が主になればいいとなつた。

「謹清と西麗も、楽しんでるか？」

「はい、美味しいし、楽しいです」

「」の子たちも友達増えて嬉しいみたいでしょ

「料理はまだまだあるから、じゅんじゅん食べてくれよ」

「「はい！」」

そう言い残してその場を後に。
さて、今のところ顔を出してないのはどうだっけ？

(あ！)

(どした)

(ミウラを誘つてない！）

(・・・) ゴメン

(え！？イヤ、ダメだろ！)

(それでも誘つ!-!お兄ちゃん誘つて!-!)

(ああー、もう、わかつたから。ちよつと待つてろ)

携帯を取り出し、電話をしてみる。

出でくれるか。いや、その前に出でてくれたとしても来てくれるか。

『もしも』

「もしもし、ミウラ」

『ハ、ハハハ、桜さん！？ど、どうして急にー』

「いや、桜がミウラも誘うつて聞かなくてな。今、みんなでパーティーやってんだ。来ないか？」

『い、行きます！行かせて下さー。』

「せうか。なら、今から迎えに行くから、待つてくれ」

『は、はー！』

携帯をしまい、はやてさん達にミウラを迎えて行くと言つて外に出た。バイクで来たのは正解だな。速度をギリギリまで守つて全力疾走したのは言つまでもないかった。

side out

ミウラを迎えて行った後、全員でゲーム大会となつた。ビンゴ、クイズ、その他いろいろ。

結構盛り上がつたからこれはいい思い出になるだろう。

「で、これは何のべじですか？」

「もうひる部屋割りや。誰とペアになつても寝みつこなしあで」

「はあ・・・では、これで、お~4番」

「あ、私4番です」

手を上げたのは西麗だつた。

とこつ事は俺のペアは西麗といつ事か。

それにしてもなんだらう。

後ろの方から殺氣が飛んでくるのは。

気にしたり振り向いたりしたらダメなんだらうやつと。

「じゃ、俺は先に寝るから後頼んだ」

「わかりました」

以外に疲れたので先に寝ること。

翌日、ものすごい事になり、大変な事にあうとも知らず。。。

「ラボ 前編 四神伝奇（後書き）

はい、前篇なので後篇まで続きます。

ちなみにこの「ラボ」の回では第34話以降に考えられている設定を使っています。

簡易的に書くと次のようになります。

- ・ 桜とチビ桜は心の中で話せる。
- ・ 桜とチビ桜の人格はお互いの同意で交換できる。
- ・ 召喚獣とアルの主は瑠璃に変わった。
- ・ 銃型デバイスは既に完成していてチビ桜が所持している。
- ・ ハウスとの仲がさらに良くなり、桜とも仲が良い。

ぐらいですかね。

まあ、今のところはから変更があるかも。

次回は、本当に大変なことになります。

誤字脱字、感想あればお願ひします。

「ラボ 後篇 半動物化3人の悲劇（前書き）

今回は『四神伝奇』とのコラボの後篇です！

「リボ 後篇 半動物化3人の悲劇

翌朝。

いつも通り、少し早起きをした桜だつたが。

「ん? 何だ? 頭の方とお尻のあたりに違和感が・・・」

ベッドから起き上がり、部屋に備え付けられていた鏡を見てみると、そこに移っていた自分の姿は

「なんじゃこりゃああ!――!――!？」

体がまた小さくなっていた。

いや、それだけならまだ良いだろう。薬の効果が切れただけなのだつたらまだよかつた。だが副作用なのか何なのか知らないが、頭には犬の耳らしきもの、お尻のあたりには尻尾のようなものがあつた。

とりあえず触つてみよう。

おお、モフモフするな。

「ぐ、薬…え、嘘だろ…・・・ない!？」

「ん・・・桜さん、おはよー!」れこます

「ああ、じめん、起!」じめん、起つてお前、それじつじた!

「へ?」

起きた西麗の方へ向いた桜。

だがそこへ移つたのは、猫////と尻尾を付けた西麗があつた。

一方西麗は桜の姿に驚いている。

なんで小さくなつているの！？と言いたそうだが、それよりも可愛いから抱きしめたい！なんて顔になつていた。

「ど、とりあえず、お前も鏡見ろつて！」

「は、はい」

小さくなつた桜に手を引かれ鏡の前へ。
そして自分の姿を見てみると

「ここやああああ！……！」

当然の反応であつた。

だが、この声が意外に大きかつた。

当然隊舎じゅうにその叫びは響き渡りやがては人を呼んでしまつた。

「何があつたの！？」

「まさか桜に襲われたんか！？」

「ええ！？桜…」、浮氣は私は許さないよ…」

言葉を言い終わつた後、スペアキーを使い鍵を開ける。

そしてバンッ！…と勢いよく扉を開けたはやて達だつたが、誰もない。声や物音すら聞こえない。気になり奥へ進むが、やはり誰もいない。

氣のせいだつたのか、はたまた夢であつたのか。
わからないまま部屋を出ようとした時だつた。

『――ヤ――』

「――――――?」

「やばい見つかつた!逃げるぞ!――!」

「は、はい!白秋、行くよ――!」

「――ヤ――――!」

ガタンシ!とクローゼットが開けられ、その中から2人と一緒に出てきた。

不意打ちであつたためか、捕まえることが出来ずそのまま逃がしてしまつたが、はやはしつかり見ていた。

小さくなつた桜の頭の犬耳と尻尾、その後をついて行く西麗の頭に付いた虎柄の猫ミミと尻尾を見逃さなかつた。
直感的に、面白い事になる、そう判断したはやはすぐさま行動に出る。

「よし、追うで!他のみんなにも連絡や!」

「わ、わかつた」

「もしかしたら本当に桜が浮氣しとるかもな」

「――?」

はやてがフロイトに耳打ちをした時だった。

違つ部屋から叫び声が聞こえる。

『なんだこれえええ！……』

最速でその部屋に駆け付けたのは雪つまでもなかつた。

s i d e o u t

「あー、いました！」

「うおお、見つかったあー？　へぶつー？」

六課前線メンバー+に追われている最中。

途中で合流した龍清を合わせた3人と2匹で逃げている時だった。

ちなみに龍清には頭にちっちゃな角、背中にはこれまたちっちゃな羽、そして龍の尻尾がついていた。

まさか自分と縁のある動物の姿になるのだろうか。

あ、でも俺のは鳥とか龍とかの方が多いのに何で犬なんだ？はつ、まさかアルフだとでも言つのだろうか・・・。

話を元に戻そう。

一旦休憩を兼ねて情報を整理しようとしていたが、運悪く見つかってしまった。

そして走り出そうとした瞬間、盛大に転んだ。

「うう……痛い……」

「桜さん、大丈夫ですかー?」

「たぶん……」

「乗つて下せー。その体じや走りこでしょ」

「え、でも……」

「捕まつて酷い田逢つかまつますよー。」

「西麗ー早くーあひやひよー。」

「うう……あとで謝るから頼むーー。」

「飛ばしますからしつかりつかまつて下せーね!」

西麗に背負つてもらいながらも再び鬪争開始。

今更だが西麗の脚の速さは結構すごい。これならリナといい勝負だ。今は龍清に令わせているが、最初に俺と走っている時なんて俺が追いつけなかつたほどだ。なるほど、これほどなら実力はあるつて事だな。

そんな無駄な事を考えながらも逃げる道を指示して行く。
途中途中で鉢合わせになるが、何とか逃げ切つたいた。

(お兄ちゃんおはよーー)

(桜、起きたか。悪いがもう少し寝てくれないか?)

(「ん~、何面白いことしてこらるの~」)

(「。。。もう少し寝てくれないか?」)

(「あ、絶対面白っこ」としてるね)

(「今度、体を好きに使わせてやるから少し寝てくれ

(「あーそれならOK……お休み~」)

今の状況で桜が起きたら面倒なことになる。

とりあえず、分の悪い条件だが今を乗り切ることが大切だからよし

とじょい。

「やー」、左

「わかりました」

最終的には外に出た。

あとはあそこに行けば問題はないはずだ。

隊舎の機能が生きているんだ。あそことの機能も生きているだろ。

「降りして」

「あ、はい」

「ほーほー、ふむふむ。お~、いりや使える。よし、これでOKだ
とおも」「追いつめたでーー」「もう、もう、感づかれたか」

「桜、鬼！」はおしまいだよ

「つ、浮氣なんて認めないからねーーー。」

「浮氣って何の話ーー？」

フェイトさん達が追いついてきてしまったようだ。
だが、こっちにはまだ逃げ場がある。
そつそれは訓練場だ。

「逃げるが勝ちさーー！」

「あー待てーー！」

「はははー！訓練場のシステムが生きてて助かったぜーー！イタクア、
ゴーパーン、セットアップーー！」

小さい姿では戦いにくい。
なのでセットアップして変身魔法をかけて身長を少しばかし大きくなる。

ヴィヴィオ達の魔法を見てコピーできたから桜に教えておいたことが
が功を奏したようだ。まあ、本人はいつもの体の方が好きらしいが。

「2人とも、あっちへ逃げるぞーー！」

「「」解ーー！」

既にセットアップ状態だった2人を連れて、訓練場の中へ逃げる。
その後をみんながセットアップして追ってきた。

3対19と4匹つて無理があると思うが、逃げまくつて地道に削ればどうにかできるはずだ。3人チームでも大勢相手に勝てるつて所見せてやる!!

side out

正直今俺は驚いている。

囁託魔導師と言つていたが、あれは本局の魔導師にも絶対引けを取らない。

あの2人は陰陽師というものらしく、俺と同じようにミッドとは違う術式を使つている。

龍清はオールラウンダーだが、どちらかというと援護向きだ。
そして西麗はスピードを生かしたアタッカー。

今現在は教導隊チームとチビ達を倒してしまつていて。

シャンタク、ティンダロス、ハスターの3匹。リナとアウルとリーフ、そして瑠璃、彼女と融合していたアルのチームと、ヴィヴィオを筆頭とした元気な子供たちはいつも簡単に破れてしまった。

俺の教えが悪かつたとかじやなく、相手が悪かつたんだ。
だが、そのせいで大いに消耗している。
そろそろ下がらせるのが得策だろうか。

「2人も下がれ!準備は完了した!」

「了解です!」

「ナイスタイミングです！」

「呪文詠唱完了。仄白き雪の王、銀の翼^も以て、眼下の大地を白銀に染めよ。来よ、氷結の息吹・・・アーテム・デス・アイセス！！」

『ーー?』

はやてさんのは魔法は全部「パー」してある。

無論、こう言った広域魔法は劣化版ではあるが、フィールド形成するには十分だ。

その上、俺には変換資質で氷が付いている。

調整は出来るが、ちょっと大変だ。

「あと。ニークーン、カートリッジロードー！」

『EXROSION』

「星流^{せこりゅう}、流れ星・・・！」

拳を前に突き出した状態で、一気に加速して突っ込む。外しても、切り返してまた突っ込む。だがほとんど避けられてしまった。

「ありや？かすった程度？」

「桜、本当に浮氣していないよねー」

「いや、だから何の話！？浮氣って何のことー？」

フロイトさんが言つてゐる事は未だにわからない。

浮氣といつのはどうしたことだらうか。やつぱりだ。

「ふう、よひやく捕まえたぞ」

「たく、手間かけさせやがつて」

「・・・くへ

後ろの方からシグナムさんとカイータさんの声が聞こえる。
今発言の意味はまさか・・・。

バツと後ろを振り向いたが予想した通りだった。

「桜せ～ん！」

「いめんなせ～い！」

「捕まつたのか！？」

龍清と西麗は捕まつていた。

マジでこの状況からどう脱出しようと？

そんなことを考えてみると肩にポンッと手が置かれた。
あの、ゆさと？なんですか？

「ゆづれないとよ～」

「あせせせ・・・」

「この後3人ともみんなにモフモフされましたとさ。

side out

「また逃げた！！」

モフモフされているのが嫌になつた俺はまた逃げだした。
だが、逃げようとした矢先、西麗に当たつてしまいこれまた転んで
しまつた。

「大丈夫ですか？」

「あ、うん。大丈夫」

「そうそう、桜さんにこれ言い忘れてました」

「？　言い忘れてたこと？」

西麗がちょっと頬を赤らめている。

どうしたんだろうか。

だが、そんなことは次の瞬間考えられなくなる。

チユツ

頬になんだがされた事がある感触が。
え？まさかこれって

「今日はいろいろとかつこよかつたですよ？」

「そ、そつ・・・か?」

後ろからの殺氣に気付けなるほどになっていた俺もちょっと顔を赤らめていた。そしてその後、旧機動六課隊舎に叫び声に似た悲鳴が響き渡った。

おわり。

「リボ 後篇 半動物化3人の悲劇（後書き）

結局オチはこうなるんか！

ごめんなさいハードワード・ニゴーゲート様。
こんなオチって言つた、西麗のキャラを壊してしまって、本当にすい
ません。

誤字脱字、感想あればお願ひします。

第01話 言い忘れてました（前書き）

今作からのオリキャラの名前は『シャナ』としました。
容姿は黒髪の方のシャナと同じです。

性格はシンデレージやないですよー？
桜にベタ甘なだけですよー？

とりあえず楽しんで読んでくれればうれしいです。
その前に設定をどうぞ。

名前：シャナ

年齢：10歳

性別：女の子

身長：ヴィヴィオより小さい

体重：教えたらいつります by 駄作者

容姿：「灼眼のシャナ」のシャナと同じ。

ただし炎髪灼眼ではなく黒髪。

性格：ツンデレではなくお兄ちゃんっ子。
いつでもどんな時でも桜にベタ甘。

世界がどうなるか桜をえいればいこと思つぐりこのグラフ。

デバイス・考案中

術式：近代ベルカ式、炎熱変化持ち

魔力光：紅

眼の色：桜と同じ

髪の毛：同じ

趣味、特技：運動、魔法の練習、剣術（シグナムも高評価）、ストライクアーツ（桜＆スバル直伝）、他いろいろ

好きなこと：桜、桜の料理、と言うか桜に関わること全部（笑）

最近は桜のベッドで一緒に寝ること。

一番好きなのは桜が作るメロンパン。

第01話 言い忘れてました

JJS事件、および機動六課解散から約4年。
また桜の花が咲く季節がやつてきた。

つい1ヶ月ほど前のことだ。

俺の住む家（一人暮らし）に新しい家族がやつてきた。
名前はシャナ。

家族を失い、1人なあの子を見ていたらなんだか昔の自分と重なつて見えてしまい、つい声をかけてしまったのだ。
1人になって、誰も守ってくれなくて、誰も信じる人がいなくて、いつも不安でしょうがなかつた。

最初は俺の事警戒してたんだけど、だんだん慣れてきて普通に接してくれるようになつた。

で、「一緒に暮らさないか？」って言つたらOKしてくれた。

意外にあつさりかもしないけど、気にしない。

『つて事になつたんだけど、エリオとキャロ、特に桜は聞いてたりした？』

「俺はヴィヴィオだけ1年近く直接会つてないんで良くわかんない
ツスね。大人モードつて単語は聞いてたんですけど、まさか変身制
御とは・・・。流石ヴィヴィオだな」

『僕達も桜と同じですね』

『やつぱりー？』

今はヴィヴィオが初等科4年生になつたといふことでデバイスを渡したことと、変身制御のことについて話している。

「まあいいんじゃないですか。ヴィヴィオはあれでしつかりお兄ちゃん誰と話してゐる〜！」　ちょーしゃな、いきなり飛びつくな

『』・・・『』

『桜、その子は・・・』

「あれ？言つてませんでしたっけ？1ヶ月前から俺が引き取つて一緒に住んでるって」

『聞いてないよー』

「えへ、じゃ今言いました

『わつこいつ問題じゃないからねー』

今思ひだした。

そう言えばどう報告しようか迷つて結局投げ出したんだった。
それなりフロイトさんの驚きもわかるな。

「お兄ちゃん、誰と話してゐるの？」

「うん

「ん〜。俺の大切な人と親友さ〜。こんど会わせてやるからな

『そう言えばみんな、お仕事の調子はどう?』

『今日もホントに平和でしたよ』

『今やつてゐる稀少種観測も、もつ少しで一段落ですから、来月にはフェイトさんの所に帰れそうです』

「俺も特に異常はないですね。教えるみんな筋がいいですし。それと俺の方もあとちょっとでこいつの教導が終わりなんで、来週かその前辺りには帰れますよ。シャナと一緒に」

『ホント? それじゃ、私も休暇の日程調節してみるね』

「どうか2人で出かけますか?」

『うん』

「ふ~。私も一緒に行く~!~」

「シャナは来週から学校だろ。その内どうか連れてってやるから我慢しろ」

「ふ~」

フェイトさん親子の定期連絡+ での連絡を切つてから今夜の食事をどうするかをすっかり忘れてた。

実は連絡が来るちょっと前に帰ってきたから食べてないんだった。

「シャナは何が食べたい?」

「お兄ちゃんの料理…！」

「つまりなんでもいいんだな

「うん…」

（数分後）

「はい、出来上がり

「おお～…早～い…！」

「それでは

「「「いただきます」」

この後普通に飯を食べて風呂に入つて寝た。
風呂に入つてるときにはきなりシャナが入ってきたからビックリした。

第01話 言い忘れてました（後書き）

ちょっと短めの一話でしたがどうでしょうか？

なんだか2人目の妹がいたら楽しいんじゃないかなって思つたので、
シャナを描きました。

最近久しぶりに「灼眼のシャナ」を見てたら釘宮病に侵されてしま
い、口リコ げふん！ げふん！ になってしまい、友達からは「口
ン」というあだ名を付けられました（笑）
あだ名の由来は、まあ、そのまんま시스ね。

とつあえず感想お待ちしております。

第02話 引っ越し前日（前書き）

どうも楚良です。

今日、スター式のちょっとだけ細かい設定を考えました。
はどうぞ。

名称：スター式

戦法：圧縮魔法主体

対人、対軍

接近、後方、援護

タイプ：オールラウンダー

使用可能魔法：全て。

圧縮魔法はミッド、ベルカよりも数倍
召喚魔法も同じく（ただし転送は除外）

代表魔法：アトランティス・ストライク

レムリア・インパクト

戯曲「黄衣の王」

他桜の作った魔法。

備考：桜だけが使える魔法。

圧縮魔法が主体のため魔力が多い人向け。

空氣中にある魔力も使えるが未熟な者には使えない。
桜のストライクアーツの技にも応用されている。

D S A A インターミドル参加時は使わなかつた（完成していなかつた）が翌年に完成している。圧縮魔法主体のためインパクト時の威力が半端ない。手加減する場合は数秒の圧縮で十分らしい。教導隊では圧縮魔法の使い方を教えてほしいとの声が経たないとか。

第02話 引っ越し前日

「と書つ」)とで今日は明日に備えて引っ越しの準備をします

「六四」

フェイトさん達との連絡の数日後。

俺は休暇をとて引っ越しの準備をすることにいたた

明日はなつたのは、意外に早く教導隊のみんなが俺の一二三番を終わらしてくれたから。

「ついでに買いだしてシャナの勉強道具他を買いたいと思います」

「やつた～～！！」

「よし、じゃ最初にシャナは自分の荷物まとめな。俺は違うところへやるから」

「うん！」

何故か朝からテンションの高いシャナ。

スバルさんか来たってのもあたのかしーも以上だ
現在は朝8時。

今日中に全部まとめておかなきや明日が大変だ。

』
』
』

まあ、助かつたところがいくつかあつた。

俺が住んでいたのが一軒家では無かつたことだ。

一番下の階の一番大きな部屋を借りていた。

そのおかげかシャナが来ても不自由がなかつたし、逆に1人じゃちよつとせびしいんじやないかってぐらいだった。

「お兄ちゃん終わったよ！」

「おお、早いな。じゃ、今度はこっちを手伝ってくれるか？」

「了解！」

（数時間後）

時間はだいたい午前1時。

シャナも手伝ってくれたおかげで早く終わった。

荷物もあんまり多い方ではなかつたので早く終わるのも頷ける。

「お腹すいた」

「だつたらどうか食べに行くか。ついでにシャナの勉強道具とか買うからな」

「やつたー！」

「よし、じゃ、出かける用意しり

「うん」

（数分後）

「しつかりつかまつたか？」

「うんー。」

「じゃ、飛ばすから絶対に離すなよー。」

ついこの前取つたばかりのバイク免許。
そのついでに自分用のバイクを買つていおた。
シャナが来るちょっと前辺りに買つたバイク。
サイドカーは・・・高いから買つていない。

それにしてもシャナのつかまる力が強いな。
はつきり言つてしまえば少し痛い。

気にはしないし、しつかりつかまつてもらわないと大変なことにな
るから何も言わないが、力加減があるものじゃないのか？

そんなことを考えながらバイクを飛ばしていたら目的の場所に着いた。

街の大きなデパート。

中には食事が出来る場所もある。

「さ~て、何食べようかなあと」

「あれがいいーーー。」

「ん?あ~、あれか。俺は何でもいいし、あそこで食うか

「うんー。」

シャナが指をさした場所は最近話題になつていいチェーン店。
時間が良かつたのか、運が良かつたのか意外にすいていた。

すぐさま店に入つて注文をした。

後は待つていいだけだったが。

「てめえー！俺にぶつかつといてただで済むと思つてんじゃねえよなー。？」

「！」、「あんなさいーわ、わざとひま」

「調子乗つてんじゃねえよーの野郎……」

店の中でちゅうとしたございじやがあつた。

トイレに行こうとした青年が店に入ってきた男にぶつかつてしまふ、男の方がキレイこる状態。面倒なことだ。

それにあの人、困つてそつだし助けるか。

「シャナはいりでじゅとこへり」

「ふえ？あ、うん」

静かに2人の元まで歩いて行く。

他の客は黙つて見てくる。

何かされたら怖いからだろ？。

「おー、おっさん。そいつ謝つてんじゃねえか。わざと放してやれよ」

「あん？なんだてめえ。俺に喧嘩売つてんのか？」

「わあな。とりあえず、そいつ放してやれよ。謝つてんだしよ」

「何でお前なんか指図されなきゃいけねえんだよーーー！」

そつ言いながら男は殴りかかってきた。
やつぱり、こいつのつてあえてくらつて正当防衛を成立させる方
が楽なんだよな。

「ぐ、ぐつだ。まあみろ」

「あ～、こつこつ。そつちから手え出したんだから後悔すんなよ？」

「は？」

「それとひとつ忠告だ。場所が悪ければ死ぬほど痛いから我慢しろ
よ」

「な、ちゅ・・・」

「烈空拳・・・」

「がはつ・・・」

3年ぐらい前に完成したスター式ストライクアーツの一一番初歩の技。
手に魔力をこめて相手を殴る技だ。

今回はまあ、一般人相手と言つことで2秒ぐらいの圧縮で十分だつ
た。

「えらいな。動いたらもつと痛かったぞ？次からはあんまつこう
いふことをするなよ？」

「は、はい」

この後なんだかデジャヴのようなものを感じた。
後ろの方から歓声がわきあがる。
うん、確実にデジャヴだ。

注文していたものがやつてきて2人で美味しく頂いた後、シャナの制服他を買って帰る事にした。

あのチンピラぶつ飛ばしてから妙に気分がいい。
なんて言うか爽快感だ。
でも、あんまり人を殴るのは良くないな。

かたづけの終わった家（部屋）に戻つてみると俺は一人今日買った荷物をまとめた。

シャナは今は風呂に入っている。
そうだ、まだ、あれをやっていなかつたな。

「ああ、W、ST。今日こそあれをやるぞ……」

『ま、待つて下さいマスター……』

『そうです！待つて下さい！…』

「何を言つているーもう一ヶ月以上待つてやつたと言つのこ、まだ待てと言つのか！？」

『ですが！』

第02話 引越し前日（後書き）

どうでしたか？

途中で出てきた『烈火拳』は桜流ストライクアーツの技の一つです。他にも色々考えて出して行きたいと思います。

そして最後に改造されたWとST。

一体どうこう姿になつたかは後のお楽しみです。

ひとつあえず楽しく読んでくれたのであれば嬉しいです。
感想等お待ちしております。

第〇三話 早速やるつか（前書き）

どうも楚良です。

前に投稿したキャラ紹介を編集しました。
桜とシャナのデバイスの事とかを描き足したんで良かつたら見て
ださい。

これを見る前に見て下さるとちょっとは楽しめると思います。

第03話 早速やるつか

改造が続いて翌朝。

「ふう、ようやく出来た。新デバイスだ」

WとS-Tが解体、改造された状態から造られた新しいデバイス。
WとS-Tの記憶とかは残したまんまだからたぶん使いやすいと思つ。
名前は 考え中だ。

「うへん、お兄ちゃんおはよー」

「おお、おはよ。今、朝一はんの準備すっからな。その間に顔とか
洗つて制服に着替えな」

「うへん

今日から、ヴィヴィオが通つている「S-T・ヒルデ魔法学院」にシャ
ナを通わせることにした。
いろいろと学んでほしいし、友達も作つてほしいとか、いろいろ考
えた結果こうなつた。
ま、本人が楽しんでくれればいいっていうのが一番なんだけどな
あ、今新デバイスの名前思いついた。

「よし、今日は肩慣らしも含めて氣合を入れていくぞ。ZERO

『イエスマスター』

（数十分後）

現在俺は「St・ビルデ魔法学院」に向かっている。

最初にシャナを送つて行くのが目的だ。

帰りはヴィヴィオと一緒に帰つてこいつて言つてある。
自宅（母さん達が住んでいる家）には送つた後だな。

学校が近づいてくるにつれ登校する生徒が増えてくる。
そのせいかちょっと注目されぎみだな。
だがその中に久しぶりに見る顔があつた。

「お~い、ヴィヴィオ!!

「あ、お兄ちゃん!!」

小さめのツインテールをした金髪、虹彩異色の少女。
俺のもう一人の妹のヴィヴィオだ。

「あれ？ その子は？」

「ヴィヴィオには言つてなかつたな。新しい家族のシャナだ。お前
と同じ10歳だから仲良くするよう！」

「うん」

「それとシャナはここからヴィヴィオと一緒に行きな。俺は母さん
達の所に行くからせ」

「うん。」

「それじゃ、今日からちゃんと勉強するよ!」

2人が見送る中ロターンして自宅へ向かう。

そう言えば、コロナは元気してるかな？

あいつとも会つてないからちょっと気になるな。

side out

さつき突然あんなこと言われたけど、なんだか久しぶりにお兄ちゃんに会えてうれしかったな。

それに新しい家族が出来てやるうれしいよー

「ヴィヴィオ、おはよー」

「あ、リオ、コロナー！」

「あれ？そつちは？」

「シャナって言つんだ。よろしく

「よろしく

「よろしくなー。」

そう言えば新しい家族って事は今日から一緒に暮らすんだよね？
だったら私と一緒に部屋つてことかな？

side out

「何で」「いつなつた？」

現在俺はシャナを送つてから家に荷物を置いた後。
フェイトさんが家に居て少しラッキーだと思ったのだが・・・。

（回想開始）

「ただいま～」

「あ、桜おかえり」

「あれ？ フェイトさん、今日せどりうしたんですか？」

「今日はお休み取つておいたんだ。べ、別に、桜が帰つてくるから
じゃないよー？ た、たまたまだからねー！」

「はあ。で、どうして休みを？」

「え、えっとね、ハ、桜がいつ帰つてくるかわからなかつたから、
その、とりあえず取つておいたつて言つかその・・・」

「つまり俺が帰つてくるから休みを取つておいたんですね。それが
偶然今日で重なつたつてだけだと」

「・・・うん」

「つまりは俺が帰つてくるからですか」

「え、えっと、あの、その」

「じゃ、どうか出かけますか。久々に」

「へ、うん」

「回想終了」

つてこれは成り行きじゃないか。

それとこの後何故か花見に来ている。（歩き）

どうしてこうなったかつて？

と誰つかどういう状況かを詰め込む。

俺は今、めりやくめりや幸せだけ死にそうです。

うん、フロイトさんめりや近い。

隣に居るじやなくて近い。

腕に抱きつくる良いけど力加減考えて。

そして腕に当たつてるから。

何がつてあれだよ、あれ。

お だよ。

（申し訳ありませんが作者がまだ15で描いたらいけないんじゃないかな
いかと思つてゐるので自粛させていただきました。わからぬ方は
諦めるか誰かに聞いてください）

しかもなんだかちょっと泣かれてきましたよ。
うん、幸せだけど死にたい。

「どうしたの桜？顔色悪いよ？」

「大丈夫ですよ。たぶん」

「それにしてもきれいだね」

「そうですね。やっぱ桜の花はきれいじゃないと」

「本当に大丈夫？」

「す、すいません。ちょっと徹夜してたもんで。な、ZERO」

『その通りです。マスターは徹夜明けです』

「あれ？ そのデバイスって」

『私はWとSTが元のデバイスで、マスターに改造されて1機のデバイスにされたのです』

「つて事は」

「俺が作ったデバイスですよ」

「す、じよ桜！ これならデバイスマスターも夢じゃないよーーー！」

俺は空戦魔導師でデバイスマスターになる気はありませんよー。それに教導の方もあるし。

「さ、とりあえずなんか食べましょうよ。俺、腹減つてんですよ」

「うん」

花見の時期だと「いつ」と意外に屋台的なものもあるものだ。

足りなくなつた飲み物を買うためとかすぐ食べれるようこうこう
売つてある。

ホント、楽しいや。

久々だし、でも、ある意味死にそうだ・・・。

「あ、そういうえば俺、教導隊の方に挨拶行かなきゃな」

「え？ そうなの？」

「はい」

「そつか～」

「あの、そんな今にも泣きそうな眼をするのをやめてくれませんか。帰つてきたら美味しい物作つてあげますんで。もちろんリクエストがあればなおせり」

「なんだか子供を相手にされてるみたい」

「えー？」

「食べ物で釣つてくるなんて、私が子供みたいに扱われてると思つ
んだけど」

実際、シャナを1ヶ月間相手をしていて癖がついたか食べ物を良く
使つてしまつよくなつた。

うん、子供扱いされると思つのも無理はないな。

「えへ、ジヤ、今田、ジヤダメですかへ。」

「ホントー、あ、いや、でも

「ま、嫌ならしいんですけど。どうすりや機嫌直してくれるかな？」

「今田、二二二?」

「はい」

なんだろう

フエイトさんの扱い方がわかつたような気がする
俺限定でだけど。

備限定でたにと

とりあえずバイクで家まで戻つて、フロイトさんを家まで送つた後に母さんのいる教導隊へ向かう事に。

しかもシヤナとは違い、背中におが当たって、精神が持つか

なんでかつて？思春期だからだよ。遅いと思つけど。

つてなわけで着いたぜ教導隊。
とりあえず挨拶しつくか。

「あ、あのー。」

「はい？」

「た、高町 桜一等空尉ですか？」

「やうだけど・・・」

「うわ―――！本物の『翼の英雄』だ―――！あ、握手して下さい！」

「いいけど。君は？」

「あ、申し遅れました。僕はこここの訓練生の『サジー』お前あれ終わつたのか！？」　「げ！忘れてた！あ、握手ありがとうございました！」

「お、おひ。なんだかすげー元気なヤツだつたな」

教導隊で最初に見たのがあの元気っ子。だいたい11歳からそのあたりだらう。ま、その内また会えるだらう。

今は母さん達に挨拶が先だ。

（訓練スペース）

現在訓練スペース。

ちょっと遠くから見てます。

母さんと、あればヴィータさんだな。
頑張ってるな。

あ、終わつたみたいだ。

行つて挨拶するか。

「お～い！」

『？？？』

「あ、桜！？」

「お前どうして！違う教導隊じゃなかつたのかよ」

「終わつたんでこいつち戻つて来たんですよ。だから挨拶しに」

『おい、あれ翼の英雄じゃないか？』

『あの二代目ヒース・オブ・ヒース！？』

『すげえ！俺、初めて生で見た！..』

俺ってそんなに有名？

翼の英雄つて異名は一応認めてるけどそんなに広まつてるのは
イスなんだな。

ま、とりあえず俺は結構有名な訳ね。
あの人の中へ。

「どうせだから模擬戦でもしてみる？」

「誰と？」

「誰でもいいけど。そうだな、じゃ母さん相手してくれる？久々
に全開で」

「えへ、でも」

「見るのも勉強」

「ん~、じゃ、いいよ。それに久々だけ全全力全開で行こうつか。リミッター付きだけど」

「一応言つておくけど、俺の『テバイス』が変わつても文句言わないでね」

「え?」

『中継回せーー! 今から親子対決が見れるぞーー!』

『急げ! 教導隊全部に回せーー!』

『了解ーー!』

妙に周りが騒がしいな。

でも全力なんて久々だから盛り上がるのも無理ないか。
とりあえず隊舎を破壊しない程度に行きましょうか。

第04話 家族がそろった（前書き）

やつと更新できたーー！

現在アーキの携帯で執筆中。

俺は高城に住んでいるからこれでしか更新できないんです。

ま、とりあえず頑張って生き延びるの応援よろしくお願ひいたしますーー！

第04話 家族がそろつた

教導隊。ここで桜となのはの模擬戦が始まろうとしていた。

「それじゃこれからなのはと桜の模擬戦を始めるぞ」

「さ、ZERO。相手は母さんだ氣合を入れろよ」

『イエスマスター』

「では、始め！？」

ヴータの合図と同時に一人は動き出す。
先に仕掛けたのは桜だ。

「それじゃ、早速いきますか」

『サイズフォーム』

「え！？ こきなり！？」

ZEROの新フォームの一つ。

黒い鎌へ形を変えてなのはへ迫る。

その攻撃を驚きながら簡単に防ぐなのは。
防がれた桜は距離をとる。

「やっぱ簡単にはいかないか」

「うちはそつちの手の内を知らないのに簡単に言わないで欲しい

な

「…ひこみがいも通りいかせてもらひます。NERO-」

『イエス。ツインソード』

こんどはライオットの代わりに作ったフォーム。
小太刀ではないが二刀流もつかえる。

RHT

アクセルシユーター

無数の魔力弾は桜に襲いかかる。

だが

「な!? バインド! ?」

斬ると防ぐのに集中している間に捕まってしまったのだ。

「ちょっと早いかもしないけど終わらせてもいいかな」

גָּדוֹלָה

「うん。マジだよ」

『一ノ山』

「エクセリオン」

「なんてね」

砲撃を放とうとしたときだつた。
バインドで捕まっているはずの桜はガラスのように砕け
後ろに回り込んでいる。

「あ」

「形成逆転！アトランティス・ストライク！－！」

こうして少し早めだが桜となのはの模擬戦は終わつた。
この模擬戦は教導隊全部に映像として放送されたのだつた。

「桜の幻術のことすっかり忘れてたよ」

「俺は簡単に捕まつたことが少し悲しいよ。急いですり替えたから
よかつたものの」

「それじゃ、みんなは訓練再開ね」

『はい……』

「じゃ、俺は帰つて夕食の用意してみるよ

「ホントー？」

「リクエストは？」

「特にないかな」

再び隊舎の中。

歩いてくるとまたあの少年がいた。

「君、やつれの」

「あー桜さんー。やつらの模擬戦とでも凄かつたですーー。」

「ありがと。それと君の名前、まだ聞いてないんだけど」

「あ、申し遅れました。僕、サジ・コットナーって言こます

「よひじくサジ。俺、今日せむり帰るからまた明日な

「はーー。」

（血弾）

教導隊の帰りに夕食の材料を買ってから帰宅した。

家に帰るとフロイトせんだけではなく、ヴィヴィオとシャナもいた。

「お兄ちゃん、お帰りーーー！」

「うわーー。シャナ、かやんとカイガイオと申敕へやつてたか
？」

「うさー。」

帰つてくるやいなやシャナが飛び付いてきた。

「や、夕食の準備準備」

「あ、手伝うよ」

「いいですよ。今日ぐらい俺が全部やりますから」

約1時間30分後

ただいま

お帰り

「あれ？ 桜、この子は？」

「……でなかたけ？新しい家族のシヤナたよ」

「シヤカです！」

なのはは啞然としていた

「ま、細かい話は食べながらこいつよ」

～食事が終わりお話し中（シャナとヴィヴィオはお風呂）～

ג' יוניברסיטי

「アーリーはいたんだってんだ」

なのはとフロイトにシャナを引き取った理由を話した桜。

二人ともちゃんと納得してくれて一安心だ。

この後風呂に入った。

そしてまさかのフェイトが入ってきて桜が鼻血をだしたそうだ。

第〇五話 朝は時じて地獄に変わる（前書き）

今回はかなり短めです。

ちょっととしたスランプ的なものに陥ってしまったので向も悪いつかないんです。

でも楽しんでくれればうれしいかな？

それにしてほのぼのも考えるのって大変ですね。

では本編へびりつ。

第05話 朝は時として地獄に変わる

ある日の夜中の1時。

高町家、桜の部屋。

「ふう、流石にデバイスを一から作るのは大変だな」

今夜はシャナもフェイトも違う部屋で寝ている。
徹夜でシャナのためのデバイスを作っていたのだ。

ちなみに材料はといふと。

自分で集めたガラクタ

+

シャーリーとマリーに貰った部品 +

「あとはシャナがいろいろ設定をすればいいか。俺はもう寝る…!
休み取つておいてよかつた…」

机の上にデバイスを残し桜は眠りについた。
この時桜は気付いていなかつた。
ドアの向こうに誰かがいる事を。

（翌朝）

だいたい時間は8時^じ。

シャナとヴィヴィオはすでに学校へ行つていて、さうになのはそもそも教導隊へ行つてしまつてゐる。
なので現在は桜とフェイトしか家に居ない。

「ん？」

顔に何やら柔らかい感触を感じながら桜は目を覚ました。寝ぼけている状態なのでその柔らかいものが何かはわからない。だがいい感触なのでそのままにしておいた。声が聞こえたのだが

「ん、桜……」

「……え？」

「もうひとつと寝といひな……」

「うわっ！」

いきなりがつちつとホールドされた。
え？俺、誰にホールドされてるの？

寝ぼけていた頭はすでにフル稼働していた。

昨日は徹夜でデバイス作り。

シャナは一緒に寝ていない。

フェイトさん達は先に寝ている。

起きたらしい感触＆ホールドされてる。

あれ？

俺、誰とも一緒に寝ていないよな？

それと今何時だ？
て言つたこの人だ

「桜、そんなに抱きつっちゃダメだよ・・・。

・・・。

フェイトさんか。

抱きつかれてるのは俺なんだけど・・・。

何の夢見てるのフェイトさん？

俺が何かしてるの？

といつかこの人抱きつく力強！！

俺、抜け出そうにも抜け出せないんだけど。

しかも顔に、当たってる。

柔らかくていい匂いだ。

つていかんいかん！！

俺は何を考えているんだ！！

「うへん

「ふあ、ふえいふおふあん。ふおふいまふいふあ？（あ、フェイトさん。起きました？）」

「・・・えへへ、桜だあ」

「むぐう！！」

起きたかと思つたらせりて抱きつく力が強くなつた。
しかも顔がにやけている。
よほどいい夢を見ているのだう。

「わわ――――――――」

「ふあふえふあ、ふあふえふあふあふふえふえ——!——!（誰か、誰か助けて——!——!——!）」

（2時間後）

やっと解放された俺。

精神面がもう持ちそうにないよ。

「えつと……」「メンね？」

顔が胸に当たって息が難しかった俺。

ちょくちょく息継ぎ出来てたからよかつたけど、もし出来なかつたら俺死んでたんじゃない？

「ハ、桜？」

そう言えばシャナに『デバイス渡すのすっかり忘れてたな。徹夜したから寝過ごしちまった。帰つてきたら渡すか。

「ホント、ゴメン！ 嫌いにならないで——！」

「うわつ——！」

突然フェイトさんが抱きついてきた。
何で？

「ゴメン、だから」「

「何言つてんですかフヒイトセニー?」

「え? 怒つてないの?」

「いや、怒る理由ないの怒るつてただのヤツだつじや・・・つて違くて、俺は怒つてませんよ?」

「よかつた。返事してくれないからもしかしたら桜に嫌われたと思つたから」

「はあ、そんなわけないじゃないです。でも、次は氣をつけ下さいね?」

「うそー。」

第06話 無口な少年（前書き）

今回は一気にオリキヤラが増える！！

5人ぐらいかな？

1人はほとんどどうでもいい人だけど。

第06話 無口な少年

「え？ 新しい訓練生？」

朝の出来事。

当然言い渡された事だった。

「数名なんだけど頼めるかな？」

「まあ、いいですけど……」

「なんだか不満そうだね」

この上司の如前はマリナ・ストライク。

不満と言えば不満だ。

いきなり押し付けられたって感じがして仕方がない。

「大丈夫ですよ。ちゃんと教えますから」

「うむ、では頑張ってくれたまえ」

こんな感じで俺とあいつらの出会いは始まった。

とつあえずマリナから新しいメンバーを教えるとの「命令」が下った

ので早速ロビーへ。

どういうメンバーか確かめてみないといけないからな。

「ふむ、4人か」

ロビーへ行けばもうすでに集まっていた。

男女2人ずつのバランスのいいメンバー。

「とりあえず自己紹介してもらえるかな？あと、得意な事とか」

「リーフ・ブレイドです！得意なのは身体強化と剣術です！」

「リナ・ストライクです。得意なのはストライカーツです

「ん？ストライク？
つて事は……。

「お前、まさかマリナの妹か？」

「はい、確かにこの教導隊に居るって聞いてますけど」

「そうか。

マリナが俺に押し付ける理由はこれが。
それにしても妹がいるって初耳だぞ。

「雅瑠璃みやび るりです。えっと、得意なのは補助とかサポートです」

「地球出身なのか？」

「はい、父親がそなんです」

「そうなのか。えっと最後は」

「・・・」

「えっと、自己紹介してくれる?」

「・・・・・アウル・オーシャン。・・・精密射撃

「よし、自己紹介すんだな。俺は今日からお前たちを教える事になった、高町 桜だ。よろしく」

全員の自己紹介が終わり早速訓練スペースへ。

とりあえず今日は全員の実力を知るため模擬戦をやろう。

「今回は俺との模擬戦だ。4人がかりで俺を撃墜しろよ。ちゃんとしたチームワークを見せてくれよ」

「「「「はいー」「」」

「・・・」

（模擬戦中）

「せいいつー」

「うわっ」

「ほり、リナ、足とられない。転んでるついに攻撃来るぞ」

「はい！」

「おひやあああ……」

リナの相手をしている間に後ろからリーフが来る。だがそれをソードにしたZEROで防いだ。

「いい太刀筋だけど、まだまだ甘いなーおらよつとー！」

「おわっ！ー！」

剣をすらして流してやる。

バランスが崩れた所に軽く蹴りを入れて距離を取った。

「全員いい動きしてると。まだまだあまちゃんだけど伸びしろがある。それにしてもアウルはどうこいつ！？あぶね！」

いきなり顔面狙つて魔力弾が飛んできた。
しかしどこから飛んできた？

アウルの姿は見えない。

「・・・。そこかー！」

アウルがいた場所は俺の真後ろの瓦礫の中。

魔力弾が飛んできたのは俺の真横。

つまり、俺に居場所をばらさないようにするため兆弾させたってわけか。

瓦礫を撃つて破壊。

その際にアウルも撃墜完了。

残るはリーフ、リナ、瑠璃の3人か。

（模擬戦終了）

全員撃墜完了。

少しリーフが粘ってきたから手こぎずつたな。

「よし、今回の模擬戦から見てまず言える事どんどん行って句からしつかり覚えろよ」

「……」

「……」

「まずリーフ。粘るのはいいがもつと考える。さつきみたいに何度も流されて隙作つてると簡単に倒される。動きのバリエーションを増やせるようになれ。どんな事態にもすぐさま対応できるようになるとなおいい」

「はい！」

「次にリナ。問題は足場の確保だな。何か先天魔法でも使えるといいんだけど、それはその内俺の知り合いに教えてもらうとして。もう少し形をコンパクトにした方がいいな。あと、防御もしつかりするように」

「はい！」

「次は瑠璃。お前は補助役なんだ。あんまり前に出すすぎるな。無理

だと思つたらすぐに下がれ。あと、狙われてるってわかつたら逃げ回るんだ。それ以外は結構良かつたぞ」

「ありがとうござります」

「最後に」アウル。お前は仲間に頼らなすぎだ。上下左右、全部があ前の味方なんだ。その事をしつかり頭に入れて単独行動は控える事。せつかく精密射撃が出来るんだ、それを生かして仲間を援護してやれ。わかつたか？」

「・・・（ノク）」

全員に指摘できるところを指摘して個人スキルに入った。

リーフは太刀筋やいろいろ、特に剣術に力を入れる。
リナの場合は俺との組み手。

防御をしつかり入れてコンパクトな動きに仕上げるための対人戦闘。
瑠璃は体力向上。

いろいろな補助魔法の習得訓練を。

アウルは精密射撃をもつと正確に、もつと早く撃つための訓練。
そして出来る限り相手に場所を気付かせないようにするための阻害魔法習得を目指す。

「マリナ、ちょっといいか？」

『なにか？放棄なら君の首が飛ぶけど？』

「なんことするわけないだろ。アウルの事だよ

『あー、その事？』

「そうだよ。何があつたか教えてくれ。無口なのは別に構わないんだが、気になつてしまふがないんだ」

『いいよ。えつとね という事なんだ』

「それで」

『そ。ま、あとは自分で頑張つてね。それじゃ

一方的に通信を切られた。

こういう行動がむかつくな行動の一つになるのも知らないで。

それにも似てるな・・・。

シャナに似てるな・・・。

親を事故で亡くして以来無口になつた。

人との関わりを亡くしている、か。

しかも前の教導隊では言つこと聞かなかつたつて。

無茶しまくつたつて事も。

なんだこれ。

俺やティアナさんみたいじゃねえか。

だつたら慰めてやるか。

（勤務終了）

「おい、アウル」

「・・・？」

「お前、今日俺の家で飯食つてけ

「・・・何で?」

「いいからいいから。俺の家結構近いから寄つてけよ

そう言いながら半ば強引にアウルを家に連れて行つた。
アウルも最終的には自分から行くかのように歩きだしていた。

「ただいま~」

「「おかえり~!」」

「お、お邪魔します・・・」

「おかえり~ってそのまま?」

「俺の生徒の

「アウル・オーシャンです・・・」

「寮で暮らしてるらしいから寄つて飯食つて行けつて言つて連れて
きた

「そりなんだ。ゆくつして行つてね」

「は、はー」

高町家の歓迎を経てリビングへ。
年が同じといふことでヴィヴィオとシャナが相手をしている。

「何か食いたいもんあるか？何でもいいぞ」

「……え、いや……」

「遠慮すんなひて」

「え、えつと……」

「ハンバーグ！」

「おひーーいぜー！アウルは？」

「じゃ、じゃあ、僕もハンバーグで」

「おひしゃ、んじや、ちゅうと待つてりよ。めひかや美味しいの作るかんな」

～30分後～

「はい、完成」

「……わあ」

「気合い入れすぎたな。

ちょっと豪華にしそうだな？」

冷蔵庫の中身は・・・明日頃に出しに行かなきゃな。

「お代わりもあるからな。たくさん食べててくれよ。母さん達も」

「「「いただきまーーー！」」

「「「いただきます」」

「い、いただきます」

「じゃ俺も、いただきます」

「もぐもぐ。うぐ。お、美味しいー！」

「だろ？そいらへんのプロ顔負けだからな」

このあとも食事は続いた。

アウルが食べ過ぎて喉に詰まらせたりして大騒ぎ。
楽しい食事会だった。

「ほ、僕はこれで」

「待てよ。風呂入つてけ。頭洗つてやるからよ」

「え、でも・・・」

「いいからいいから。寮にはシャワーしかねえんだろ？」

「う・・。でも・・・」

「いいから入つていけって」

またもや半ば強引に誘った俺。
「いつ、押しに弱いな？」

で、風呂の中。

「マコナから聞いたぞ。お前、事故で両親亡くなしてんんだって？」

「・・・」

「いつこう風に誰かと一緒に飯食べたりしたの、久しぶりなんじやねえか？」

「・・・」

「前の教導隊では大変だったらしいな。言ひ」と聞かないで無茶やつたつて」

「・・・」

「実はな、俺もやつなんだ」

「・・・。つて、へ？」

「俺な面倒さんとかの言ひ」と聞かないで無茶やつて大怪我したことあんだ」

「桜さんが、ですか？」

「ああ。だから俺とおまえは似た者同士だ。言ひ」と聞かないで無茶やつたどうしな」

「・・・」

「あ、泣きだしちつたか。
ま、うれし泣きだらうな。

「いつでもいいんだ。いつでも家に来い。来たら暖かい飯と風呂入
れといてやつからよ」

「・・・うん」

「お前が1人がいやだつて言つだつたら俺がお前の家族になつてや
る。だから、無茶とかしなくていいんだ。俺がついててやるから」

「・・・だ、だつたら」

「ん? なんだ?」

「こ、兄さんつて呼んでもいい?」

「おひ、好きなように呼べ」

「風呂上つ~

「あ、ありがと!」わざました

「いいのか? バイクで送つてやるけど」

「大丈夫です。今日は本当にありがと! わざました」

「やうか。じゃ、明日な

「はい。お休みなさい、兄さん」

これからもつとあいつらと仲良くなるつ。
そう心の中で1人決意した俺だった。

第06話 無口な少年（後書き）

次回！

アウルたちのキャラ紹介！！

第07話 霸王現る

「これの最終調整をしてたりあかり夜中になつちましたな

またもや夜中。

シャナのためのトバイスをまだ渡していなかつたためビーチセだから最終調整をしようと思つていたら夜中までかかつてしまつた。

「・・・トジャヴか・・・よし、鍵でもかけておこうかな~」

ドアの向こうでガタソシヒ音がした気がする。
開けてみると真っ暗。

だが

「何やつてんだシャナ」

「え、えつとトイレ

「トイレあつちだね」

「あ、そつか

「うやんと寝るんだわ~」

ドアを閉めてからちよつとあたる。
そこには

「やつぱりか。何やつてですかフロイトさん

「え、え？ トライ」

「トイレは逆方向ですよ？」

「あ、そうだったね」

「ねじりみなれ」

ドアを閉めて今度こそ寝ようと思つて鍵を閉める。だがその前にいやな予感がしたので音がしないように鍵を開けてみると。

「うーん、どうも、おもしろいなあ。」

「2人とも、安眠妨害というのをご存知かな?」

え！？寝たんじやなかつたの！？」「

「何してんの？」

「「桜（お兄ちゃん）と一緒に寝に来た」」

頭の中で何かがキレる音がした気がする。気のせいかもしれないがちょっと叱ろう。

「いい加減自分の部屋で寝ろや～～！――！」

2人を部屋の外へ放り出し鍵を3重ぐらいかけて寝る事に。

流石にこいつ何度も安眠妨害されてたら誰だつてキレるだろ？

（翌朝）

「・・・何でぞ」

起きたらそこにはシャナとフュイトさん。

どうやつた！

どうやつてあの3重のカギを解いた！

一つはオレしか知らない暗号式だぞ！？

とりあえずシャナを起こさないようにしてどかす。

そして脱出成功！

デバイスを持つて1階へ。

「誰も起きてるわけがないか」

現在朝5時。

みんなまだ寝ている時間だ。

あと1時間もすればみんな起きるだろう。

「あ、あれ忘れてた」

自分の部屋へ戻つて忘れ物を取りに。

3年前DASSインターミドルに出場した時に使つたデバイス。オリジナルで優勝を果たした経験があるもう一つの相棒。

「ユウ、久しぶり・・・か？」

『だいたい2カ月ぶ

じぐりいかな

「調子はどうだ？」

『調整もしてくれないのにそれは嫌味ですか？まあ、良好だけど』

「悪い。今夜してやるからよ」

この後全員起きてきた。

フェイトさんとシャナが「桜（お兄ちゃん）がいない！」って言っておりてきた時はちょっと面白かったな。

シャナにデバイスを渡したら大喜び。

まあ、本当はもっと早く渡すつもりだったんだがな。

今日は俺は休暇を取っていた。

なのでヴィヴィオとシャナと共に聖王教会へ。

そう、1年前から寝たきりのイクス所へ行くことになった。

side out

なんやかんやでついたよ聖王教会。
ノーヴェさん達もいるし、暇にはならないだろう。

「じぐりです」

セインの案内でイクスのいる部屋へ。
そして入ると眠っているイクスがいた。

「久しぶり、イクス。調子は・・・」

手を握つて話しかける。

その手は暖かかった。

「 よやそうだな」

イクスのお見舞いの後。

俺らはウーン”ディ達と会流した。

「みんな”きげんようへ

「ああ、これは陸下

「陸下、イクスのお見舞いはもう?」

「うそ、”ディード。いつぱい話したよ

オットーと”ティードと話しているヴィヴィオ。

そして”アレ”をせりに市街地へ行くこととなつた。

場所は変わつて待ち合わせ場所。

そこには”ロナと新しい友達かな?

「 ロナ、久しぶりだな

「 はい、お久しぶりです!」

「えつと、君は・・・」

「リオ・ウズリーです！」

「よろしくなりオ。俺は高町 桜つて名前だ」

「高町 桜・・・ってあの翼の英雄ですか！？」

「ものすごいびっくりされる。

まあ、もつ壇れてしまつてこるので普通に返そつ。

「ああ、一応な」

この後ノーヴ^{セイナラモア}も自己紹介。

先生だつて聞いてますつて言われて照れてたな。

また場所は変わって中央第4区公民館。
ストライクアーツ練習場。

そつ、”アレ”とはストライクアーツの事だ。
全員が着替え終わつた後練習に取り組むことに。

「さて、ヴィヴィオ。今日は久々に俺とやるか

「うふー・SH^{セイハ}ー・セット・アップー！」

「すみません、じゅりょつと使わせてもらひこめす、

組み手をするとなるとみんなさわつき始める。
中心に来てお互^{シテ}いに構えた。

「行くよ～。お兄ちやん

「どうからでも来い」

少しして組み手は終了。

周りはやつぱりざわめきが収まらないまま。

久しぶりにノーヴェさんとの組み手をやつて今日の練習が終りました。

「悪い、チビ達送つてやつてくれ

「いいッスけど2人とも何かご用事?」

「救助隊の手伝い

「了解ッス」

全員と別れ救助隊の手伝いへ。

そう言えばノーヴェさんと歩くのつてすげー々々な気がする。

そう思つてみると上の方から声が聞こえた。

「ストライクアーツ有段者、ノーヴェ・ナカジマさんと、翼の英雄、
高町 桜さんだとお見受けします。あなた方にいくつか伺いたいこと
と、確かめさせていただきたい事が

第07話 眇王現る（後書き）

次回！

アインハルトと桜が激突！

勝つのはどっちだ！？

ノーヴェは戦いません。

第08話 天に翼 地に霸王（前書き）

約1ヶ月ぶりの更新です。

スランプから若干抜け出してきます。

とりあえず、楽しみにしていた方は楽しんでくれたら幸いです。

第08話 天に翼 地に霸王

「あなた方にいくつか伺いたいことと、確かめさせて頂きたいこと
が」

「質問をするならまずバイザーを外して名を名乗つたりどうだ？」

電灯上にたつ少女にそう伝える。

すると正直にバイザーを外して名乗つた。

「失礼しました。カイザーアーツ正統、ハイティ・E・S・イング
ヴァルト。『霸王』を名乗らせて頂いています」

「噂通り魔か」

「否定はしません」

電灯から降りて同じ目線にしてくる霸王。
そして伺いたいことを聞き始めた。

「伺いたいのはあなた方にの知己である『王』達ついてです。聖王
オリヴィエの複製体クローンと冥の炎王イクスベリア。あなた方はその両方
の所在を知つていると　「知らねえな」　？」

「聖王のクローンだの、冥王陛下だのなんて連中と知り合つた覚え
はない。俺らが知つてゐるは、一生懸命生きてるだけの普通の子供と、
俺の妹だ」

「理解出来ました。その件については他を当たるとします。

ではもう一つ、確かめたいことは
つたいどちらが強いかです」

確かめたことは2人にとっては以外だった。
まさか、こんなことを言つてくれるとは。

「なので、防護服と武装をお願いします」

「いらぬーよ。ガキ相手に使つ氣になれるか」

「そうですか」

そう言いながら桜は準備運動をする。
使う氣にならないと言ひながらもやる氣なんじやないかと思つてい
るノーヴェだつた。

「それに、あんま俺と変わんないぐらいか? 何でこんなことしてん
だよ」

「強さを、知りたいんです」

「ふうん、馬鹿馬鹿しい なつ!」

同年代相手に不意打ちをかました桜。普通の喧嘩好きだったら防げ
もしない攻撃を、霸王は防いだ。

「（初撃を防いだ。言つだけのことはあるっぽいな） じじーーー

デバイスを使つてもいいレベルだと、そう判断した桜はじじをセッ
トアップさせる。

バリアジャケットはZEROの時とは違い、機動性に眼を置いたものとなっていた。

なので、フロイト程ではないがバリアジャケットは薄くなっている。

ちなみに、桜のこの状態での武装は腕の魔力刀のビームトンファーだけ。

内心、しつまたとは思つてこる。

本当は足にビームサーベルが合計6本あつたはずだが、あれはこの状態じゃなくて変身魔法を使つた時だけだったと。設定しなおすんだつたと。

「ありがとうございます」

「ここからは全快でござ。ちなみに聞くが、強さを知りたいって言ひのま正氣か？」

「正氣です。そして、今よりもっと強くなりたい」

「ならこんなことはやめて、真面目に練習するなりして自分を磨け。ただの喧嘩馬鹿ならここでやめろ。ジムなり道場なり、いいところ紹介するが？」

「」厚意、痛み入ります。私の確かめたい強さは、生きる意味は、表舞台にはなんです」

そう言って構えた霸王。

だが、この距離で構えても桜との距離は離れていた。

その場から何かをすると考へても、たいていは砲撃戦が予想される。しかし、霸王はそんな考へではなかつた。

「なー?」

なんと霸王は突撃を使つてきた。

確かに、この距離からであれば奇襲にもなるだらう。

「(速い!?^{ステップ}歩法か!) うわっ!」

瞬く間に懷へもぐりこまれ、一撃を腹に入れられる。ギリギリのところで左手を間に入れ、受け止める形で防御できたが、勢いまでは止められず後ろへ下がつてしまつ。

「列強の王達を全て斃し、ベルカの天地に霸を成すこと。それが私の成すべき事です」

「ふー、寝ぼけたこと抜かしてんじえねえよ」

ただ静かに、桜は言った。

熱く、重い攻撃を仕掛けながらも言葉は静かに。

「昔の王なんざみんな死んでんのぞ。生き残りや末裔だつて普通に生きているんだ」

「弱い王なら、この手でほふるまで」

その言葉を聞いた瞬間、桜の頭の中にヴィヴィオとイクスの顔が思い浮かんだ。

ただ聖王のクローンだから、ただ冥王だから、こういう風に狙われて戦いに巻き込まれるのか?

あの素直な笑顔を、あの無邪気な笑顔を奪われるのか?

ふざけるな！

そんなことしていい権利なんて誰にも無いんだ！
俺にも、お前にも！

「この、バカ野郎があ…………」

「…………」

「ベルカの戦乱も！聖王戦争も！全部、ベルカって国そのもの……！
もうとっくの昔に終わってんだよ…………」

頭の中で、何かがキレる音がした。

同年代相手でも手加減なんて言つ容赦はなくなり、ただ怒りにまかせて攻撃を仕掛けた。

しかも逃げられないよう、避けられないように両足と右手をバインドで止めて。

「アトランティス・ストライク…………」

決まったと、ノーザンも桜も確信した。
だが、それが甘かった。

「…………」

一気に体の自由が効かなくなる。
何をされたかは一瞬で理解出来た。

(カウンターバインド！？捨て身でこの反撃をしようとしたのか！
？一步間違えたら死んでたぞ！？)

「まだ、終わってないんです。私にとっては向も

そつ言つて右手のバインドを碎き、やつくつと上げた。
そして一気に振り下ろす。

「霸王　断空拳」

「・・・NERO」

振り下ろされると同時に、桜を縛っていたバインドが砕けた。
バインドは背中に現れた翼に引きちぎられたのだ。
そして桜は、その振り下ろされてきた右手をわし掴みにしてそのまま背負い投げをかける。

「がはっ！」

「ふう、まだやるんだろ」

「・・・はい。まだ、決着がついていませんから」

すぐさま立ちあがり、体制を立て直す霸王。

しかし、そんなお構いなしで桜は右手に魔力を溜めて圧縮し始めた。

「だつたら、この一撃で終わりにしようじゃないか」

「望むところです」

白銀の光が右手に宿る。

そう、あれを使う気なのだ。

「悪い、今俺は怒ってるんだ」

「！？」

眼の前から桜が消えたと思うと、後ろから声が聞こえた。いつの間にか後ろに回り込まれていたのだ。

振り返るが時すでに遅し。

もう、桜の攻撃は当たっていた。

「レムリア・インパクト（弱）・・・」

眼の前が一瞬で白き光に包まれた。

side out

翌日。

少女、アインハルト・ストラトスは目を覚ました。だがいつもとは違う部屋だったので少し驚いている。

「あ、起きたみたいだな」

「・・・あ、あの、ここは・・・？」

コンコン

と、戸をノックする音が部屋に響く。それに対して桜は軽いノリで返した。

「はいはーい」

入ってきたのはティアナとノーヴェだった。
ちなみにまだAINHARDTはここが何処だかわからないでいる。

「おはよ、桜。それから・・・」

「自称霸王イングヴァルト。本名AINHARDT・ストラトス。St.
ヒルデ魔法学院中等科1年生。間違いはないな」

「は、はー」

「「」あんね、マイクロッカーの荷物出させてもらひたの。ちゃんと
全部持つてきてくれるから」

それを聞いてAINHARDTは自分の荷物を確認した。
ちゃんと全部あるよう安心したようだ。

「制服と学生証持ち歩いてるなんて、ずいぶんボケた喧嘩屋だな」

「が、学校帰りだったんですね。それに負けるなんて思ってませんで
したから」

顔を赤らめて言つてゐるが、それが本当だと言つ事は全員知つてゐる。
制服を持っていると言つ事は学校帰りしかありえないのだから。

「ま、こいつに勝つなんて無理みたいなもんよ」

「俺の事化け物みたいな言い方やめてくれません?」

「あら？ 違つた？」

「間違こすぎでしょ！ 僕だつて負ける時ありますよ……たぶん」

「たぶんなら間違つてないわね」

「もう諦めます。最近ティアさんにロード勝てる氣しなくなつていま
した」

「あ、あの……あの後はびひなつたんですね？」

急にその事を聞いてきたアインハルトに桜は優しく答えた。

「な～に、ちよつといこうといふな」とがつただけを

（回想）

「ふう、ちよつといたぜ」

「やつちまつたじやねえよー何やつてんだよお前はー！」

「え？ レムリア・インパクト（弱）」

「技名聞いてるんじゃねえよー何で本領で相手してんだ！」

「いや～だつてむかつこちやつたから。ほら、ノーヴHさんだつて
アレ聞いていらっしゃと來たでしょ？」

「ま、まあ、そりだが……」

「どうあえず、この子を運びましょうか。さすがに風引こぢや」

「わかったのはお前だがな」

「さて、助けを呼ぶか。あ、スバルさん、お久しぶりです。え？あ
ー、それは後出でいいですか？とりあえず今からそつち行くんで。
あ、ティアさんも居るんですか？はい、はい、じゃ、後で。・・・
と言つことでスバルさんとこ行きますよ」

「どうこう」とだよーーー！」

「だつて、俺、この子家に連れ帰れる勇氣ないですよ。帰つたら絶
対シャナがキレますつて。俺、ある意味で死んじゃいますよ？」

「それはお前の教育の問題だろ？がーまあ、いい。わかつて行へぞ
「あ、これ『インロッカー』のかぎだ。ノーグンさんこれ頼んだ」

「は？アタシがやるの？」

「当たり前でしょ。俺、この子背負つてゐし。てか女の子の荷物を
男があるのって犯罪みたいなもんですよ？」

「地味に説得力あるから言い返せねえ・・・

「はいはい、ひとつと行きましょーつよ

「りょーかい」

「回想終」

「つてな感じだ」

「よく判らないんですけど……」

「つまり、氣絶したお前を『』まで運んだってことだ」

「そ、そつなんですか……」

「そつだ」

半ば強引にも感じるが、それは仕方ないと『』とアインハルトも納得した。

横でノーヴェは、果たしてあれでよかつたのか？なんて顔をしているが桜はそれを華麗にスルーすることにした。

「あー、みんなおはよー」

ドアの向こうから聞こえる陽気な声に全員は反応する。そして入ってきた蒼い髪の女性は手に料理を持っていた。

「お待たせ 朝はんでーす」

「なんだ、言つてくれれば作つたのに」

「たまにはアタシのも食べてよー。いつも桜の料理ばっかり食べてたらそれ以外食べられなくなっちゃうし……」

「確かにそつよね。あれにハマつたら当分は抜け出せないわね……」

「

「俺の料理が毒物みたいに言わないでくださいよ。シャマル先生が作ったものじゃないんだから」

「違う意味では毒物だよな」

「失敬な。美味しい料理と書いてください」

「はいはい、そこまで。とりあえず食べましょ」

「そうですね」

「あ、初めましてだねAINHALT。スバル・ナカジマです。事情とかいろいろあると思うんだけど、まずは朝ごはん食べながら、お話をさせてくれたら嬉しいかな」

つてなわけでお食事タイム&お話しタイム。
あ、旨いなこれ。

「さて、とりあえず説明しておくが。ここはこの人、ノーグエさんの姉、スバルさんの家だ」

「うん」

「で、こっちがスバルさんの親友で俺の元同僚の本局執務官」

「ティアナ・ランスターです」

「お前を保護してくれたのはこの2人だから、感謝するようだ」

大雑把な説明はだいたいOKだろう。

本人も、納得した、と言つ顔をしているし。

「でも、ダメだよ桜。いくら同意の上での喧嘩だからってこんなち
つちやい子に酷い」としちゃ。下手したら犯罪だよ?」

「あ、あのスバルさん? お、俺、犯罪犯しかけましたつけ?」

「ようじ 「言わなくていい……」 そお?」

危うく、俺がロリコンになるといひだつた。

あれ?

シャナと2人暮らししてた時でもうすでにロリコンになつてんじゃ
ね?

・・・よし、気にしないで次にいひ。
うん、それがいい。

「格闘家相手の連續襲撃犯があなたつて言つのは・・・本当?」

「・・・はい」

「理由、聞いてもいい?」

「大昔のベルカの戦争が、じいつの中では終わつてないそつなんで
す。そして自分の強さを知りたくて」

「あとは、なんだ聖王と冥王をぶつ飛ばしたいんだっけ?」

「最後のは・・・少し違います。古きベルカの王子よりも、霸王のこの身が強くあること。それを証明できればそれでいいだけです。」

「聖王家や、冥王家に恨みがあるわけではない?」

ティアナの問いにコクリと頷くアインハルト。

それを聞いてスバルと桜はお互いに顔を見合させて少し笑った。

「そう。それならよかつた」

「もし、恨みがあつての行動だったらまたキレてたな」

「スバルと桜はその2人と仲良しだから」

「やうなの」

「兄妹だからな」

「あ、冷めたやうから、みかつたら食べて」

「・・・はー」

「後で近くの署にて一緒に行きましょう。被害届は出でないつて話だし、もう路上で喧嘩とかしないつて約束したらすぐに帰れるはずだから」

「ああ、ティアナさん。今回、先に手を出したのは俺です。なので俺も一緒に行きます。喧嘩両成敗つてやつです。アインハルトも、それでいいよな」

「・・・せこ、ありがと、ついでこまか」

「むづきゅうと元氣出せば、反省してこのまわかったから。むづ少し明るべした方が可憐にや?」

「わ、そうですか?」

「ああ、俺はやつ思ひ

「じや、じやあ、少しだけでも強るべします」

この後、全員で近くの署へ向かった。

ちなみに

「俺、今田の教導じつじゆつ・・・

「もしかしたらなのかな? なぜかね?」

「違へ、怖こののはやがじやなべてマコナだ・・・

「じつじゆつ・・・

「俺の首が飛ぶ・・・

『・・・まあ、理由を話せば大丈夫だよ(だと思こまか)』

「まだ、全員にやさんと教導してねえのにクビなってこやだ~~~

! ! ! . . . 「

第08話 天に翼 地に霸王（後書き）

はい、次回はとりあえずアインハルトとヴィヴィオの回です。

時間かかるかな？

俺の気分次第だな。

とりあえず誤字脱字、感想あればお願ひします。

第09話 ハーレムへの第一歩（笑）（前書き）

今回はアインハルトとヴィヴィオの回のつもりでしたが、変更をしてちょっとお楽しみなタイムにしました。

今回はまさかあの人があんな行動に出るとは…！

ある意味で必見です（笑）

第09話 ハーレムへの第一歩（笑）

「とつあえず連絡とかなきゃな」

そつ言いながらおもむろに携帯を取りだす。
そして、ある相手に電話をかけた。

「あ、もしもし」

『もしもし桜君?』

「あへ、やうだが?」

『今日来るの?早く来ないと君の首が本当に飛ぶよ?』

「いや、その事なんだが・・・」

『あ、もしかして彼女とデート?私と言つるのがありながら』

「どうこの意味だ!...とにかくお前は俺の何なんだよ!...』

『上回?』

「怖いわ!」

『で、もうあるの?』のまま休むなら君の首が飛ぶけど』

「いや、それだったらこくよーのかわり遅くなるけどこーか?」

『はいはーい、わかったよ。それじゃ』

そう言つて電話が切れる。

さて、出来るだけ早く行かなければ。

「行くのか？」

「はい。まあ、ある程度の遅刻はしてもいいこと言われたので、終わ
つたら」

「さうか。じゃ、AINHARDTは任せとけ」

「頼みます」

この後、AINHARDT達と別れ教導隊へ向かった。
AINHARDT達、うまくやつてくれるといいんだけどな。

side out

「で、結局どうして遅れたのかな？」

えへ、現在土下座中。

理由は普通に謝るためです、はい。

「正直に話してくれれば許してあげない事もないよ

「えへっと、12歳の子供相手に喧嘩を売られて、その喧嘩を買つ
てぼこぼこにした後、知り合いで（女性）の家まで運んで泊らせてい

ただき、そして今朝、被害届け等を書いてきてこの状態になりました。本当にすみません」

「桜君はこれからロココンになつたのかな？私はがっかりだよ

「えー？ いや、俺はロココンじゃ

「

「まだ顔上げない」

「はー・・・」

めつちや怖いです。

女の人が怒るとビリしてこんなに怖いの？

俺はどうしてこんなに頭が上がらないんだ？

上司だから？ 怒ってる女人の人だから？

どちらにせよ、今の俺は限りなく無力だ。

「・・・ふむ。よし、立つていよいよ」

「あつがとうござまわ」

「その代わり、今からお仕置きでもしようかな。眼、瞑つてくれる
？」

「いいですか？」

言われるがままに田舎を瞑る。

えっと、今から何されるんですか？

こんな時つてチラ見とかしたいよな。

「う、薄田でチラッと

「んむー?」

「…マジで?」

「これ、冗談とかじゃないよな?
俺、今キスされてる?」

「…・・・」

「…・・・ん

この状態になつてからどのくらい時間が流れたのだろうか。
わからないぐらい体感時間がクルつて来てる。

しかも、お互い何故か動けないから放せない。

「…・・・」

「マ、マリナ・・・?」

「ふふ、どう?私の醜

「う、ううつて、お前」

「私ね、本当に桜君が好きなんだよ。だから、ファーストキス、あ
げちゃつた

「え、お前それって…・・・?」

「このまま、この先もじちゅう…・・・?」

そつ言いながら再び顔を近づけてくるマリナ。

後ずさりをするが、最終的に壁まで付いてしまった。

そしてさつきから、胸の高鳴りが止まらない。
ドキドキしていく、マリナの顔をまともに見れない。

「お、おこ、俺まだ16なんだけど・・・」

「気にしなくていいよ。いつこの時せ年上の私がリードしてあげるから」

「そつ言い問題じゃなくて」

「大丈夫。みんな事務作業やら、教導やらで忙しいから。ほぼ毎日
ことが無い限り誰も来ないよ」

俺の右手を取り、そのままその手を自分の胸元へ持っていく。
柔らかい感触と、ドクン、ドクンと言つ鼓動を感じられた。
なんだか、こっちもそんな気分にもなつてしまつ。

「わかる?私の胸、こんなにドキドキしているんだよ。これも全部、
桜君の事考えるとこうなつちゃう」

「マ、マリナ・・・」

「だか、」

そつ言いて再びキスをしようとした時だった。

コンコン、とドアをノックする音が部屋の中へ響く。

その音を聞いた瞬間、ドキドキは冷めて、2人とも即座に離れた。

「「ほん。・・・じつ」」

「失礼します」

「リナ、どうしたの？」

「えっと、桜さんが つてあれ？ 桜さん、来てたんだすか？」

「ああ、さっかな。で、マリナに・・・謝りに来ていたんだ」

さつきまでの事を、誰かに言つのはマジでまずい。

俺とマリナが・・・もう、この事を考へるのはこいつたんやめよつ。

「遅刻で？」

「そう」

「珍しいですね」

「そつか？ 俺も人間だ。寝坊もするし、遅刻だつてする。まあ、今回は例外だがな」

「例外？」

「あ、それはこっちの話だ。気にしなくていい」

「そう、ですか。とりあえず、今日も来ててくれてよかつたです。昨日はちょっとさびしかったんですよ。アウルもなんだか寂しそうな顔もしてたし。リーフも私も瑠璃も、みんな寂しかったんですよ？」

「すまんすまん。休み取る時は言わなきゃな。みんなに心配かけち
まつ」

「・・・」

「？　ああ、悪い、後で行くから戻つてお

「わかりました」

そう言い残してリナは部屋を出て行つた。
そして、再びそつときの状況へ戻る。

「なあ、マコナ

「・・・何？」

「考えさせてくれ。なんか、さつきのは勢いとかもあつてな、あの
ままリナが来なけりや本当にやつてたかもしれない。だから、考
させでほし」

「・・・ちゃんと、私を選んでよ」

「難しいな。好きな人が増えるのって

「私は桜君一筋だけど」

「わかつたから

「この後、俺も部屋を後にした。

そして、みんなの教導へと移つたのだった。

第09話 ハーレムへの第一歩（笑）（後書き）

はい、なんだかすっごく奇妙な回でしたねw

まさかマリナがヒロインに加わるとは…！
(自分でもどうしてこうなったかわからない)

さてさて、果たして桜君はフェイトとマリナ、そして後に出てくる
であろうヒロインたちの誰を選ぶであろうか。
(それは未定です)

そう言えばあの人気がいるじゃないか！

よし、そつときまれば行動だ！

善は急げってヤツだ！

ちなみにここで言えばネタばれになるので言いません。

でも、察しがいい人はわかるかも？

とりあえず次回もまだまだ未定です。

誤字脱字、感想あればお願ひします。

第10話 高町桜の憂鬱 第一

「ねえ、クロノ」

「なんだユーノ」

「僕ら、桜に呼ばれたんだよね」

「ああ、なんでも相談に乗つてほしいだつたか? こいつ時は、年上が相談に乗つてやらねば、誰が乗ると言つのだ?」

「いや、そうじゃなくて。なんで僕らかつて事だよ。桜だつたら母親のなのはや、恋人だつけ? フェイトもいるし、もつと言えばはやで達だつている。それにスバルやティアナも居るよ。なのにどうして本局や無限書庫にいる僕らなの?」

「……それは……どうしてだ?」

「いや、僕に聞かれても……」

2人の他愛もない話。

14年前からの付き合いなのでこいつ話をするのはわからないでもない。

と、そんな話をしている時だ。

「すいません! 遅くなりました!」

向こう側から今回呼びだした張本人、桜がやってきた。

遅っていた理由は 読者の方々なら察してくれるだろ?

「いや、僕たちもさつき来たところだよ」

「『』みんなさい、上司とこうこうあります

「大丈夫なのか？悩みも抱えているようだし」

「はい、なので今回はお二人に相談があります」

「この後2人は桜の話を聞いた。

その内容は、この2人だからこそ驚くものであった。

side out

「と言つ事なんです」

「簡単にまとめるといつも先日上司のマリナ・ストライク三佐に告白をされ、さらに危うく襲いかけた、で良いのか？」

「はい。お恥ずかしことながら、フロイトさんがいるの・・・」

顔を伏せたままそう言つてくる桜。

なんだかその顔は不安の色しか見えない。

2人から見ても、他人から見ても「悩んでるな」と言えるような顔でもあった。

「俺、どうしたらいいのか。なんだかいやな予感しかしません。この先、絶対誰かが出て来ます」

「誰かとは？」

「わかりません。でも、なんだかそんな予感がするんです」

「（うれは・・・）」

「（相當だな・・・）」

「で、母さんたちにも相談はしたいんですけど・・・なんて言うか、言い出せなくて。俺の唯一つてわけじゃないんですけど、男の知り合いが2人しかいないくて。とりあえず、2人に相談してみようって思つて今日来てもらいました」

なんだかもうびっくりしたらいいかわからない子供のよつた顔だ。
泣き声ではないものの、やつぱり顔に「不安」と堂々と書かれて
いるようにも見える。

母親や知り合いにはほとんどが女性。
女の人はいろいろと恋愛関係の相談には強そつだ。
だが、やはり言こ出そうとするとなかなか話せない。

同性の男であるクロノとコーンなら話せると思ったのだらう。
でも、やつぱり悩んでいる。

「（なあ、コーン）」

「（な、なにかな？）」

「（うれしいひとと...）」

「（ヒルヒル）なのは達には言いたくなかったし、他にもあてがなさそうに見えるし、放つておいたらなんかそのまま永遠の旅にも出ちゃうから放つておけないんだけど……」

「（キラキラ）」

「（僕達は恋愛経験があんまりない……）」「

「おー一人なら、恋愛経験とか・・・なさそうだけど、なんだか力になつてくれないかなつて思いました。・・・助けて下さい」

ずぱり心を見抜かれた2人。

しかも桜はなんだか今にも泣きそうな顔に代わっていく。ますます放つておけなくなつてきた。

「そ、その、なんだ、そつ考えすぎるな」

「ア、そつだよ。とりあえず、飲み物でも飲んで落ちついハ」

「はい・・・、あつがといひこます」

「（ダメだ…完璧に落ち込んでる…）」「

side out

一方その頃。
教導隊では。

「また休み取るなんて、桜さん、何かあったのかな？」

「ん~、俺らが考えてもしょうがないだろ。今度来たら聞いてみようぜ。で、困つてたら相談乗つてわ」

「桜さんが元気じやないと私達もなんだか元気がなくなっちゃいますよね」

「兄さん・・・」

「あれ? アウルって桜さんの事そう呼んでんの?」

「・・・(ヒク)」

「あ、なのはさんだ。ちょっと聞いてみよ」

「そうだな」

ちゅうど通りかかったのはへ声をかける4人。

その声になのはは振りかえり、話をする事に。

「え? 最近桜に元気がないからその原因を知らないかつて?」

「はい。今日も休みを取つて、何処かに行つたみたいで。私達との訓練の時もぼーっとしてて一本取られちゃうとかあります」

「確かに、最近は元気ないね。朝起きたら、ぼーっとしてること多
いし、デスクワーク中も画面見たまま固まっちゃうこともあるし、
料理作つてる時も砂糖と塩を間違つちやう。私もどうしたんだろ

うね~って思つてたんだ」

「ナゾで、母親であるなのはさんは原因になつた事を知つてゐる
じやないかつて思い」

「つ~ん・・・あんまりないかな~。フロイトぢゃんとシャナは最
近自重してゐるし、ヴィヴィオも何かしたつてわけでもないし、私も
これと書つて何かしたわけでもないし・・・」

「もしかして、氣付かないうちに何か言つたとか・・・ってそんな
ことありませんよね。家族ですもん」

「・・・」

「なのはさん?」

そこで黙り込むなのは。
ちよつとの間、考え込んでいる。

「・・・・言つちやつたかもしけない。たぶん・・・」

「ええ~!?」

「マジですか!~?」

「わかんない。でも、今度聞いてみよ!~!」

「お願いします!桜さんが元気ないと、みんなも元気無くなるんで
!~!」

「やつですーお願ひしますー！」

「ハ、うんー」

「ひつかせりけでいろこのと歎んでいた。

side out

「はあ・・・」

こちらに戻ってきて桜の様子。

未だに何の解決なしの表情でさつきからため息ばかりついてる。

「（・・・）これは相当だな。筋金入りと言つてもいい」

「（いや、これはそちらくんの恋愛小説に出てくる恋する乙女以上だよ。考えすぎも程があるって）」

「あ、やっぱ、時間・・・」

「こじで腕時計を見た桜が声を漏らした。

今日はもともと、休み時間を延長しまくつてきていたのだ。

なので時間が来れば戻らなければいけない。

「・・・解決しないがいいのか？」

「・・・良いわけないじゃないですか。でも、時間なんで戻らなき

や

「でも・・・」

「2人には俺の気持ち、理解できますか？好きな人が1人じゃなくて、2人に増えるって相当悩むんですよ。今の今まで好きだった人を取るか、つい先日告白された上司を取るか。一途で一筋な2人に、理解できますか？」

「うう・・・」

「そう言わると・・・」

「でしょ？だから、こういう時は1人で限界まで考えます。それで答えが出なければ・・・。その時はその時でどうにかします」

その言葉を聞いて2人は目を合わせる。
もう、何を言つても無駄なのだろうと確信した。

そして同時に「桜は本当に一途で一筋で初心」だと言つ事を理解した。

「何かあつたらすぐ言え。いつでも相談相手になつてやる

「そうだよ。僕らはいつも味方だからね」

「ありがとうございます。あ、これ以上遅れるとまたマリナに怒られるな。それじゃ

そつ言い残して先にその場を去る桜。

その背中はシャキッとしているのか、ダラーンとしているのか、よく判らない背中であった。

2人はやはり心配で、その背中が見えなくなるまで見守っていたとか。

side out

「……あんなこと言つてきちゃつたけど、やつぱり1人じゃ無理だな……。誰に頼る? ヴァイスは……信用できないし、フェイトさんは……殺されるな、誰が一番適任なんだろ? ……」

こんな時に一番頼りになる人と言うのは意外に見つからないものだ。しかも、先ほどにも説明したように周りにはほとんどが女性。この事を言い出せて、さらには頼れる人なんてそういうない。

「……あの人なら、ばっさり切つてくれるかもな。……あ、もしもし、お久しぶりです。え?いや、そんなんじゃないですよ。えつと、空いてる日、ありますか?明日……ですか。いやー、そんなことありません!じゃあ、明日、教導隊の方に来てもらえますか?ちょっと、頼みたい事がいくつか。はい、ありがとうございます」

連絡を終えて電話を切る。

その顔は未だに、と言つた最初よりも不安な感じになつていた。何が不安なのか、何がいやでそんな顔をしているのか全く分からない。

だが、これだけは言える。
悩みを抱えてるなんらじょうがないと言つてんだ。

第10話 高町桜の憂鬱 第一（後書き）

えへ、今回のゲスト（相談相手）はクロノとコーノでした。

ちなみに今回から、桜の相談相手がどんどん出て来ます。

もしかしたらその中にフラグを立てる人もでてくる…？

サブタイトルが当分続くかもしれません。

と言つかれます。

とつあえず、応援してくれると嬉しいです。

誤字脱字、感想もあればお願いします。

第11話 高町桜の憂鬱 第二 前（前書き）

今回はあの人気がゲスト（相談相手）！

姉御！相談乗つて下さい！！

第11話 高町桜の憂鬱 第二 前

「ただいま」

「お帰り～」

家に帰ると、ヴィヴィオが出迎えてくれた。
シャナもその後ろから出てきた。

それに、ヴィヴィオの顔がなんだか嬉しそうだ。
何かあつたのかな？

「どうした？ 良いことあつたのか？」

「うん！ 今度、ノーヴェが紹介してくれた新しい格闘技をやつてる
人と試合するの！」

「へ～、それで気合い入つてんのか」

「その通り！」

新しい格闘技をやつてる人？

・・・ノーヴェさんが紹介したって事は・・・。

「その子、アインハルトって名前か？」

「え？ なんで知ってるの？」

大当たり。

仲良くやつてるみたいで何よりだ。

「ノーブルさんと回じタイミングで俺も知ったからな。一応手合わせはしてあるんだ」

「そうなんだ？」

「今日は、何食べたい？」

「何でもいいよ。お兄ちゃんの料理美味しいもん」

「シャナはリクエストあるか？」

「うーん……」

「無理に考えなくていいからな。なければないで美味しいもん作るから」

「うそ、思いつかないや」

「そつか。じゃ、手伝つか？」

「うんー。」

一旦何もかもを忘れない氣分だ。
どうすればいいんだよ、俺は。
なあ、こんな時お前がいてくれたらどうする?
アル……。

「はあ・・・」

夕食を取り、風呂にも入った。
後は特に何もすることもなく、とりあえずベランダで空を眺めていた。

「あ、あれまだだつたな」

毎日欠かさずやっていたあ“れ”とは。
おもむろに魔導書　死靈秘法を取り出し、開く。

「我、死靈秘法の主なり。管理人格、アル＝アジフの体を形成するために必要な魔力は後どれほどだ？」

問い合わせるが応答しない。
だがこれはいつものことだ。

ページをペラペラとめくり、文字が書かれていたページを見つけた。

そこには『現在、267ページ分の魔力が溜まっています。管理人格の体を形成し、再び活動させるためには後233ページ分の魔力が必要とされます。なお、この魔力は今も流れ続けているため、供給をやめてしまえば溜まっていた魔力は0ページとなってしまうので、供給を絶やさないでください。』などなど、いろいろな書かれていた。

ふむ、今のところ267ページ。

これまでの期間は半年近く。

ちょびちょび入れていたが、この調子なら、頑張ればもう少しと言

つたところだらうか。

「・・・魔力供給をする。今日はギリギリまでやつてくれ」
ページに書かれていた文字が一気に消え、そして一言浮かび上がった。
『了解』、と。

その直後、全身の力が抜けた。
なんだか久々に魔力切れに危険性を感じた。

しばらくして、脱力感は消え去った。
ページを見てみると『今回の魔力供給で87ページ分の魔力が溜まりました。後、180ページ分の魔力が必要です』と書いてある。
俺の魔力で87ページ・・・。
でも、半分近くは流れて意味無くなるんだろうな。

「さて、今日はもう寝よう。明日は気合い入れなきやな。あの人の相手はつらいんだし」

こうして夜は更けて言つた。

side out

翌日。

今日は、いや、今日もと言つた方が良いな。
何故か最近、マリナやフェイトさんが夢に出てくる。
そのことを考えて朝はぼーっとしたままの事が無い。

「お兄ちゃん、朝のワーンングリーバー。」

「・・・」

「あ、またぼーっとしてた。どうしよう?」

「なのはママたちに会つておこで、私達は行こ」

「わづだね」

「・・・あれ?誰かいた?」

「ぼーっとしてると周りの声も聞こえない。
いや、本当どうじたらいいんだろうつか・・・。

side out

「えっと、今田は来ててくれてありがとうござります。シグナムさん」

「うむ、私もお前やマリナに久しぶりに会えてうれしきぞ」

「あ、知り合いだったんですね?」

「ああ、本局でな」

「わづですか」

現在は仕事場、教導隊だ。

今回はシグナムさんに来てもらひ、教導と相談、一いつをやつしまりおつかと。

ええ、相談の方は言つてませんよ。

まあ、もともとそつちが田的で呼んだのに言つてないつてどうかと思つけど別に気にしない。

「その、なんだ、私としてはお前に呼ばれると言つものが意外だな。シヤナの世話ではなく、教導の頼みなど。お前なら、全部一人でできるんじゃないか?」

「いの見えても俺は器用貧乏です。でも、シグナムさんは剣術に特化している。なので、その点で力になつてほしいかなと」

「ふつ、まあいい。私を呼んだんだ。覚悟は出来るな」

「え?」

「やるぞ、模擬戦を」

「あ、あははは・・・マジすか・・・」

side out

例によつて例が」とへ、シグナムさんを呼べばたいていの確率で模擬戦確定。

まあ、このくらい覚悟は出来ていたさ。

でもや、ちょっとの確立に掛けてたけど、いつあつさり碎かれると

シヨックを受けぬつて言つたが、なんといふかわからない気持ちにならる。

とりあえず、わざわざ終わらせよう。
そして、バツサリと切っておらおつ。

別にMじゃないからな?

この状況から早く抜け出したいからなんだ。

「では、行くぞ」

「えっと、今更謝つても無意味ですよね?」

「謝つてもいいが、それで私が満足すると思つなよ」

「聞いた俺がバカでした」

よし、わがわとやつてやつて終りがいつか。

良ハニ決まつてゐ。決まつてなハばづが無ハニ

「最初から本気で行かせてもらひつ！」

「おうと、不意打ちツスか？」

「こんな程度ではお前は落ちないだろ？」「

「ビリだか。今の俺、どうかしてるんで簡単に落ちますよ？」

「なら、これをまとめて抜けて田を覚おわせてもいい。紫電」

R-Tを上げ、構えを取る。

そして渾身の一撃を叩き落とした。

「一閃……」

「…？」

彼女の最強の一撃が、見えなかつた。
否、見よつとしてなかつた。

自分でもわからない。

何で見よつとしていなかつたのか、こんな自分らしくない。

この一撃をくらひ、下へと真つ逆様。
土煙を上げ、瓦礫の中へと突つ込んだ。

「けほ・・・」

「どうだ？ 田は覚めたか？」

「・・・ええ、ちょっと余計な事を考えすぎてしましました。しかし田は、
本氣と書いてマジで行きまっよ」

そうだ、一田何もかも忘れよう。
マリナのこと、フロイドさんのこと、なやんでる」と全部。
今は田の前の相手を叩き潰すことだけを考えろ。
どれだけの屈辱を与え、どれだけの恐怖を味あわせられるか、その
ことだけを考えるんだ。

「NERO」

『サイスフォーム』

「戯曲・・・終焉の漆黒・・・」

「なー?」

ガキン!

武器と武器がぶつかり合ひ音がした。

だが、一撃だけで終わる気もないし、終わらせる気もない。
なにせ、”柄”で攻撃したんだから当然だろ?

「ああ、我が手の内で躍れ」

抵抗の隙も与えない、あげる氣にもなれない。

切つて、殴つて、蹴つて、何回も何回も切り刻む。

どんな状態にならうと、どんなに叫ぼうと、やめるなんて絶対にしないから安心しろ。

「全ては終焉の時を迎へ、破壊と、創造を繰り返す・・・

もうすぐ終わりだ。

残念だが、これで終わりにしよう。

「ああ、終幕の時だ」

最後の一撃はお前がやったのと同時に、渾身の一撃にして、
気にするな、切られて死にはしない。

ただし、衝撃などの何かのショックで死ぬかもしれないがな。

「終わりを迎え、消えるがいい！！」

魔力を込めた、渾身の一撃がシグナムさんを切り裂いた。
最後には、何も残っていない・・・。
残っていたのは俺だけだった・・・。

第1-1話 高町桜の憂鬱 第一 前（後書き）

最後の方の桜はめちゃくちゃ暴走してましたね。

思考がいらない状態だったので、しうがないと言えばしうがないですね（笑）

ちなみにあの時の桜の頭の中の事は「悩み関連」「ストレス」「他」でした。

で、「悩み関連」を取り除いたので、残った「ストレス」を発散するためには暴走したって訳です。

とりあえず、サブタイトルに「前」と書いたので、次回もシグナムさんが出で来ます。

ええ、フラグを立てますとも。

言わなくてもわかってましたよね？

誤字脱字、感想あればお願いします。

第1-2話 高町桜の憂鬱 第一 後

桜とシグナムが模擬戦を始めるちよつと前。

モニターで見ていたマリナは・・・。

「むう、なんだか桜君とシグナムの仲が異様にいい気がする・・・」
嫉妬していた。

いや、ちょっと違うかもしれない。

とりあえず2人の様子を見守っていた。

「まさか、シグナムもライバル・・・!?

「マリナさん、仕事してください!」

「これは・・・強敵ね・・・」

「無視しないでください!..」

シグナムをライバル視していたマリナであつた。

side out

「で、話とはなんだ?」

現在、午後がオフシフトだったので八神家へ来ている。
教導が終わったあと、シグナムさんに話を聞いてもらおうと思い、

結果的には教導隊で話すのは気まかたので家に行こうとなつたのだ。

ちなみに桜の顔は今にも泣きそうなぐらいの顔でもあり、もつと書いてしまえば、おしゃべり子犬のような顔だ。

「え、えっと……なんて言つか、その……」

ユーノとクロノの時とは違い、相手は女性だ。やはり言い出しついて。

だが、ここまで来たから言わなくて済む。

「なんだ? 言いこくいのか?」

「え、えっと、ええ、まあ、はい……」

「もう固まんな。今、お茶を持つてくる

「あ、ありがとうございます」

そう言って部屋を後にするシグナム。

今日ははやて達も居たのか、違う部屋での話声も聞こえていた。
しばらくしてから、戻ってきたシグナム。
その手には紅茶が入ったカップが握られていた。

「安心しろ。主はやて達も居るが、聞こえはしないだらう

「はあ……」

「それに、私はお前の悩みが氣になる。いつものお前ならぬみなど、

すぐに解決しそうなのがな

「これは・・・その、言える人が周りには少ないんで、解決まで時間がかかるんです」

「そうか。でもまあ、なんにせよ安心しろ。私に聞いて悩みが晴れるなら、力になるぞ」

この時のシグナムの顔を見た桜はつこいつ思つてしまつた。
この人に頼つてよかつた、と。

そして、感謝の意味を込めて、今までの最大の笑顔で返した。

「あらがとうござります」

この笑顔は、まさしく殺人スマイル。
お堅いシグナムも、これの前では面食らつ。

「お、おうへへ」

「じゃあ、早速本題に入つてもいいですか?」

「あ、ああ。望むところだ」

side out

「と、話の事なんです」

「せや。つまりつい先日、マリナに告白をされ、さらには襲いかけ

たと

「おやしへの通りです」

「……そつか、お前も大変なのだな」

「はい・・・」

「とりあえず、お茶のお代わりでももつてこよ。解決はその後だ
な」

「ありがとうございます」

また部屋を出ていくシグナム。

しかし、今度はなんだか違っていた。
何が違うのかは本人にもわからない。
でもなんだか桜を見ているとドキドキすると言つた感じだ。

「どうしてしまったの私は。あんな笑顔一つでここまで動搖する
とは」

「それはたぶん恋やな」

「あ、主はやで!」

「シグナムも恋をするよつになつたか。まあ、相手は桜や。強敵や
で。さらに周りも強敵だらけやな」

ちなみに周りの強敵とはフュイートの事だ。

あの人は本気がなれば大変なことになるだろ。

もしかしたら途中で強敵が増える可能性も・・・。

「まあ、待つて下さごー！それはわ、私が、桜を好きだと語りつ事ですか？」

「やうやな。気になるんやう？桜のこと」

「ええ、まあ」

「それなら、ちゃんとアプローチせなあかんよ。鈍感な子は本当に、正直に伝えな氣付かんしな」

「は、はあ・・・」

「ちなみにウチもノリで好きになつてみようかな。気になる人もおらんし」

「ええーー？」

「まあ、ほとんどシグナムを応援するけどな」

「べ、ビックリさせないでください。本当に驚いてしまいましたか」

「ひ

「『メンメン。ほら、待たせたらあかんよ』

「は、はこ」

こうして部屋へ戻つて行つた。

と詰つた、はやてのノリつてそんなに軽いものなのか。

たぶん、後々本氣で好きになるのだろうな・・・。

「すまんな。待たせた」

「いえ、そんなことは」

「そ、そつ言えれば、迷つてこると書つていいたな?」

「え?ああ、はい。フロイトさんとマコナ、どつかもは選べません
し

「やうか。なら」

シグナムは決意を決めた。

好きなら好きで、最後まで突き通す氣だ。
そして告白する。

「なら、私を好きになれ!――」

「・・・へ?」

「だからー私を好きになれと言つてているんだーー私はお前が好き
だから・・・」

「え、えっと・・・ええー?」

「テスター・サやマリナが怖いと書つない、促成事実を作つてしま
えばいい!――」

「ちよ、なにせつげなく危ない事口走つてんですか!――て書つかど

「うしへそんな結論に……？」

「ええいー・ウジウジするなー男であるのー。」

じわじわと迫ってきたシグナム。

あれ?なんかこれ、デジャヴじやね?
おかしいな、これ、前にもあつたよな?
と語つかそんなことはどうでもいいから、今はこの話をどうにかし
なきやー!

「ストップー…わすがにこれ以上はストップやーー。」

「はやてさん・・・」

「主はやて・・・」

「あのな、シグナム。いぐらアプローチと言つても、勢いに任せす
ぎるのはあかん。ですがに桜も困つたやう。」

「は、はー」

「だいたいな、じつこつ時は

この後淡々とはやてによるシグナムへの説教が続いたとれ。
そして、Jの状態では例によつて例がじとく、桜は空氣と化してい
た。

「え、えっと、俺は何を手伝えば?」

はやさんが説教をしている間。
俺は何もすることが無いのでシャマル先生の手伝いをすることが元気になりました。

と言つても、何か特別な事をするわけではない。

「うへん、じゃこの中、かたづけるの手伝ってくれる?」

「はい、わかりました」

開けられた扉の向いには薬だらけだった。
きっと、いろんな効果の薬があるんだろう。
絶対に落としたりしちゃいけないな。

「うへん、何からかたづけよ。おっと」

「大丈夫? 何かあつたら言つてね」

「はい。って、うわっ!」

最速で転んだ。

いや、何に引っかかったかすらわからない。
とりあえず、体を起こした時だった。

ガニッ、と大きな音がする。

それと同時に、頭のてっぺんへ痛みが走った。
どつかの棚にぶつけたのだ。

そして、ぐらぐらと音がする。

まさか、この状態は・・・上を見てはいけないんだろう。

上を見ずにその場にいたら次の瞬間

「痛つ！…」

頭に何かが落ちてきた。

しかも数個。

液体も入ってたみたいだし、やばい気がする。

そして、この辺りで意識は途切れた。

side out

「桜君？だいじょ　　」

シャマルがパリンっという物音を聞き、駆け付けた。
だが、時はすでに遅かった。

いや、もう少し早く着いても結果は同じだつたろう。
なにせ、頭に落ちていたものは代わらなかつたのだから。

そして、桜を見たシャマルは言葉を失つた。
理由は、見ればわかる状態であった。

そこには桜がない。

その代わり、見知らぬ少年が座つていたのだ。

「き、君、大丈夫？」

「・・・？？？」

その振り向いた姿は、まさしく昔の桜だった。

第1-2話 高町桜の憂鬱 第一 後（後書き）

よし、これでシグナムさんとのフラグは立てたな。

はやてはついでとして。

後は誰を追加しようかな（2828

とりあえず、今回のシグナムさんは暴走気味でしたね（笑）

そして、最後の桜の幼児化。

次回はどうなる…？（未定です）

ちなみに、次回のサブタイトルは変わりますが、また今回と同じサブタイトルになる時があります。

誤字脱字、感想あればお願いします。

第1-3話 幼児化桜八神家入り！

「ひっく・・・ぐす・・・」

八神家の一室。

そこで少年は泣いていた。

そして、はやては見つけた。

1人悲しく泣いている少年を。

「どうして泣いているか、教えてくれへん？」

「もう・・・殺したくない・・・。殺したら・・・誰も居なくなる・・・1人はイヤだよおう・・・寂しいのはイヤだよおう・・・」

「そか・・・。なら、もう殺さなくてええんよ

「本当・・・？」

「うん、本当。だつてウチも寂しいのはイヤやもん。だからもう、殺さなくともいいんよ。それに泣きたい時は泣いてもええ」

「本当に本当・・・？」

「本当に本当にやつて。ほら、泣いてもええから」

膝を抱え、少し泣きながら答えてくれた少年は顔を上げる。

そこには手を広げていたはやてがいた。

そして、そのまま抱きついて泣きだしたのであった。

s i d e o u t

「 ? ? ? 」

桜がいる場所。

さらに言えば、"いた"場所だろうか。
そこに1人の少年はだぼだぼの服を来て、頭の上にたくさんの疑問符を浮かべていた。

「あ、あの」

「 ! ? 」

物音を聞き、駆け付けたシャマルが声をかける。
その声に反応したか、すぐに振り向くやいなや、だぼだぼの服を結び動きやすくした。

そしてあらうことか次の瞬間

パリイイイイインッ！－！－！－！

窓ガラスを割つて庭へと飛び出したのであった。

s i d e o u t

パリイイイイインツ！・！・！・！

窓ガラスが割れる音が家全体に響く。

その音のおかげでシグナムへの説教も中止に。とりあえず、音がした部屋へ全員が急いだ。

「シャマル！」

「なにかあつたんか!?」

え、えっと……桜君が……」「

「桜がどうかしたのか!?」

うん、
言いにくいたけど、

困惑気味のシャマルに「ずい」と迫るシグナム。
本気で心配なのだろう。

「? これは、数種類の薬品が入つてたヤツじゃないか?」

「え？あ、そう！えつと、桜君がそれを頭から被つちゃって！それで来てみたらちっちゃな男の子がいて、それで桜君のだぼだぼな服を着てそこ窓からお庭へ！」

「……待て。つまりはその男の子とやらが桜なんじやないか？」

「あ、そつか

「つて、納得しとる場合やないやう！ はよ捕まえんと！」

「や、やつですねー。」

「とつあえずみんなは桜を追ってな。ウチはヴィータに連絡してお
く

「了解ですーー。」

追いかけるメンバーはシャマル、シグナム、ザフィーラ、リイン、
アギト、はやての6人。

今日もヴィータは教導なのでまだ帰ってきてこない。

「あ、もしもしヴィーター！」

『じつしたんだよせやで。そんな大声出して』

「やじになのはちがんあるーー？」

『え? うん、いるよ』

「じゃあ、大急ぎでー至急なのはちがんと一緒に帰れるやー事情は帰つてき事情は説明するーー。」

『ええーーああ・・・とつあえず、急いでみる』

「頼んだでー！」

これで増援は確定だ。
と言つかどうしてここまで大騒ぎなのだらうか。
普通に捕まえればいいものの。

だが、全員は桜の身体能力を知っていた。

9歳のころの身体能力でもあれほどだ。

それより小さくなつたつてさほど変わりはないだろう。

と言ひか、小さくてすばしっこくてやけに強いなんて聞いただけで大変だ。

もしストレス発散のために家を壊されたらまたものではない。

なんにせよ、早急に捕獲することが大切なのであった。

side out

「まちなさい！」

「待てよー！」

現在桜君（仮）逃走中。

だぼだぼだつたズボンのベルトを無理やり締め、だぼだぼなTシャツを着て、八神家の庭を爆進していた。

それにしても、なぜ逃げるのだろうか。

普通なら、逃げる理由などないはずなのに。

だが、その考えは甘かつた。

被つた薬品の中には何故か記憶喪失になる作用があるものもあつた。しかし、他の薬品も混ざり効果が弱くなつたか、中途半端に記憶が残つてしまい、逃げる事を選択してしまつていたのだ。

「・・・じつ」・・・

ちなみに、記憶は体に合つた当時のもの。もつと言えば、昔の研究所にいた頃の記憶である。

殺し合いをしている中、心得たのか。
どうやらシグナムや、シャマル達の事を直感的に危険だと察知したのだろう。

本人たちが聞けばがっかりすることが理由であった。

「むう、すばしっこいですね」

「あんな恰好で何であんな速く走れるんだ?」

「わからんが奥の手だ」

ザフィーラガ突然止まった。

そして、叫んだと同時に桜(仮)の眼の前へ白い壁が現れた。

「あ・・・」

「さあ、追いつめただぞ」

「・・・」

後ずさりをするも、すぐ後ろは壁。

そして今度もあるうことか驚きの行動に出た。

そう、壁を破壊するのだ。

しかも数回の攻撃だけで、魔法を使わず。

まずは両肘を思いつきり叩きつける。

そして、その後左手のストレートを叩きこんだ。

するといどりだるつ。

壁の一部だけがバラバラと崩れ落ちる。

これを使つたザフィーラは相当ショックだらう。

なにせ、魔法を使わずに破壊されたのだ。

他にいるかもしれない守護獣も真っ青だ。

「なー!?

「ええ!?

「マジかよ!

みんなが啞然としている中、桜(仮)は出来た穴の中へ入り、そしてさらに走り出す。

ちょっとしてから全員は見失ったのに気付き、また探し出すのであつた。

そして、この後いろいろあり、ようやく桜(仮)は捕まつた。と言つより、はやてと一緒にいて、みんなが驚いたそつだ。

兎にも角にも、大事に至らなくて何よりではある。

冒頭に戻つてからのこと。
とりあえず、はやてに懷いてしまつた。

「で、何があつたの？」

ちなみに現在はなのはを呼び、全員でリビングに集まつていた。
一応なのはも居るのでヴィータも帰つてきていくと言ひ事になる。

「うへんとな、ほら、出で来な」

「・・・」

はやての陰から先ほどいの少年、桜（仮）が出てくる。
その姿はまさしく人見知りをする子供のようだ、なのはを見るなり
再び隠れてしまつた。

「・・・えつと、桜？」

「アハ。ちゅうと、いろいろあつてな・・・ってなのはなちやん？」

「・・・」

「どなーしたん？」

「・・・」

「」

「」

つい大きな声を出してしまったのは。

その声にビクッとき、少年は驚いて怯えてしまった。

「のせいで、どうぞ隠れていってしました。

「なのはちゃん、あんま大きな声出さんといで。こわがつとるから」

「でも、この子、すうじへ可愛いんだもん」

「だから、事情説明するから落ちつけねな」

「うそ。」めん、ちよつとテンション上がりちやつて

（事情説明中）

「と聞つ事なんや」

「つまり、シャマルさんの手伝いをしていて、棚から落ちた薬品数種類をかぶつて小さくなつた拳句に、記憶も少し飛んじゃつたつて事？」

「まあ、そんな感じや」

説明をし終わつてだいたいまとめ上げた。
なのは本人はどうしようかと迷つてゐる。

「うへん、どのくらいで治りますか？」

「それがわからないのよ。今日中に治るかもしれないし、明日かもしない。もしかしたら来週かもしれないし、運が悪ければ一生このまま・・・」

「ええー!？」

「解毒薬が作れるかどうかわからないのよ。チャレンジはしてみるけど、時間がかかると困つ

「じゃあ、それまでの間は家で預かりますか?」

「それがいいかもしかんな。テスター・ロッサやヴィヴィオ達も居るのだ。帰らなければ心配するだろ?」

「でもよ、シグナム」

「なんだ?」

「これみて、連れ帰れると思つか?」

横を振り向いてみると、そこにはやはての服の端を掴みながら少し泣きそうな顔で首をフルフルと振つて、「帰りたくない」とアピールをしている桜(仮)が見えた。

これを見てはなのはも無理やり連れ帰るのは出来ないだろ?

「なんか、懐かれてしもつた」

「まあ、鬼じんじゃないかな。フロイトちゃんたちには私がなんとか言つておくし」

「それなら助かるわ。もし、フロイトちゃんが家に来て暴走でもされたらひとたまつもあらへんしな

こうして桜（仮）はハ神家入りを果たしたのであった。

第13話 幼児化桜八神家入り！（後書き）

さてはて、次回はどうしたもんかな。

とりあえず、ネタばれとしてははやてと桜の風呂シーンを（えー

確実に決まってるのは桜が入った八神家の夜ですね。

フェイトさんとマリナがどうでるか・・・（2828

誤字脱字、感想あればお願ひします

第14話 新しい八神家の夜（前書き）

今回から桜は当分「チビ桜」になります（笑）

第1-4話 新しい八神家の夜

「やつと言えば、名前」

「・・・？」

「君の名前。教えてもらつてなかつたやつ?..」

「・・・ない」

「は?」

「だから、名前なんてない」

「・・・ええー?..」

はやての驚きはもつともであつた。

この少年が桜本人と言つ事は、なのはがわかつっていたのでそれでいいとしょつ。

だが、どうして自分の名前を覚えてないのだらうか。

「桜は番号で呼ばれてたんだよ。とつあえずこの子も桜だし、名前で『桜』^{ハル}って付けてあげて」

なのはは驚いていなはやてに小さく耳打ちをする。

それを聞いて、はやはなるせじと顔でチビ桜に寄る。

「じゃあ、名前をつけたる。君は今日から桜や。『桜』と書いて桜^{ハル}や

や

「桜？」

「そ、それが君の名前。良い名前やろ？」

「桜……うん！」

もともとはなのはが考えた名前なのだが、今は気にしてはいけないのだろう。

本人がこんなに喜んでいるんだ。
そんな話、していたらいけない。

「じゃあ、そろそろ私は帰るね」

「うそ。本当、ゴメンな～」

「ううん。今日は可愛い桜を見れたからそれでいいよ。また今度、遊びに来るよ」

「次来る時までに治つてねとちゃんとやけど」

「別に治つて無くてもいいこと」

「へ？」

「だつて、可愛いから」

今のはの頭の中せうひだらう。

「可愛ければいい」

前の状態の桜の強さとかつじよか、今の状態のチビ桜の可愛さ。

比べれば断然後の方が大きかった。

これによりわかるところは女の子は可愛いものが大好きであると言つ事が、確實に嘘ではないと言う事だけだ。後、ついでに今のなのはちょっとおかしいこと。

「そ、なのはちゃんも帰ったし、『飯にしよか

「やつたー！」

「飯だ！飯！」

時間で言つてしまえばもう夕方を過ぎていた。
外は日が落ち始めていて、オレンジ色の空になっていた。
きれいな夕日も見れ、まさしく夕方を意味している。

そして、このタイミングで夕食の準備の開始。
みんな喜んでいるが、チビ桜一人は頭に疑問符を浮かべたままだった。

「あ、そうだ。シャマルとシグナムは夕食まで時間あるから、桜の
服買ってきてえな」

「わかりました」

「はーい

「??？」

またもや頭に疑問符。

もつ、完全に混乱していた。

「ほり、行くぞ」

そんなチビ桜にシグナムは手を伸ばす。
チビ桜は迷うことなく、その手を握った。

そして、3人で仲良く服を買いに行つたのであった。

s i d e o u t

てな訳で服屋。

選ぶのが迷うくらいの量がある大型の店だった。

「い、いろいろあるな

「子供用の服……って桜君何歳?」

「……わかんない。眼がさめてからどのくらいにたつのか覚えてないから」

「そつか~、その身長だと、だいたい6歳か7歳くらいよね~」

「そうなの?」

「う~ん、たぶん」

ちなみに今のチビ桜の身長は、六課の初期時代よりも低く、
外見年齢だけで言えば、6~7歳前後であった。

もつと言えば、ヴィヴィオやシャナ、フルサイズのリインよりも小さい。

まさしく「末っ子」と言つて言葉が似合ひそうだ。

ちなみに、今のチビ桜は

「これなんかどうかな?」

「おお、良いんじゃないか? では、いつかばびつだわつか」

「あ、それもいいね。じゃあじゃあ、今度は」

着せ替え人形にされていた。

本人も面白がっていたのでそれでよかつたが、もし記憶があつたら絶対に怒つていただろう。

そして

「これがいい!」

「お、それか」

「いいわね。すつぐくいい」

選んだ服は、半袖にパーカー、七分のだぼだぼズボンだった。

少年らしさ満開で、かつこいいという言葉と、可愛いという言葉がどちらも当てはまりそうだった。

「じゃ、買つてじょうか。早く着たいしね」

「うん。」

「元気で向むりだ（抱きしめたい！…／＼）」

side out

「ただいまー」

『お帰り～』

服を数着買つてきてから帰宅。

辺りはもつすでに口が落ち、夜になっていた。

玄関で靴を脱ぐや、何せらっこ香りが漂つ。

きっと今夜の夕食の匂いだわ。

「お帰り～。お、桜、かつじよくなつたな～」

「えへへ。ブイー！」

褒められ、嬉しくなつたチビ桜は丶サインをしながら笑顔で返す。

クスクスと少し笑いながら、はやては頭を撫でてあげた。

撫でてもうらつてる時のチビ桜の顔は最初に褒められた時とまつほど嬉しいもつだ。

「あ、いい飯こじよ。桜もお腹すいてるやう～」

そう言いながらみんなリビングへ入る。

「うそー。」

数種類のおかずが、テーブルの上へ並べられ、湯気を上げながら食べててくれるのを待っていた。

そして、全員が席に着く。

「では

『 いただきます』

「い、 いただきます・・・」

おやおやとみんなに続き、 チビ桜も皿つい。 じの辺りなどは、 ほとんど見よつ見まねだ。

とつあえず、 慣れない箸を使い一口。

「 美味しい！」

「 だろ？ はやての料理は、 ギガつまだからな」

「 す、 す、 す、 美味しい！」

「 ふふ、 それなら作つたかいがあるな〜」

今日から新しく、 家族が一人増えての夕食は、 いつにもまして楽し
そうだった。

「・・・（ジー）」

夕食も食べ終わり、はやはては一人洗い物をしていた。ちなみに他のみんなは先にお風呂に入っている。

「・・・（ジー）」

「？ 気になるん？」

「・・・（ノク）」

小さい頃の桜、つまりチビ桜は大抵のものを見て覚えていた。料理の仕方、洗い物のコツ、その他もうもろ全部を他人から見て覚え、自分のものにしていた。

なので今回も同じように、はやはての手の動きを見て覚えるつもりなのだらう。

「待つてな、もう少しで終わるから」

「・・・（ノク）」

「（なんか、すゞく可愛いしな・・・。やつぱりまだお風呂にはいつとらんし、ウチに入る気なんかな？）」

その考えはビンゴだつた。

今の時間までシグナム達とお風呂に入らないと言つ事は、ザフィーラかはやてしか一緒にいる人がいないだらう。だが、今までの行動から見て。

ほとんどはやてに懐いているチビ桜は入る相手がいくらいザフィーラでもイヤがるだらう。

つまりは、はやとと一緒に風呂に入ると嘘つ事が確立されるのだ。

ちなみにチビ桜はさつきからこっちを見ている。

一緒に風呂に入りたその顔であり、言いにくそうな顔だ。
いくらなんでも正直に「一緒に入るわよ」なんて言える勇気はないの
男の娘にはない。

「（ま、まあ、ちっちゃい子供やし。別に、危ない事があるって訳
はないやん。ましてや記憶が戻るなんて・・・）」

で、はやて本人はめっちゃ戸惑っていた。
抵抗があるのか、可愛いから一緒に入つてもいい。
だけど、もし記憶が戻つたらお互い大変なことになる。
危険が重なりながらもどうするか。

いろいろな事を考えて、一瞬で頭がショートする。

「はーーー

タイミングはジャストだった。
もうしようがない、なるようになれだ。
そうして一緒にチビ桜と一緒に風呂に入るのであった。

side out

「おへ、頭、やうやうやなー」

「？？？」

はやてはチビ桜の髪の毛をワシャワシャと洗っていた。
ちなみにタオルを巻いているので見えてはいない。

チビ桜の髪は、男の子が持っているようなバサバサとした髪ではなく、女の子のようにわらわらとした髪をしていた。
それだけではない。

肌も異様に白く、日焼けなんてしていない本当に真っ白な肌だった。

「せ、流すから田、瞑つてな～」

「ん・・・」

頭のてっぺんからお湯が掛けられ、泡が流れ出す。
髪を流し終わるのを確認すると、チビ桜は犬のよつて首を振り、水を弾き飛ばした。

「ひゃ！？ちよ、ビックリするやん

「あ・・・」

「だめやな～、次はやつたらあかんで？」

「・・・（「ク」）」

「なら、許す」

この後、湯につかり温まっていた。

蔭ではシグナムが羨ましそうに見ていたとか・・・。

こうしてチビ桜が入った八神家の夜は更けていったところ。
ちなみにチビ桜ははやてと寝ました。

第14話 新しい八神家の夜（後書き）

> . 1 2 4 1 3 4 — 2 0 5 4 <

寝る前の光景。

はやて

「桜、そろそろ寝 つてもひつ寝とるんか」

チビ桜

「スー、スー」

はやて

「おやすみ、桜」

こんな感じな内容ですね。

さて、次回はミツカラでも出そつかな。

とにかく、チビ桜をこつまで小さくしておひづ。

とりあえず、合宿の回までには戻したいとは思っています。

ちなみに、チビ桜は「ハヤテの」と「」の「三千院ナギ」が若干モチーフとなっています。

似てるところが少ないかもしれないけど気にしたら負けだと思っています。

誤字脱字、感想あればお願ひします。

第1-5話 衝撃告白…ホロかの展開！

「ん・・・」

翌朝、はやは一人目が覚めた。

頭はちよつと寝ぼけているが、手に何やら感覚があった。

チビ桜の手だ。

一緒に寝たから、いつの間にか握っていたのだ。ひつ。

「スー、スー」

「・・・もつ少し寝よか

きれいな寝息を立てながら、はやはの手を軽く握っている。この顔を見たら、フォイトはもちろんのこと、シグナム、マリナ、他全員が「可愛い」と言ひだらう。

はやは軽く握られていた手をこっちから握り直し、そらへ、余っていた手でチビ桜を抱きしめるように寄せて、再び眠りに就くことにした。

side out

今日はやは非番だ。
そのおかげもあってか、チビ桜とゆっくに寝ることが出来た。

ちなみに朝食はリイントアギトが担当。シャマルはもちろんキッチン入りを禁止されているので、毒物は生産されていない。

「今日まだじつような~」

「?」

朝食を食べ終え、今日の予定を立てていた。チジ桜は特に何もすることはなく、はやても同じにこれと同じにこれと書いて予定が無かつた。

「うーん・・・道場にでも行つてみよか?」

「じうじょう・・・?」

ハ神家は道場を持つている。ザファイーラがメインで、ヴィータとシグナムもひょくひょく顔を出していた。

はやてとシャマルもよく行き、おやつなどの差し入れも持つていく事があった。

（ハ神家道場）

場所は変わってハ神家道場。

たくさんの中学生が組み手をしたりしている。

「おおー！」

「ザファイーラ、桜も入れてあげて」

「わかりました」

と言ひわけで早速仲間入り。
どのくらいできるかはハ神家みんなが知っているので、とりあえず
ザフィーラが相手で組み手だ。

「よつ、よつ、とつ」

「お、なかなかいい動きだな」

若干6、7歳の体でザフィーラをまともに相手をしている。
その光景を、他のみんなは動きを止めて見入つてしまつ。

「ミウラ、相手をしてみろ」

「は、はい！」

組み手を途中でやめ、1人の生徒の名を呼ぶ。
彼女はミウラ・リナルディ。

シグナムやヴィーターと練習試合出来るほどの実力の持ち主だ。

「手加減するなよ。ちなみに、こんななりだが実年齢は16だ。今
はいろいろあつて記憶をなくしていく、こんな状態だが実力は本物
だ」

「ええ！？」

まあ、誰でも驚くだろう。

こんな自分より背の低い女の子に見える男の娘の実年齢が6、7歳

ではなく一六なのだ。

さらには記憶喪失。

驚く要素が満開過ぎる。

ちなみにチビ桜は殺氣をバリバリ出している。
完璧にスイッチが入ったのだろうか、眼が本気だ。

「桜、殺すなよ？」

「あ、そっか。じゃあ、掴みと投げは？」

「ありだ」

ザフィーラの言葉で我に帰る。

そしてこの発言=掴んで投げる気満々だと囁つことだ。

「お、お願ひします！」

「よろしく～」

「では 始め……」

お互に一礼をし、ザフィーラの合図で組み手は始まった。

開始直後の先制攻撃はミウカ。

きれいにジャブを繰り出し、反撃をさせないでいる。

「・・・」

「はああ……」

一方、チビ桜は防戦一方。

それでも、ミウラの攻撃を一発もかすりす、いつも簡単にかわしている。

しかも無言で、まるで見定めているようにも見えた。

「…………」

「え？」

右手を左手で受け止め、しつかり掴む。
さらりにそのまま、左手を外される前に右手で胸ぐらをつかむ。
そして最後に、右足でミウラの足を掛け、自身はグルンと回転し、
背負い投げをいとも簡単に決めて見せた。

「え・・・」

『ええええええええ！…………？？』

ほんの一瞬のことと、道場全体が驚きに包まれた。
投げ飛ばされたミウラ自身はそれ以上だった。

身長差がある中、あんなに簡単に投げ飛ばされた。
つこでに胸も触られて、動搖しまくりだ。

「あんだよあいつー！」

「ザフハイーラさんとの組み手もすこかつたけど、ミウラとの組み手
もすこしかつたよなー！」

「あのミウラの攻撃に一度も当たつてないだとー!?」

「あんなに身長差があんのに簡単にミウラを投げ飛ばしたぞ！？」

生徒の中からはいろいろな感想が聞こえてくる。

本人からしてれば、「何のことだうつ？」で済まされそうだが、ミウラは全然そうじゃない。

さつきも書いた通り、動搖しまくりなのでどうしたらいいかわからないでいる。

「大丈夫？」

「う、うん！／＼大丈夫！／＼」

笑顔で手をさしのばされたミウラ。

大きくても小さくとも、桜の笑顔は殺人スマイルなのか。ミウラも面食らってしまった。

とりあえず、差し出された手を取り立ちあがる。顔が赤いまだが、チビ桜は気にかけていない。

「・・・ザフイーラ」

「？ どうした？」

「もつかいやつてもいい！？」

「あ、ああ。いいが。ミウラはいいのか？」

「あ、はい！」

「じゅ、やねー。あぐれまやねー。瞬く間にやねー。瞬時にやねー！」

ミウラが無事+投げた時の快感=面白い
が、チビ桜の頭の中に確立していた。

やらなければ気が済まないのかもしれない。

一応手加減する気なのだが、投げ飛ばしたいのだろ？

この後、何回もミウラとの組み手が始まった。
その全部がチビ桜の背負い投げで終わつたのは言つまでもないだろ
う。

side out

「ふう、疲れた」

「すいじね桜さん。何回も投げられちゃつた」

「？　さん？」

「あ、そつか。いや、なんでもないよ」

「あお？なんか変だな～」

練習も終わり、みんなが帰つてる中、ミウラとチビ桜は残つていた。
何度も投げられていて、その度に笑顔で手を差し出される。
面食らいながらも立ちあがるを繰り返した結果、完璧にミウラは落ちていた。

チビ桜本人もミウラに懐いてそうなのでまあいいのだが。シャナがどういう反応するかが、すごい気になる気がする。

「じゃ、僕も帰るね」

「あ、ミウラ」

「ん? 何?」

この後の言葉はものすげ衝撃な内容だった。

その場にザフィーラとはやでだけだったからよかつたものの、シグナムやフェイトが聞いていたら大変なことになつていただろう。

「僕、ミウラの事好きだよ」

この言葉を聞いた時のミウラは顔が真っ赤だったとか。

第1-5話 衝撃告白…まさかの展開…（後書き）

まさかの終わり方（笑）

次回はどうなるやう。

まだまだ未定ですね。

わて、元に戻つたらどうなるんでしょうか。

誤字脱字、感想あればお願ひします。

第1-6話 理由は普通／朝起きたらある意味ハッピー

「僕、ミウラの事好きだよ」

その一言は凄まじい威力だった。

特に、言われた本人のミウラは相当なものだろ。いや、もしかしたらそれ以上かもしれない。

と言つかなんでいきなり告白したのだろうか。

それはきっと、今のチビ桜が正直だからなのかもしれない。

「え、えっと、うーんと・・・」

一方、ミウラは戸惑っていた。

いきなり告白されれば、誰だって反応に困る。

「・・・あ～、ミウラもつ遲いかり帰るか？」

沈黙を破ったのはザフューラだった。

早くこの空気を変えなければと察したのだらう。

これによつ、わたくしの空氣はガラリと変わり、普通の空氣へと変わつた。

そして、ようやく落掛けを取り戻したミウラもそれに返す。

「は、はー」

ミウラが帰ることになるが、チビ桜は止めようとしない。また会えることを確信しているからだらう。

「じゅ、じゅあ、また・・・明日」

「うん、また明日」

「ひしめ、//ウラの恋が始まったのであった。

side out

「なあ、桜。なんであんなこと言つたん?」

「? 何の事?」

「//ウラ」「好きだよ」 つて言つた事や

その日の夜。

チビ桜はまたはやてと一緒にお風呂に入っていた。

そして何故いきなり告白をしたのかわからなかつたはやはては一応聞いてみる事に。

「えへっと、やつ思つたか?..」

答えは案外普通だった。

別に何か特別な訳でもなく、本当に普通な理由だった。

「後、可愛いし、組み手してる時もすっげ楽しかった」

「そ、そりがあ・・・(あかん。これ聞いたら//ウラ本人は喜びそ

「やめやめ、ハイトイトわやんやシグナムはがつかつするやうにな……」

（）

「？？？」

「（でもまあ、これも今のうちだけかもしれん。元に戻つて記憶も戻つたらちゃんと選ぶかもな）」

「お母さんへ。」

「あ、『メンハ』『メンハ』。手、止まつてたな。……って今なんて？」

「お母さん」

「……ええー？」

話を切り替えて。

わらわの一言はさりげなかつた。

いや、まあどうしてそう呼んだのかがわからない。

「な、なんでー!? なんでウチがお母さんー!？」

「ん~、わつ思つたから?」

「疑問形ー?」

素直すぎるのがチビ桜の特徴もある。

それにもしても、この子は本当に正直で、騙されるんかないかと思つてしまいそうだ。

まあ、そんな輩はいたとしてもやらせないが。

「イヤだ？」

「ううん。イヤじゃないよ。むしろここへらこや

「やったー！」

別に断る理由もなく、こう言つた子供相手も得意な方だ。
それにこれはこれで面白そうだと思い、はやては返事をした。
何かの選択を間違えなければ大丈夫なはずだ。
間違えなければ、だが。

「あ、流すから田、瞑つてなー」

「ん」

髪の毛に付いている泡を流し、湯につかる。

2日目にしてもうこれが定着してしまつっていた。

こうしてまた夜が更けて行つた。

s i d e o u t

「・・・？」

翌朝。

特に何かあったわけではなかつたが、チビ桜は一人早めに起きてし
まつた。

「・・・うん？」

ただ、今日は昨日とは少し違った。

なにやら、顔のあたりに柔らかい感触がある。

まあ、率直に言つてしまえばはやての胸だ。

今チビ桜ははやての胸の谷間に顔をうずめていたのだ。

「んあ・・・・」

ちょっと顔を動かしたせいが、はやてが反応する。
その声にビックリしてしまい、飛び退こうとした時だつた。

ガシッと体をホールドされ、さらに引き寄せられる。
これのせいで完璧にチビ桜の眼は覚めてしまった。

「・・・」

だが、意外や意外。

チビ桜はちょっとずつだが眠たくなつてきていた。
はやてのいい匂いが香つてきて、胸の感触もあり、眠くなるのが
良く判る。

「・・・スー、スー」

程なくしてチビ桜は眠りについた。

きれいな寝息を立て、先ほどまでと同じような状態になる。

で、こんどは

「・・・ん」

はやてが起きた。

そしてすぐさま胸元のチビ桜に気がつく。

「あ・・・／＼」

違和感ではあったのだが、ちょっとよかつたりもしていた。
つまりは、若干感じていたと言つことだ。

「ひ・・・もつかい寝よ・・・／＼」

眠りに就こうとしたが、なかなか眠れない。

こつじてははやては一番最初に田を覚ましたのであった。

第1-6話 理由は普通／朝起きたらある意味ハッピー（後書き）

あれ？なんか微妙でしたか？

自分的にはちょっと微妙でしたね。

でも、楽しんでいただけたら幸いです。

それにしても、もう少しショウジョウが悩みまくっていますね。

このままチビ桜で行くか、もしくは戻して行くか。

ビリビリ・・・。

まあ、それは後々考えるとしましょう。

うん、それがいい。

最後に誤字脱字、感想あればお願ひします。

第17話 復活の相棒／新しい家族×4（前書き）

今回からさりげなくあの人気が復活！

だが残念ながら、記憶は・・・。

第17話 復活の相棒／新しい家族 × 4

「え？ 今日、来るん？」

桜がチビ桜になつてからだいたい1週間。
ある日の朝、はやてに連絡が入つた。

今日、なのはとフュイトが遊びに来るらしい。

「うん、わかつた。じゃ、後でな」

「お母さん、誰か来るの？」

ちなみにチビ桜はあれ以来、はやての事を”お母さん”と呼んでいる。

本人いわく、そう思つたからそう呼んでいるらしい。
はやてもイヤがつていないし、まあ、よしとしよう。

「友達が来るつて。この前来たなのはちゃんも来るんよ」

「・・・？」

「どんな人だつたか忘れたつて顔やな。まあ、しうがないわな・・・

「だつて・・・」

「いいんよ。覚えてないなら、今日覚えればえんやから」

「うん」

正直言つて、チビ桜がなのはの顔を覚えていないのは無理があつた。
この1週間、本当にいろいろあつた。

そう例えれば

side out

だいたい4日ほど前。

その日、チビ桜は魔法の練習をしていた。

なんですか魔法の事を知つていて「使つてみたい！」と言つてみたところ、「ちゃんと使つて約束するなら、使つてええよ」と言つた
はやての返事により、使用を許可される。

で、驚く事がいくつかあつた。
まずは一つ目。

「これ、桜の魔導書」

持つてきていて、放置しちゃなしだった死靈秘法。
めぐつてみると、『管理人格の体を形成し、再び活動させるために
は後399ページ分の魔力が必要とされています。なお
などなどと書かれていた。

管理人格とはアル＝アジフの事だろう。

どういう事なのか本人に聞いてみたかったが、今の状態では無理だ。

「ん~、仮契約してウチらも魔力供給つてできんのかな？」

その言葉に反応したか、文字が消えて一言浮かび上がった。
『仮契約、およびその状態での魔力供給は可能です』と。
もし本人がこれを出来たら驚くだろう。

仮契約でも出来たの！？と言いつつなぐりい。

そんな感じで、八神家のみんな（ザフィーラとチビ桜以外）が呼び出された。

そして、死靈秘法の餌食になつたのであった。

side out

「桜、ちょっと、来て」

「？」

「新しい家族が出来たから。桜に紹介せなあかんからな」

そう言ってチビ桜も呼び出された。

そして、会う相手は

「あなたが私のマスター？」

「ますたあ？」

「うんとな、この子は桜の融合機つて言つて、一緒に魔法を使つて、
桜を補助してくれる子や。わかる？」

「た、たぶん……」

「で、桜がこの子は魔導書つて言つ本が元の姿や。その魔導書の持ち主が桜やから、桜の事を『マスター』って呼ぶんや」

「……」

「つまり、わかりやすくいと桜の新しい家族つて事や。今日から、一緒に暮らす新しい家族」

「家族……」

「私、アル＝アジフーよろしくね、マスター！」

「アル……うん！」

最速で仲良くなっていた。
飛びついてきたアルを頭の上に乗せ、スキップをして走り周る。
何か、お互ひの共通点的なものを見つけたのだろうか。
どちらにせよ、本当に仲がよくなつて何よりだ。

「？」

「なんだ？」

桜の後を付けていく、奇妙な3匹の生物をアギトとコインが見つけた。

1匹は鳥のように羽を生やし、もう1匹も羽を生やしているが、どちらかと言ひと翼で、4足歩行する獣、最後の1匹は長い尻尾、鋭いくびばしをもち、まさしく日本にこそうな竜だ。

君達、何処から来たの？」

程なくしてチビ桜も後ろの生物に気付く。
話しかけるが、なんと言つてるかわからない。
何せ、鳴き声なのだから。

「これ、マスターの召喚獣。今は小さいけど、マスターがちゃんと力を使ってくれれば元の姿になるよ」

「へえ。名前は？」

גָּדְעָן

ギュグワー

「ギヤワード」

？」

「」の青い鳥がシャンタク。白いこの子がティンダロス。最後にこの竜がハスター

再版を祝うこゝよ。」

一番最初に「ピュイー」と鳴いたのが青い鳥シャンタク。次に「ギュグワー」と鳴いた白い翼をもつた獣がティンダロス。最後に「ギャワー」と鳴いた竜がハスターだ。

さて、まずはこれが一つ目だ。

で、一つ目

「あれ？」

魔法の練習を再開した時だつた。

何でか、氷が出来あがつてゐる。

やつた本人も、他みんなも驚いていた。

「へ、変換資質・・・？」

「せうみたいですね・・・」

「？？？」

頭に大量の疑問符を浮かべ、さつき出来た氷を眺めている。
ちなみに今は頭の上にシャンタクが乗つており、右肩にティンダロスとハスター、左にアルが座つていて、チビ桜と一緒に氷を眺めていた。

「せう言えば、桜君つて変換資質、持つてませんでしたよね？」

「ああ、持つてないな。アルと契約したからつて着くもんじゃねえし」

「どうしてなんでしょう？」

「さあな」

と、まあ、いろいろあつたのだ。

アルが復活して一緒に生活したり、召喚獣計3匹の世話を大変なので一度しか会っていしないなのはは覚えられなくて当然だろう。

「シャンタク～、起きなよ。そろそろ重たくなってきたから降りて～」

「ピュイ～」

「えらいえらい。で、今日も元気に行こう～」

「ギュグー」

「ギャワー」

「私は～？」

「アルもちゃんといるよ。と言つが、シャンタクぢたばっかりなのに頭の上に乗るのは・・・」

「あ、ゴメン」

「まあ、いいよ」

そしてアルがいたためか、最初のころよりチビ桜の表情に種類が増えた気がする。

わかりやすく言うなら、最初は笑いは笑い単体と言つた種類の無いものだつたが、今では一つの表情に種類が増えた。

苦笑いだつたり、満面の笑みだつたり。
それに関しては、はやてもとてもうれしく感じていた。

「あ、来た見たいや。桜、出迎えにい」

「うん」

第17話 復活の相棒／新しい家族×4（後書き）

次回は久しぶりにメインキャラ（フェイト、シャナ、ヴィヴィオ）が登場！

みんなが期待していた展開になるか！？

さて、ここで今回出てきた召喚獣×3の紹介をしよう。

シャンタク

備考：元ネタは「幸せの青い鳥」他。

普段はフリードと同じように小さい姿。

レアスキルではなく、普通の長呪文詠唱で本来の姿へ。

メインカラーは蒼。

好きな食べ物は冷たいもの。

好きな場所は高い場所と桜の頭の上。

ティンダロス

備考：元ネタは「ベリオロス」と「クトゥルフ神話」他。

普段はシャンタク、ハスター同様、小さい姿。

同じように普通の長呪文詠唱により本来の姿へ。

メインカラーは白。

好きな食べ物は冷たくて柔らかいもの。

好きな場所は涼しい所と、桜の肩と頭。

ハスター

備考：元ネタは「アグナコトル亞種」と「クトゥルフ神話」他。

上2匹と同じように普段は小さい姿。

長呪文詠唱により本来の姿へ。

メインカラーは灰色と氷色（水色）。

好きな食べ物は冷たいものと桜の料理。

好きな場所は冷たい（涼しい）場所と桜の背中と肩。

今のところの設定はこんな感じです。

後々しっかりとキャラ紹介で紹介したいともいます。

誤字脱字、感想あればお願いします。

第18話 O H A N A S H I M O J Y U 。 K U R O M O J Y U

「こなんにちわー」

「いらっしゃーい。フェイトちゃんはお久しぶりやな」

「うん、久しぶり。今田はヴィヴィオ達も来てるんだよ」

「そつか。じゃ、桜。出て来な」

「・・・」

「「ー?」」

今日の来客はなのは、フェイト。
それにヴィヴィオとシャナだった。

そして、前と同じようにはやての陰からチビ桜がひょーひつと出きた。

やつぱり大人の人に対する人見知りは治っていないようだ。

「・・・ハ、桜です」

「まあ、今はこんなんなつてるのは前に話した通りや。人見知りは許したげで」

「ヴィヴィオ、シャナ?」

「「か」」

「 「 「 「 か?」 」 」

「 「 「 可愛いーーー!」 」

「 (ピクッーーー) 」

例によつて例がごとく、ヴィヴィオとシャナもあえなく撃沈。フェイトはかるづじて我慢をしていたので暴走はしていない。と言つかしたらなのはに止められること間違いなしだつ。ひりだつ。

「 なのは」

「 な、なに?」

「 お持ちか 「ダメだよ?」 でもでもーーこんなに可愛いーのこー!」

「 (ガクガク) 」

「 フH、フHイトちゃん、本当にこきなつあつくな出すのやめてくれへん? 桜が怖がつて・・・」

「 そつだよ。ヴィヴィオもシャナも、大きな声出したら桜が怖がつちやつからね」

「 「 はーー!」 」

「へへ、アルって名前なんだ」

全員玄関で話すのはやめ、リビングにいた。
ちなみに復活して記憶のないアルと召喚獣×3匹を紹介などをしていたところだ。

「この子、記憶が無いんやけどな。何でかまつさらな状態じやなかつたんよ。不思議やな～って思つて」

「確かにそうだね。リインも最初はまつさらな状態だったのに」

「お母さん、僕お茶入れようか？」

「あ、頼んでええか？」

「こんなさりげない会話だった。

だが、このさりげない会話を見逃すのはではない。

チビ桜がキッチンへ向かおうとした時だった。

「お母さん？」

「あ

「お母さん？」

「え？あ、何でもないよ。みんなの分入れてな」

「う、うん

そつまつて叫びキッチンへ向かつ。

そして、キッチンへ姿を消した後の「じだつた。

「はやでちやん、向いひで少し〇 ハナナ SHHしそうか」

「え、あ、ちよ、なのはちやん。それはホンマにやめてほしこって
言つか、やめてくれないとウチが大変なことになるつて言つか、あ
の、その」

「言こ訳は後で聞くからね」

「わわ――――――――――――」

八神家にはやでの叫びが響いたのであった。

s.i de out

「あれ～お母さんま～」

「・・・えつと、ひょっと散歩に出てるわ」

「あ、そつなんだ」

「とこるで、桜さじうてはやしを“お母さん”って呼ぶの?」

「ん～、わう思つたから?」

「どうなにいろがお申せただって思つたの？」

「えつと、優しくして、一緒に過ごすところ匂いがして、暖かくて、安心できるから」

めちゃくちゃ素直な意見で正直フレイトは驚いた。

それと、ちょっと疑問が浮かぶ。
一緒にいること言つ事は夜も一緒にすることだ。

そうなれば当然

「一緒に寝たりしての？」

「うふ。毎日一緒に

と話すことなる。

そしてせりて爆弾発言。

「お風呂も一緒に、髪洗つてもらつたりとか

この一言でフレイトにもスイッチが入った。

「ちよつと、私も散歩に行つてくるね。ヴィヴィオ、シャナ、桜の
事見ててね」

「うふ、フレイトママ

「こつこつしゃべー

「行つあひつのへ・フレイトお姉ちゃん」

だがしかし、さらに重ねられたこの一言でスイッチはOFFになる。ピタリと足を止め、戻ってきた。

「やつぱりいいかな。なんだか、桜危なつかしいから」

「ホント?」

「うん」

さすがはフロイト。

「僕の本には物語

いるのだ。

「た、ただいま・・・」

「あ、お帰り
つて大丈夫！？ぼろぼろだよ！？」

「う、うん、大丈夫やから」

「お母さん、無理しちゃダメだよ？」

「うん、ありがとうございます」

場所は変わつて八神家道場。
ちなみに今日は誰もいない。
休みといひつけどだ。

「本當にやせるの?」

「うん」

「…・やまけん?」

「私はいいかな。やるのは今度で」

「やつ。じゃ」

一呼吸置き、言い放つた。

「本氣でやるつか」

第18話 O H A N A S H I H I M E J Y U 。 K U R U C H I M E J Y U (後書き)

次回はヴィヴィオ対チビ桜！

お互いの全力と全力のぶつかり合い！

勝つのはどっちか！

誤字脱字、感想あればお願ひします。

第19話 対決！チビ桜 vs ヴィヴィオー！（前書き）

はつきりって今日は短いです。

これも、次回のためなんで許してください。

第19話 対決！チビ桜vsヴィヴィオ！！

「はああ！！」

先ほど、チビ桜とヴィヴィオの戦いが始まった。

チビ桜が格闘技をやり始めたと聞いて、居てもたっても居られなくなつた。

それで、八神家道場を借り、今に至ると言つことだ。

「・・・・」

「はつ・・・・」

なぜかいつも防戦一方のチビ桜。

どうしてかわからないが、これがチビ桜の戦い方なのだろう。

ヴィヴィオのカウンター・ヒッターよりも一つ上、カウンター・アサルトと言つたところだらうか。

「・・・・強・・・・」

「まだまだ！」

チビ桜は防戦一方なので、常に攻撃を受け続ける。

しかも、ヴィヴィオは普通に強く、攻撃も早い。

なので反撃の隙ができないのだ。

「・・・・う！」

反撃のチャンスが見えない。

それすなわち、チビ桜に勝ちへの道が閉ざされたままと云つことだ。

一撃もくらつてないからダメージはない。

だが、体力がなくなればいざれはくらう事になる。
だからこそ、早く反撃したい。

「はああーー！」

「・・・いまー！」

ヴィヴィオは力が込めた一撃を入れようとした時だった。

待ちに待つチャンス到来とばかりに、チビ桜は今回も受け止めずに流した。

そしてそのまま流した腕を掴み、ミウラの時と同様に胸ぐらをつかむ。

一瞬にして脚を掛け、バランスを崩し始めたところで背負い投げをかました。

なんで毎回背負い投げかと言うと、本人も何でかよく判っていない。ただわかる事は、カウンターにはうつてつけで、なお且つ相手を傷つけない。

それと、相手の顔を汚したり、傷をつけたりしなくて済むと言つ事だ。

「ふう・・・危なかつた・・・」

「・・・」

「大丈夫？」

「う、うん」

一瞬で投げられ、唾然としていたヴィヴィオ。いや、なのは達も驚いていた。

何せ、記憶が無い上につい先田格闘技を始めたばかりだと聞いていた。

なのにヴィヴィオの攻撃を一撃も当たらずかすめず、むらには流して背負い投げをした。

通常なら、まず出来ないだろ？ でもチビ桜はやつたのだ。

これを見て、驚かないのは無理と言つものだ。

「君、強いね」

「モ、モウ？」

「うん、粘り強くて、攻撃も早い。普通、攻撃が当たらないといらいらくるでしょ？ そうなつたら無意識に力んで攻撃を入れてくるから返しやすいんだけど、君はいらっしゃことなく、しつかりとした攻撃をしてきた。それだけでも十分強いつてわかる」

これは6、7歳の言葉ですか？と思えるほど的確且つわかりやすい言葉だった。

記憶をなくしても頭の良さはほととどそのまんまかもしれないと思えてしまつほどだ。

“私は攻撃なんか仕掛けない”ってね

こんなカッコイイ言葉も言つてしまつた。

まさしく、頭の良さがそのまんまと確信させる。

だが、実際そんなことはなく

「まあ、これは知り合いの受け売りだけね」

「へ？」

ただ覚えたことだった。

知り合い、と言うのは研究所にいた時の唯一一緒に戦った人物だ。戦い方を教わったのも、何もかも全部そいつに教えてもらった。ある意味での恩人であり、師でもあったが、殺されてしまった。

「僕の戦い方はあいつが教えてくれた。似てない部分がたくさんあるけど、それでもいい。だつて僕が好きになれて、好きになつてくれた人だつたから」

「そ、そりなんだ」

「つて、君に言つてもわかんないか。もう、死んじやつたし。半分は僕が殺したようなもんだし」

「ねえ、桜」

「? 何、フェイトお姉ちゃん」

「その、出来たらでいいんだけど。覚えてる事だけでいいから

この一言で、なのは達は桜をもつと知ることができただろう。そして、さらに好きになつた。

「昔の事を教えてくれないかな」

第19話 対決！チビ桜 vs ヴィヴィオ！！（後書き）

次回は過去の話かな。

桜が研究所にいた頃の話になります。

とりあえず、桜の初恋の相手が登場（名前は無い）！

誤字脱字、感想あればお願ひします。

第20話 過去の記憶／私は攻撃なんか仕掛けない

「いいよ」

返答はあっさりだった。

聞いた本人、つまりはフェイトが一番驚いていた。

普通、昔の事なんて思い出したくないんじゃないかと思つていた。
それも踏まえて、聞いてみた。

なのに、こんなあっさり「いいよ」なんて言われれば驚きもあるだ
ら、うづ。

「どがあたりから話そつかな。最初から？」

「や、そこは桜に任せるとみ」

「じゃあ、めんどいけど最初から」

side out

少し昔の事。

まだ桜が研究所にいた頃。

実験体、数だけで言つたら軽く1000は超えていた。

そんな中、1人のクローンの少年が目を覚ました。

No.44

それが少年の名前、と言つより呼ばれ方だった。

目が覚めたらわけのわからないポッドの中。

何もせず、その中で目が覚めてもまた眠り続けた。

悲しい夢を何度も、涙を出しながら見続けた。

何年か経つと実験室と言つ名の殺し合いの戦場に放り込まれた。そして、ただ1人生き延びるためだけに殺しまくった。

「！？」

「お～、危なかつた～」

不意をつかれ、殺されかけた時だつた。

その不意を突いてきたやつを自分ではない誰かが殺した。

振り向くと、そこには自分よりも年上だとわかるぐらい少し身長が高く、血が飛び散った綺麗な銀髪を持った少女がいた。

「礼は言わないぞ」

「あいや？ そう来る？」

「まず誰だよお前。ここで誰かを助けるなんてバカじやねえの？」

「ひどいわね。命の恩人にそれはないんじゃない？」

「つむせー、黙れ。バカは嫌いだ、殺すぞ」

「出来るものならね」

「なら、早速！」

遠慮なく、見境なく攻撃を仕掛けた時だつた。
目の前にいた少女は消え、いつの間にか天井が見えた。

「・・・今何した？」

「投げただけ。私は攻撃なんか仕掛けないもん」

「・・・何したいんだよ、お前」

「普通に生きたい。この殺し合い、私たち以外殺せばもしかしたら
2人で生き残れるかもよ？」

この言葉を聞いた時は一瞬でこいつがバカだと悟つた。

ただ、実力は本物。
それだけは保障できた。

「聞いてなかつたのか？生き残るのは最後の一人だつて」

「だから、あえて2人残るのよ。残つた2人が殺し合わないのを見
かねた研究者がどつちも生き残らせてくれるとか」

「あつそ」

「ちなみに聞くけど番号は？」

「44」

「あ、奇遇ね。私4番」

「だからなんだよ」

「運命つてヤツ?番号が似た者同士、頑張りましょ」

「勝手にしろ。ただし、邪魔だけはするなよ」

「素直じゃないな〜、もつ」

こんな感じで、2人は出逢った。

一緒にいた時間は短かったけれど、それでも良かつた。
戦い方を教えてもらつて、2人で頑張り続けた。

「はあ、一体どれだけいんだよ」

「さあね」

「しかも、周りのヤツら、全員僕たちに狙い定めてるし。ある意味
でフルボッコだな」

「じゃあ、とことんやりましょ。そっちの方がいちこちこいつか
ら仕掛けなくて済むもん」

「もしかして、楽しんでる?」

「あ、ばれた?」

「殺しを楽しむって・・・何処の殺人鬼だよ」

「そんな殺人鬼に手を貸してる君はなんなのかな〜?」

「ただのもの好きで、バカな奴さ」

「違ひよ」

「え？」

「君は私の王子様」

ちょっと、ビックリした。

まさかいきなりそんなこと言われるなんて。
予想外にも程がある。

「なー?お前、何言って んむつー?」

これもやつぱり突然だった。

しかも、さつきのなんて比じやない。
ビックリなんてもんじゃなかつた。
だって、キスされたんだもん。

「・・・」

「全部終わつたら、ちゃんとじょづね」

「う、うん・・・」

その言葉の直後、周りのヤツらが襲いかかってきた。
全て、軽くあしらい、投げ飛ばし、勝手に自爆させまくった。
そして、最後の1人まで減らした時だった。

「もうつたああー!!」

「！？ しま」

どうしていつもいつもなのだらうか。

不意をつかれて、殺されかける。

でも、いつまでたつても痛みは来ない。

瞑つていた目を開けると

「大・・・丈夫・・・？」

血まみれのあいつがいた。

その姿を見て、すぐに何をしたかわかる。

「お、お前・・・まさか僕をかばつて・・・」

「うん・・・。だつて・・・君には・・死んでほしくなくて・・・」

「

「だからって！なんで！そこらへんに転がってるヤツらを盾にするとかあつたる！？」

「はは・・・ゴメン、君しか見えなくて・・・盾にするためのヤツなんて・・・見てなかつたよ・・・」

「・・・ふざけるな！僕と2人で生き残るんだろ！お互に名前を付けあうんだろ！一緒に楽しく暮らすんだろ！こんな所で死ぬなよ・・・」

眼から涙が止まらなかつた。

人を殺していく、涙なんて流さなかつたのに。

殺すのを見ても泣かなかったのに、何で今更。

「私のために・・・涙を・・・流してゐる・・・？」

「・・・当たり前だろ！だつて、少しの間だけだけど、僕はお前といて、すじく楽しかった！さりげない会話も！教えてくれた戦い方もー全部全部ーお前がいたからー」

「・・・私つて・・・そんなに君の中では・・・大きかつたんだ」

「そりだよー大きいよー！もう、全部つて言つていいくらいさー！そんぐらい、僕は君が好きなんだよー！大好きなんだよー！だから・・・死なないでよ・・・」

「そつか・・・じゃあ、名前を・・・付けて頂戴。どびつきり・・・かわいいのを」

「・・・うん。君の名前は・・・ごめん・・・僕・・・バカだから・・・まだ考えてなかつたんだ・・・」

「そうだろうと思つた・・・なら、今回は

冷たくなつてきた手で顔を触られた。

何もせず、ただ、何をするのか待つていた。

そして、またキスをされた。

冷たくなつた唇でキスをされた。

「これで、許してあげる・・・」

「・・・」めん・・・僕、何もできなくて・・・

「泣かないの・・・男の子・・・でしょ?」

「うん・・・」

「眠たくなつてきちゃつた・・・寝てもいい?」

「うん・・・お休み・・・」

この言葉を最後に、彼女は動かなかつた。
だけど、やっぱり受け止めきれなかつた。
死んでしまつた彼女を抱きかかえたまま、涙が枯れるまで、ただただ泣き続け、叫び続けた。

誰かが寄つてきたのを見ると、遠くからナイフを投げつけて殺す。
彼女には指一本触れさせなかつた。

「ねえ、4番だからフォーリーって名前はおかしいかな?」

1人、ただ自問自答を繰り返した。
周りからは狂つてゐると思われても気にしない。
それがその時の自分だから。

「いや、もういいや。全部終わつてからゆづくり考えるよ」

その時からだつただろか。

理性を、感情をなくして、獣のように相手を躊躇したのは。
それでも、いくら殺しても自分の心は埋まらなかつた。

「で、500か600ぐらいかな。そんぐらい殺した時に意識を失つた。で、僕が体感していた時間では数十時間以上。そんぐらいして、目が覚めたら家にいたって感じかな」

チビ桜の話が終わった。

ちなみに、ヴィヴィオとシャナは刺激強すぎるので退席中。聞いていたのはなのはとフェイト、はやてだけだ。

「好きな人を殺されて、暴れまわるって、僕ってやっぱりバカだよね~」

今ではこんなに一コ一コしていた。

さつきの話の内容からは想像もできない程の笑顔だ。

「僕つてさ、バカだけど、バカなりに考えてるんだ。強くあれば、隙なんか作らず、誰かにかばつてもうことなんてないって。そうすれば前みたいな事つて、なくなるんじゃないかな」

「・・・」

「なんか、すつごい暗いムード。つまんないからやつらの話になし!...さつきみたいに元気に行けりゃー!」

「桜・・・」

「お母さんも。ね?」

「せうやな。暗いムードは詰まらんもんな」

「だからさ。もつと笑顔でこようよ。そつちの方が絶対言いに決まつてるー。」

無理やりにでも雰囲気を良くしようとしていた。
もし、なのはがあそこにいなければどうなっていたのだろうか。
それが気がかりでしようがない。

「なのは」

「なに、フロイトちゃん」

「私、桜のこと全然わかつてなかつた。でも、これでやつとわかつた氣がする」

「そう。私も同じ」

桜の涙と笑顔の意味。

それは、無くなつたものたちへのせめてもの報いだった。

第20話 過去の記憶／私は攻撃なんか仕掛けない（後書き）

なんだらう、書いてて涙が・・・。

まあ、とりあえず、まとめましょう。

桜が本気で泣くのは自分が大切に思う人のため。

満面の笑みは感謝と、大切な人へ今の自分を見てもらうため。

よく判らないって言つてください。

最後に誤字脱字、感想あつたお願ひします。

第21話 元に戻つてヒックリだらけ（前書き）

今回はついにチビ桜が元通りに！

体と記憶は元に戻つたがはたして・・・。

第21話 元に戻つてヒラククリだけ

桜がチビ桜になつて1週間。
はやて達に過去を話してからこれまた1週間。
合計2週間がたつたある日。

「これなに?」

渡された薬を見て呟いていた。

「これは、うーんと……」

無論、チビ桜を桜に戻すための薬だ。
だがどう飲ませるかが問題だ。

ストレートに言つのもありだろつ。

だが、なんだかそれじゃ無理な気がしたので迷つていた。

「えつと、そう、お薬! 桜君の病氣を治すお薬!」

「僕、病氣なの?」

「そう、だから、と、とりあえず、それ飲んでみて

「むう・・・わかつた」

しぶしぶ薬をのみこんだチビ桜。
だが、効力が見られない。
しかし、1分後・・・。

「あれ？俺、何してたんだっけ？」

元に戻った。

今のところ記憶だけだが元に戻っている。

「あれ？シャマル先生、かたづけも終わったんですか？」

「えっと、桜君。何も・・・覚えてないの？」

「え？何かあったんですか？俺、思い出せなくて」

「嘘・・・」

「？ そう言えばなんか、目線が低いな。どうし

気がついた。

自分の身長が無駄に小さくなっている事を。

「ええええええええええええええ！――！――？――？」

「お、落ちついて桜君」

「これが落ちついでいられますか！こんな姿をフュイトさんやシャナに見られたら絶対抱きついてきますよ！？どうしてくれるんですか！」

「そ、そのことなんだけど」

（説明中）

「では、俺がシャマル先生の手伝いをしている時に頭から薬品を数種類かぶり、駆け付けた時には小さくなつて記憶のない俺がいて、今まで俺の世話をしてくれたって事ですか？」

「簡単にまとめるところ。で、さつき飲んでもらつたのが記憶だけを元に戻す薬。どういう作用かは秘密よ」

「そんなことはどうでもいいですけど、体の方はどうなるんですか？一生このままとか言つたら泣きますよ？」

「大丈夫。ちゃんと用意してあるから。飲んで効果が出た後着替えで頂戴」

「了解です。んぐ」

と言つわけで薬を飲んだ後。

「こゝは風呂だ。

一応体の大きさが異なるから、元に戻つたら服が破けるとの事で、こうなつた。

ついでに風呂にも入りたかつたらと言つ理由もあるが。

「あ、戻つた」

手を握つたりひらいたりして感覚を確かめる。

うん、しっかり動くな。
脚も、しっかり動くな。

「シャマル先生、着替えは　」

「はーい、こゝに置いておくわねー」

「ありがとう」「さあ、」

少しうつむいてから上がる。

さつぱりして、良い気分だ。

それに久々に入つたつて感じだな。

「ん？ あれ？」

鏡を見ていて、あることに気がついた。
そして鏡に映つた自分の顔を凝視する。

「左目が……蒼色になつてる……だと……？」

そう、左目が蒼くなつていた。

右田はなんともないのに、何でか左目だけ。
まあ、いいや。

気にしないでおこう。

「シャマル先生、あの、俺の魔導書、知りません？」

見当たらなかつた死靈秘法。

一応何処にあるか聞いてみよう。

「え？ アルちゃんならここにいるわよ？」

「へ？」

「んこやう……マスター……」

「ええええええええええええ！――――――」

本日二度目の叫び。

今度はせよ二と小きめにしたかと大丈夫なはずだ

「え、ちょ、ええ！？ア、アル！？そ、そんな！魔導書じや！」

「それがね、みんな仮契約して、ギリギリまで魔力供給したの。そしたら、こいつなつちゃったわけ」

「・・・お、俺の今までの努力は・・・」

「無駄だつたみたいね」

「はあ、そう言うことならしょうがない。今度陰で1人泣いてすませよ。ちなみにお聞きしますがこの3匹は？」

「桜君の召喚獣」

はい、これで3度目。

うん、喉が痛いよ。

「なんで！？俺、レアスキルすら持つてませんよ！？」

「でもなんでか出て来ちゃつて」

「出で来ひやつて、じやないですよー・・・まあいいか。フリーデ

見たいで可愛いし

「ピュイー？」

「お？ 起きたみたいだな。おはよ」

「ピュイー」

「うわっと、そこがお気に入りか？」

「ピュイー」

「やうかそつか」

悪くないかもな。

召喚獣つて、何かと大変だと思ったが大丈夫そうだな。
うん、ペットみたいで可愛い。

感想はそれだけだ。

「あ、マスター、おはよ！」

「お、俺がわかるのか？」

「マスターでしょ？ だって、魔力が同じだもん」

「そ、そつか。って喋り方がおかしいな」

「そう？ 私は最初からこれだけど」

「アルちゃんは記憶とかないから気を付けてね

「ああ、そうか。なら納得だ

「もう言えども、今日まだつくるの？」

「一応、今日も泊らせて下さーい。お礼もしたいですし。この体を何処まで保つてられるかも不安ですもん」

「やう。じゃあ、明日こは帰るのね」

「はい」

side out

時間は過ぎて夜。

みんなとまでは行かなかつたが、シグナムさんとアギト、シャマル先生がいない。

シャマル先生は午後から仕事に行つていて、他の2人も仕事で帰りが遅くなるそうだ。

「いやー、元に戻つてよかつたなー」

「はい。それと、今までありがとうございました。小さい俺を世話してくれて

「ええんよ。こつちほっこりで楽しかつたし。それに、小さかった桜も可愛かつたしな」

「・・・俺、何かしました？」

「え？ 聞きたいん？」

「遠慮しちゃます」

「これは聞いたら行けない気がする。
たぶん、黒歴史的な意味で。
まあ、その内知ることになると思つナビ。」

「と詰つわけで、今日は俺がみんなに感謝をこめて料理したいと
思います」

「手伝おうか？」

「いえ、大丈夫です。リクエストあれば、何でもお聞きしますよ」

「じゃあハンバーグで！」

「了解！他には？」

「ウチは特にね」

「アタシもねえな」

「じゃ、30分程お待ちを」

（30分後）

「お待たせしました」

『早ー』

「え？ そうですか？」

レパートリーはちょっと豊富。
リクエストはハンバーグだから、それに合ひメニューとしてサ
ラダ。

あと、これも付けたら美味しいだろうなと思い田玉焼き。
オリジナルのデミグラスソースが決め手だ。

「頂きます」

「どうぞ、お召し上がりください」

「はむ、美味しいです！」

「ああ、うめえ！」

「ハンバーグと田玉焼きのコンボはよかつたかな？ 後、オリジナル
のデミグラスソース」

「ホンマに美味しいで」

「・・・それはよかつた。俺の料理を食べて笑顔になってくれると、
それだけで嬉しいですよ」

食事はいつでも楽しくなきゃいけない。
そう改めて思った時だった。

「ふう、なんだらうな。」こんなに疲れたのは久しぶりだ

「そんなに疲れたんか？」

「うひはひあんー?なんでいるのー?」

「マジでビックリだ。

いつの間に入ったんだ!?

「え?ああ、「メン」「メン」、つこ

「つこー!?そんなんで俺の命を消すつもりですか!?

「まさか、そんなことあるわけないやう

「こや、せうのせいひで筋理ですね。誰かに見られたらマジ終わり

つす

「まあ、まあ。そんなこと言わん。背中流してあげるからな~」

「・・・は、鬱だ・・・」

第21話 元に戻ってヒックリだらけ（後書き）

次回はついに桜、帰宅！

あ、朝は八神家です。

シャナが久しぶりすぎて甘えまくるかも？

とりあえず、久しぶりの高町家の風景になる予定です。

誤字脱字、感想あればお願ひします。

第22話 黒歴史は作りたる（前書き）

まさか今回はR-15になるとほ・・・。

まあ、別に大丈夫だと思つたぶん。

見たくない方は読むのをおやめになつて下さい。

第22話 黒歴史は作りられる

「ん・・・」

翌朝、一人早く目が覚めた。

ちなみに俺ははやてさんの部屋で、布団を敷いて寝させてもらひつていふ。

理由をいくつかあげよう。

一つ目は、シグナムさんが襲つてこないよう防ぐため。
放つておいたら促成事実を作りかねん。

二つ目は、体と記憶が小さい時のものになつた時のために。
なんでも、小さこ俺ははやてさんにすくくなついていたようだ。

と、まあ他にもいくつか理由はあるのだがここまでにしておこう。

そう言へば、なんだか体に違和感を感じるな。

「・・・」

「え・・・」

まさか、この人もか。

いつの間に布団に入つてきたんだ？

しかも抱きつかれてるせいか、胸の感触が直に・・・。

「んう・・・桜・・・」

「・・・はあ・・・」

起こしにいく。

こんな可愛い寝顔して、寝言で呼ばれたらい、起きせるわけがないじゃないか。

胸の感触もいいしつて違うだろ。

何のために早く起きたんだよ。

朝食作るためだろ。

「……どうしよ

とりあえず、起これないようにソーッと腕を抜こうとした。だが、それをさせまいとはやては回している腕の力を強くして放さないようこする。

さらには自分の脚を、桜の脚へと絡ませていく。

「うう……これ以上は……」

これ以上この状態が続けば理性がやばかつた。もし、理性のひもが引きちぎれば、はやてを襲いだす可能性もある。それだけはなんとしても避けたい。だがそんな思いはむなしく、桜はなすすべもなくその状態が続いたのであった。

side out

「じゃ、あつがとついざれこました

時間的には毎日。ハ神家の玄関にて。

ちなみに桜は朝の状態からびりびりと抜け出していた。

そのおかげで理性のひもはちぎれず、はやても襲われることもなかった。

「また、遊びに来てな」

「はい。薬が切れ次第、また来ますから。後、薬の効果時間の報告でしたよね」

「うん。それはまだ未完成だから。記憶の方は、たぶん問題ないと思つ」

「そうだ桜、今度、家の道場に来い。腕のいい子がたくさんいる」

「それはそれは、もしかしたら未来の同僚が出来るかもですね」

「あ、ああ、そうだな」

ザフティー ラガ呼んだ理由はもちろん//ウラの事だ。

だが桜自身は何も覚えていない。

そう、告白の事とか、ほぼ毎日一緒に組み手をやつしてたりした事とか、チビ桜の時の記憶がさっぱりなのだ。

一応、戻しておいた方がいい記憶もあるため、そのきっかけも欲しい。

なので道場に呼んでみたのだ。

「その、なんだ、すまなかつた」

「？ 何ですか？」

「あ、あれだ。この前のだな・・・」

「ああ、あの事ですか。別に気にしてませんから、シグナムさんも気にしないでください」

「わ、わかった。お前が言つなら、気にしないでおいろ」

ちよつと笑顔で返してみた。

すると顔を少し赤らめ、シグナムは返事を返してくれた。

「シグナムのヤツ、ビリしたんだ?」

「まあ?」

なんであんな状態なのかわからないヴィータ達。
陰でひそひそと会話中。

「じゃ、そろそろ帰りますわ

「なのむちゃんとフロイトちゃんによろしくなー」

「はい。行くぞアル、シャンタク、ティンダロス、ハスター

「はーー」

全員がちやんと返事を返してくれる。
うん、いいことだ。

さて、帰りに食材でも買って帰るかな。

「ただいまー」

無事、高町家へ帰宅完了。

なんとかすこく少しふりな氣かする

「お兄いちゃん！！！」

おわつ！つと、おいおいシャナ、いきなり抱きつくな！」

「だつてすぐ懐かしいんだもん。今田ばっかりのままで

「え！？ ホントホント！？ メロンパン作ってくれるの！？」

「ああ。離れてくれればな」

「離れる離れる！約束だからね！」

「はいはい」

突然抱きついてきたシャナをなだめてからリビングへ。
リビングへ入った次の瞬間

「桜～！寂しかったよ～！！」

「フヒイトせん・・・」

今度はフヒイトせんが抱きついた。
いや、マジで勘弁して下せ。
胸が当たつて・・・。

「あ、桜おかえり」

「おかえりお兄ちゃん」

「ただいま。あ、これ食材。冷蔵庫に入れといて」

「うん、ありがと」

セレ、問題児フヒイトせんをどうしようか。
うーん、対処法が見つからないな。

「フヒイトせん？」

「何？」

「離れてくれません？」

「ダメ。今までになくて寂しかった分、今日はま~ヒヒのまわ」

「マジですか・・・風呂まで一緒にですか・・・」

「今までひとつせやんと一緒に入ってたんだからねぐらこいよね
？」

「え？ 今なんて？」

「はやてと一緒にお風呂に入つてたんでしょう？」

「せうか」とだったのか……

少し絶望したね。

うん、はやてさんが入つてきた時に「つい、つて言つた理由がようやく出来たよ。

俺はずっとあの人と一緒に風呂に入つてたのか。
どうりで動搖しないわけだ。

「じゃ、決定ね」

「遠慮したいんですけど……」

「だから、ダメ」

「いや、俺と入るなんならいいつらもいますよ？」

そう言つて頭の方を指さす。

てつぺんにはシャンタク、右肩にティンダロス、左肩と背中にハスター、空中にアルがいた。

全員を世話するのが大変でしょうがない。

しかも、召喚獣3匹は冷たいといいや涼しいといふのが好き。
つまりは水風呂が好きなのだ。

だから、俺と入ると大変だと云つことだ。

「それでもいいですか？」

「うん 問題ないよ（桜と入れるんなら別に気にしないもん。あ、でもアルはどうじよ）」

「やうですか（マジかあ・・・）」

「マスター、どうしたの？」

「何でもないよ。アルは気にしなくていいから

「うん」

「はあ・・・（こいつの無邪氣なところが羨ましきよ）」

side out

と詰つわけで夜。

今のところ、フェイトは桜に抱きついたままだ。
料理の時とかぐらいしか離れていない。

その上フェイトに便乗してシャナも抱きついている。
大変すぎでどうにかするよりも諦めが出ていた。

「シャナ、そろそろ風呂入れよ。明日も早いんだろ？

「うん、じゃあ入つてくる」

「アルも一緒に入つてきなよ。髪の毛洗つてもうえば

「おお、やうする~」

「（まさかそう来たか！）」

フロイトがアルへ一緒に入ってくふむつこにつけた理由は、アルを桜と入らせる意味を無くさせるためだ。
召喚獣なんて、後からほいらせねば問題ない。
そつ判断し、フロイトはそつ語ったのだ。

「（まあ、いいか。疲れてしまい、もうどうでもいい）（すみません）」

「桜？ どうしたの？」

「何でもないですよ。ただ考え方を」

「せう。今日は一緒に寝るからね？」

「はいはい、わかつてますよ」

フロイトさんと一緒に風呂に入る。

意外とまんざらでも無かったりしていた。

side out

「あの・・・フロイトさん

「じつじたの？」

「わあがこじれまひなつと・・・」

風呂に入った後の事。

現在ベットの上ですけどなにか？

でも、状態が・・・。

「どうして？」

「どうしてって俺をまたいで寝るのは・・・」

「いつも隣だとシャナがいるからね。今日は指回を変えて見たんだよ

「フロイトさん軽いから別にいいんですけど。でも、これ

んむ！？」

「ん・・・んむ・・・」

何だろ？

最近よくキスされてるような気が・・・。
気のせいかな？

「んー？」

れつぎの考えはどうでもよかつた。
今の事をどうにかしないと。

フロイトは、自分の舌を桜の口の中へ入れた。
それに応じ、桜もやるしかないと思い、フロイトの舌と自分の舌を絡ませる。

「んむ・・・あふ、んむ・・・」

水の弾く音が聞こえてくる。

そして、口を離すと糸が引いていた。

「桜・・・」

「フハイトさん・・・」

「今日は、もう好きにじてこよ」

「でも・・・俺はやつぱり・・・」

さすがに勢いだけではいけない。

マリナの時もそうだつたじゃないか、学園しき俺。
自分に言い聞かせ、落ち着きを取り戻す。

「気にしなくてもいいよ。私も、その・・・初めてだから・・・

「ー?」

そんな「初めてだから」とか言つたらダメですって。
抑えが利かなくなるから。

いや、マジでこれ以上は理性が。

「あ、でもそんなに激しくしちゃ、ダメだよ・・・?」

「ー?」

あ、もうひきあれちゃったわ。

そんなこと言われたらいつも「無理に決まってるよ。」
さようなら理性。

こんばんは性欲。

もう、マリナやシグナムさんは関係ない。
どうでもなれだ。

「じゃ、じゃあ、入れますよ?」

「へ、うん。その、優しく」「桜、入るよ」「え?」

「あ・・・」

まさしく絶妙なタイミングだった。
ノックの後、すぐに入ってくるのは。
そしてベットの上の2人を見てしまった。

「『メン、お邪魔だったね』

「ああ、母さん!？」ちよ、ま

バタンシンドアが閉められる。

いや、もうタイミング悪すぎて俺が死にたいよ。
そう言えばどんな用事だったんだろう。

「ハ、桜・・・?」

「『』みんなさこフハイドさん。今日はもう寝ましょ?」

「うん・・・それがいいね」

まさに黒歴史だった。

第22話 黒歴史は作りられる（後書き）

次回はどうしようかな。

まだまだ未定です！

とりあえず、ヴィヴィオ達はテスト期間に入ると思います。

あ、あと久しぶりに教導隊での風景を。

とりあえず、そんな感じで行きたいと思います。

誤字脱字、感想あればお願いします。

第23話 魔王×魔王の息子（前書き）

なんだね、・・・。

最近R-15を書きまくってる奴が・・・。

これは俺の心の現れなのだろうか・・・。

第23話 魔王×魔王の息子

「か、母さん？」

翌朝。

誰も起きていないうちになのばへ話しかける。
昨晚部屋に入ってきた時、何の用事だったか気になり一応聞いてみる。

「なにかな？」

「いや、昨日の事なんだけど」

「あ～、あれ?えっと、その・・・」

「俺も勢いに任せすぎたとは思つてゐから忘れて。と言つか忘れて
ください」

「まあ、それは良いんだけど。昨日、部屋に行つたのはね。桜が小さくなつてたらフロイトちゃんが襲いかかるかもしけなかつたから。
一応様子見」

「そ、そつなんだ」

「それとね」

まだ理由があつたらしい。
いや、本当に母親だから心配してくれるのは嬉しいけど。

「実はあれが羨ましかつたり……」

「……は？」

「い、いやー違つよ！別に私もしたいなーとか思つたわけじゃないよー？」

桜は少し詰つた。

あ、母さんはやりたいのか、と。

だつたら相手としてはコーノがいるじゃないかと思うも、会う機会がなかなか見当たらない。

手短にいる仲の良い男性は最終的には桜になつてくる。
またこのパターンかと思つ所もあつたが、どうしていいのやがり困つてきた。

そして最近の桜の頭は若干おかしくなつてきてこる。
とんでもない行動出る可能性もあつた。

「で、でも、コーノ君はあんまり会えないし。それに比べて桜は毎日一緒にだし・・・ぶつぶつ・・・」

「・・・なら聞くけど、俺としたいの？」

「ふえ！？／＼」

もちろん、桜はとんでもない行動に出始めた。
そして桜のいまの言葉になのはは顔を赤くしてしまつ。

「ハ、桜！？な、何言つてるのー？いや、したいけど・・・でも私達、親子だから・・・／＼／＼」

「でも、したいんでしょ？」

「う、うん・・・／＼」

もはや何でもありだつた。

桜は母親ですら落とせるのだろうか。
ある意味で才能でもあるかも知れない。

「ん、んむ・・・んちゅ・・・」

「あふ・・・ん・・・」

例によつてキスから始まる。

母親とキスつてダメなんぢゃない?とか聞こえてきやうだが、気に
したら負けである。

まあ、早朝5時に誰かが起きてくる事はなく。
邪魔される事はなかつた。

「桜・・・私・・・」

「そ、そんな」と　　ん

「息子とキスしただけでもつかの気になるんだ。やせてもH口こね

言葉は途中で遮られる。
そして再びティープキス。
今度は最初より少し長めだ。

「焦らさんこでよお」

「いいや、これぐらいが母さん『まきよ』だとい。もう少しは焦らす

「私、我慢できない」

「じつ」

人差し指を立て、静かにさせる。
そして、少しづつから階段を下りる音がしてきた。
誰かと思い、少し警戒しつつ桜が出迎えた。

「おはよ、ヴィヴィオ」

「おはようお兄ちゃん」

「今日は早いな。どうした?」

「え? もう6時前だよ?」

「え? あ、ホントだ。時計見てなかつたな」

壁に目を移し、時計の針を見る。

時計の針はもうすでに6時を指そうとしていた。
気がつかないうちにそんなにも時間がたっていたのか。

「私、ランニング行ってくるね」

「おー、行ってらっしゃい」

「朝ご飯、楽しみにしてるよ」

「あ・・・」

すっかり忘れていた。

未だに朝食を作つていなかつた事を。

side out

場所と時間は変わつて教導隊。

約2週間ぶりに行くことになり、今日もマリナの元へ来ていた。

「で、何の理由で1週間も無断欠勤してたのかな？1週間前はなのはちゃんから休むつて聞いてたけど、その前は何にも聞いてないよ？」

「え、えっと・・・」

言い訳に困つていた。

なにせ、理由が子供になつて遊んでもした、なんて言えるわけがない。なのはがなんと言つて休むことにしていたか気になつてしまふがなかつた。

「言えないならこりよ。その代わり、この場でやつちやうかわ

「ま、待てーちゃんと話つからーだらか俺とやかうかわのめやめてくれー！」

朝になのかといひつとついたヤツが何を囁つか。

まあ、どうにじる言い訳できなければ大変なことになるだらう。

「じゃあ、何で休んでたのかな？」

「う・・・それは・・・」

ぶつりやけむか？

いや、話を盛るか？

ビリするへ・うへん・・・。

「俺のユニゾンデバイスと召喚獣の世話。2週間前から一ひとつされだ」

「ふへん、そんな嘘つぐだあ・・・」

「え？」

え、いや、マリナ・・・さん？

本当ですよ？

アルもシャンタクもティンダロスもハスターも全員いますからね？
呼べば出で来ますよ？

「ひれなう、やつてきいよな？」

「待て！だから、や三 んむ

「ん・・・んむ・・・」

今日はキスしまくりだな。

そつ思つがそんなことはどうでもいい。
もじこのままでいけばまた襲いかねない。

「ふは・・・ビリ・その気になれた?」

「俺が嘘つくと思つか?」

「うん、思うよ。でも、好きな人にはめったに嘘つかないでしょ」

「もう思つただったら信じるよ。ゴーリングテバイスも召喚獣もいる
んだから」

「じゃあ、見せて。見せてくれたらい信じてあげる」

「わかった。・・・

全員、出て来い

魔導書（死靈秘法）を開き、呪文を詠唱してから召喚する。
魔法陣の中心からアルと召喚獣×3匹が現れた。

「な、言つたろ?..」

「うん、わかった。じゃ、戻つてよ!」

「はあ、アル~起きる~」

「んう?ますたあ?」

「今日は魔法の練習とかするぞ~。起きたらこいもんやるからな~」

גָּמְנִי

「なんでシャンタクが反応するんだよ！」

「ギュワー！」

「キュークワーー！」

「ええいーお前らもかー匾になつたらなんか作つてやるからねとな
しくしゆーーー！」

「マスター、私には？」

「こうひりと一緒に。毎になつたらなんか作るから、それまで我慢」

「
ひう
」

「ああ、もう！そんなふてくれた顔するな！何も言えなくなるだ

「ひみせ、めめじ。」

「ふう、ならいいけど。お前、狙つてるな?」

「何の事かな？」

「狙つてるな！？」

「と言つ事で、ここつら俺の召喚獣

『ええええええ！？』

「まあ、かく言つ俺も変化ありでや。ニーズンデバイスが出来た上に変換資質まで付いちまつた」

『ええええええ！？』

みなさん絶贊、ビックリ中。

いや、まあ誰でもそうなるよ。

何せ2週間前まで普通にすごい人が、もっと凄くなつて帰つて來た感じなんだから。

いや～、本当にすごいねシャマル先生は。

薬品ぶっかけるだけで人に変換資質つけるなんて。
まさしく天才つてヤツだよ。

「じゃ、今日も張り切つて行こつか

『この状況で！？』

「ダメなのか？」

『無理があります！』

「それだけ叫んでるんだ。大丈夫だろ」

『あなたは鬼か！』

「何とでも呼べ。じつせ呼ぶなら魔王の息子と呼ぶんだな」

『う、後ろ……』

「へ?」

おそるおそる後ろに振り向く。

何だひづ。

すげデジャヴな気が……。

「桜……なんの息子だつて?」

「え、えつと……母さんの息子だつて……？」

「つまりは私が魔王つて事……?」

「あ、あははは、まさか~」

「今日は寝させないからね?朝の続きだつてまだなんだし」

「ええー?マジでー?と言つかやるのー?」

「大丈夫。今日は私と桜だけだから。フロイトちゃんは出張だし、ヴィヴィオとシャナはお友達とお泊まり会だし、アルと召喚獣達は先に寝させれば大丈夫だよ」

やばい、この人眼がマジだ。

どちらかと言つと、砲撃をぶつ放してもらつた方が楽なんですけど。

「だか、り、ね？」

「こ、あ、の、」「ね？」つて言われても・・・

「特別、今日は許してあげるから

「は、こ、は・・・

反論なんかできるはずがなこよ。
だって本当に目がマジなんだから。
どうにかできたら奇跡だよ・・・。

第23話 魔王×魔王の息子（後書き）

次回！

桜が再びチビ桜になります。

だけど記憶、と書つか性格はそのまま。

体だけチビ桜です。

教導隊のみんながどうなるかはたぶん予想できるはず。

特になのはせんが　　おっと、これ以上はネタばれになるのでやめときます。

誤字脱字、感想あればお願ひします。

第24話 弱みは握られるから「J」意味がある（前書き）

なんだかマリナがEISの樋無さん見えってきた。

いつそのこと樋無さんキャラこした方が面白くなるかもと黙つてのは俺だけかもしれない。

友達に言つてみたら「微妙」の一言。

うへん、よし決めたぞ！

マリナは樋無さんキャラっぽく書いひついで

第24話 弱みは握られるから「」の意味がある

「はい、午前はいつたん終了。休憩入れるか」

教導隊ではいつも通りの風景が見られた。
きつい練習をいつたん終了し、至福とも言える休憩の時間だ。
それほど厳しくもあるのだが、その分力もつく。
それが桜の教導だった。

「・・・ハ、桜・・・さん？」

「どうした？ リナ」

「その・・・桜さん・・・ですよね？」

「そうだけど？」

「じゃあ、お聞きしますが、いつからそのお姿に・・・？」

「え？」

リナが疑問を抱いている。

俺だと確かめる=俺だとわかつていなかつた。
さつきの姿と全然違う姿・・・と言ひ事は・・・。

「・・・ええええええ！ ！ ！」

効果切れと言ひ「」とを意味していた。

「お姉ちゃん！大変！」

「どうしたの。ヒヤつかノックぐりこしなせこよ。ビックリしちゃうでしょ」

「そんなことより桜さんが！」

「桜君が？」

姉のマリナを呼びに行っていた妹リナ。
現状を軽く説明するなら

「小ちくなつて追いかけまわされてる

だそうだ。

アバウトすぎてちょっとわかりにくいかも知れない。

「は？」

もちろん反応は期待通りのものだつた。

意味がわからないと言わんばかりに疑問符を頭の上に浮かべるマリナ。

リナはどう説明したらいいか困り始めていた。

「と、とつあえず一見てみればわかるつて！」

「わ、わかった・・・」

side out

場所は変わつて訓練場。
ちなみに現在の状態は

「もう許して〜！！」

さつきのリナの説明通り、桜は小さくなりいろんな人に追いかけまわされていた。

まあ、今の状態の桜を見たら誰もが「可愛い！」と言つぐらいいだ。
それほど可愛いと言う事なのだろうか。

「あ、母さん」

もちろん、最後の頼みはなのはだつた。
頼れる人はそれぐらいだろう。

男メンバーではリーフとアウルだけでは心もとないし、違うやつでも絶対売り飛ばしてくる。

女性メンバーは現にこうして追いかけまわしてきた。
もしマリナに頼めば逆に捕まつてアウトだ。

上記の事を踏まえて母親のなのはが一番頼りだつたのだ。
しかも今の桜は追いかけまわされた事により若干泣きそうだ。
それが何とも言えないぐらい可愛く、さらに追いかけまわされる原因に・・・。

「あ、効果が切れちゃったのか」

「（「ク「ク……）」

「泣きそつた理由は……聞かなくともよさそうだね」

「（泣き田で向ひの側を指せし）」

「やつか〜。じゃ、捕まえた」

「へ？」

まさかのパターンだった。

母さんまで俺を裏切るとは！

こうなれば意地でもあの薬飲んで元に戻つてやる！

「アウル！ リーフ！」

「はいはい？」

「兄さん……」

「俺のバツク取つてきてくれ！ いつもの場所に置いてあるから大至急頼む！ 俺はそれまで逃げ続ける！」

「あ、バツクつてこれの事？」

「！？」

後ろから声がしてきたと思い、すぐさま振り返る。

そこには俺のバック（私物）を持ったマリナがいた。
やばい、オワタ。

「ふうん、なんか面白そうな事になつてるな」

「マ、マリナー！それ返せー！」

「えへ、どうしようかなー。ねえ、なのむちゃん？」

「うん。どうせだからそのままいいんじゃないかな？」

「それはイヤだ！だから返せよー！」

「うう。なら、条件を出してあげるわ。それを飲むなり返してあげない事もないわよ？」

「ぐ・・・条件って何だよ・・・」

「うとううん、話がわかる子は嫌いじゃないよ」

「うとううん、笑顔で言つてくれる。ものすこい」と

やばい、何でかあの笑顔が可憐く見えたんだ。

そんなことは後にしよつ。

今は条件とやらを聞くつじやないか。

「なのはなちゃん桜君を放して。ちょっと、耳貸そつか

「？」

「えつと
つてのはびりへまあ、いやならここんだよ。

断るなりあの事を教導隊中に呟く。」

「

「！？？そ、それは、ず、ずるーー！」

「ふふ、その顔可愛い。で、どうするーー？」

「うう・・・わかったから、早く返せよ・・・」

「よく言えました。はい、これ

そつ言いながら無邪気且つ悪戯っぽい顔でバックを渡してくれる。
えっと、薬、薬・・・あつた。

「んぐ・・・はあ、後は待つだけだ」

「はーい、全員散つた散つた。桜君は私がどうにかしつくから。な
のむちやん、ナイスだよ」

「いえいえ、私も桜の可愛い顔見れたんで良いですよ。マリナさん
いえ、ナイスです」

「とこりで聞くナビ、何でそうなったの？」

まくつていた袖と足を元に戻して行く。
ベルトも一応ゆるめて、よしこれで準備OKだ。
マリナにこたえなきやな。

「八神家に行ってシャマル先生の手伝いをして、その時に薬品数種
類をかぶつたりこつなつた。ついでに変換資質も付いた。マジパね

えよ

「うん、もう何でもあつてのが良くなつたよ」

「ああ、俺もこれは大変だつたよ。記憶が無くなつて性格まで代わつたからな。おかげではやてさんにお世話になつぱなしだ。こんどまたお礼しなきやな」

「そんなこと言いながら体、元に戻つたね」

「じゅうらかと言つと、これが代わつた姿になつてるんだよ。基本があの小さい体つて事だ」

「ふ～ん。あ、さつきの約束、ちやんと守つてよ」

「わ、わかつたからー。その事は人前で言つたなー。」

「はいはい」

「これまた悪戯っぽい笑み。

まあ、それがここからじつてこいんだけど。

「じゃ、後で行けばいいんだる」

「うん、待つてるからちやんと来るんだよ」

「了解」

騒動は収まり事後。

先ほどの約束を果たすために今はマリナの部屋に来ていた。

「・・・」

「な、なんだよ・・・」

「いや～？何でも～？」

「はあ・・・なんで条件が”思いつきり抱きしめながらのキス”なんだよ」

「いいじゃん。好きな人とキスするのは普通だと思つんだけどな～」

「・・・まあ、そうだな」

「お？なんか今日はやけに素直だな。さては何か企んでるな？」

「何でもいいんだが。俺はいろいろと悩み」とあるんだから

「その悩み」と、お姉さんが聞いてあげましょ～か～？

「いや、いこよ・・・・

「んむ！？」

もづめんどくさくなつてきたから先に仕掛けた。
約束通り、抱きしめながらのキスだ。

と並つかどれぐら^ヒ続くんだこれ。
ちょつときつくなつてきた。

まあ、俺は先に離れる氣はないぞ。

「ふは・・・桜君、強引・・・」

「ここじゃねえか。どひせまたお前からキスしてくんだろ・田口見
えてつからだよ」

「・・・じゃあ、もつかいしてよ」

「・・・・・・わかつた」

「ん・・・」

ちょっとどうしようか迷つたが普通にキスをした。
何故か今度はティープキス。

いや、ここつから舌入れてきたからじょうがないだろ。

「・・・もつ、いいか?」

「IJの先は・・・?」

「その内な」

「なり、最後にもう一回。今度は長くね」

「・・・はあ、じょうがねえな」

そう言いながら再びキスをした。

時間はさ程経つたわけではないが、その時だけなんでか時間が長く感じられた。

だが、この時2人は知ることもなかつた。
この一部始終を見ていた人物がいる事を・・・。

side out

時間が経つて夜。

母さんの言つてた通り、フロイトさんは出張、ヴィヴィオとシャナがお泊まり会でいなかつた。
つまりは俺と母さん、アルと召喚獣達だけとなつた。

「アルと召喚獣達はもう寝たの？」

「ん？うん、よく寝てる。朝までは起きないだろ？」

「じゃあ、その・・・」

「マジでやるの？」

「だって、朝のキスが忘れられなくて・・・それに続きもしてない
し・・・だから、今夜は寝かせないよ？」

「・・・はあ（人生諦めが肝心だけど、こんな時に諦めていいのか
な・・・）」

こうして夜はまた更けて行つた。

ちなみに余談だが、翌日なのはの肌がつやつやしていて、桜がげつそりしていたのは2人だけの秘密だ。

第24話 弱みは握られるから「」や意味がある（後書き）

次回は必ずしょつかな。

とりあえず、そろそろ油りの回を入れよつかな。

もしくはまだ田舎を書くべきか・・・。

今のところはまだ未定です。

誤字脱字、感想あればお願ひします。

第25話 高町桜の憂鬱 第二 微（前書き）

何だろう、最近キスシーンが多くすぎるような・・・。

1話に1回はあるな。

今回もあるし。

まあ、泊りの回に入ればキスシーンも減るだろうな。

そう願うしかないし。

第25話 高町桜の憂鬱 第三 微

「はあ・・・」

「どうかしたんですね？」

「いや、なんでもない。ちよつとこうこうあつてだな」

「わ・・・ですか・・・」

翌日、教導隊にて。

若干、と言つよりも普通にげつわつしていた桜はリナに心配されて
いた。

無論、げつそりしていた理由は昨晩の事。
内容は読者の皆様に任せます。

「あ、あの・・・桜さん」

「ん? どうした?」

「桜さんって、お姉ちゃん付き合つてるん・・・ですか?」

「は?」

聞かれた事は実に意外なことだった。

もしかしてマリナとのやり取りがそう見えたのか。
または何かを見てしまったか。

「な、なんでいきなりそんな事を・・・?」

「え、えっと、昨日、見ちゃったんですよ。お姉ちゃんと桜さんが・・・キ、キスするのを」

「・・・マジか?」

「は、はい。本当に・・・」

やばい、終わった、人生終了のお知らせ。
マイナス方面への言葉が大量に浮かぶ。
まさかリナが見ていたなんて思つてもいなかつた。

「リナ、ちよ、ちよっと来い・・・」

「は、はい」

裏の方へリナを呼び出す。

いつもこの時はずむあれしかないだらけ。

「な、なあ。ほ、本当に見たのか?」

「は、はい」

「・・・頼む、誰にも言わないでくれ

「はい・・・って、え?」

「いや、これはマジなんだ。俺はマリナが好きちや好きだが、いろんな人から好きって言われてるからさ。それでまだ迷つてて。昨日のあれば、薬を返す条件だから。その、なんて言うか、頼む!」

普通にお願いをした。

きれいに90度体をまげて頬みこんでいる。

「え、えっと、桜さん！顔を上げてください。私、誰にも言こませんから！」

「本当か！？」

「はい。だから、そんな顔しないでください」

「あ、ああ。そうだな。すまん」

正直リナが神様に見えた。

こんな子、めったにいないぞつと離れていた。

よし、今度なんかお礼しよう。

「いめんな、変なお願いしちゃって」

「いえいえ、私の方こそ、聞いたちやいけない質問しちゃったから」

「もひ、戻つていいで。あ、今度なんかお礼するから期待してねよ」

「え？ 本当ですか？」

「ああ。頼みを聞いてくれた礼だ」

「じゃあ、楽しみにしてます」

そう言い残してリナは先に戻つた。

兎にも角にも、一応これで見られた事は解決したのであった。

side out

「お兄ちゃん、今度の期末テストも『褒美貰える?』

「ん?あ~、あれか?去年はやつてないからな。口口ナは『気合い入
れてんじゃないか?」

「うん、すつゞく頑張つてた。でも、私も負けないもんね」

「何の話?」

シャナが疑問に思うのも無理はなかつた。

ヴィヴィオが学校に通い始めて、期末テストの度にやつていてるこれ。
去年は桜が長期出張でいなかつたのでやつていなかつたが、帰つて
來たのでやる事になつた。

まあ、一番合計点数が高かつた人に『褒美』と言つ単純なものだが。
それはそれでヴィヴィオ達は嬉しいのだからいいのだらう。

「ま、一番頑張つた人には『褒美』つて事だ。頑張れよ」

「・・・」

「『褒美』つてのがわからんねえのか。そりや、しょうがねえな。じゃ、
一番になつた時のお楽しみだ」

「うん~」

「よし、良い返事だ」

最近はシャナの兄離れが若干出来てきているので、この調子で兄離れしてくれると嬉しいのだが。

あ、でも離れすぎても俺が寂しくなるからなあ・・・。
あれ？俺、完璧に口リコンっぽくなつてね？
しうがないよな。

俺は寂しがり屋なんだからや。

「さて、今夜の夕食はつと

「何作るの？」

「いや、正直何でもいいんだけど。じつじょつかな

とつあえず、何でもいいので作り始めみや。と
言つても無難にカレーだが。

まあ、美味しいからいいんじゃね？

「ふふつ」

「？ どしたの？」

「いや、じつじょとなんだか夫婦みたいに見えるな～って

「ぶつー！」

一瞬で吹いた。

完璧に不意打ちで吹かざるを得ないだろう。

「ちよ、母さん！」

「あれ？ 变だつた？」

「いや、あの、俺、あなたの息子なんだけど・・・

「でもやつたよね～？」

「う・・・でも、あれは勢いとか、流れとかいろいろ重なったから・
・

「それでもやつちやつたよね～？」

「・・・」

「無語は肯定の意味だね。図星つてやつ？」

「もへ、いいです・・・

ダメだ、最近いろんな人に口で勝てない。
どうしたらいいんだろうか。
と、とりあえず続きを。

「ねえ、桜？」

「ん？ 何？」

「ちよとじりじりして

「『メン、今はちゅうと・・・

ダメだぞ俺。

向いたら絶対ダメだ！

向いたら絶対にやばい方向に行きかねー！

「・・・向いて」

「・・・

「こや、あの・・・マジで後にして・・・せ、せめて全部せ
らせて貰えるのとれしいんですけど・・・

「・・・

なんだろう。

何で俺はこんなにびっくりするんだ？

隣の人からめちゃくちゃすりオーラが出てんだけど。

怖くてしようがなんだけど。

これ、もつ向いちやつた方が樂じやね？

「・・・わ、わかったから。わかったからそのオーラをひつじめて
ください」

「じやあ、じつ向いて」

「ほひ、向いたか」

「

あ、やっぱりだ。

この人、キスしてきたよ。

と言つた、俺今手濡れてるから抱き寄せられない。
そう言えば俺、いつも言つのに耐性出来てね？

あ～、なんかいやだな、それ。

「・・・」

(母さん、離れてくると嬉しいんだけど。この体制きつこ)

(ダメ。もう少しのまま)

念話で離れてもらひよつて言つが無理っぽいな。
一回離れてくれば今度はしつかいつやるのに。
あ、そう言えばいいのか。
でも、それはさすがに・・・。

「・・・ふはあ

「よひやへ手が拭ける。さて、もう一回・・・」

「んむ・・・」

もう一度、今度はこっちからキス。

マリナの時のように抱きしめながらだ。

そう言えば、俺って母さんに惚れでんのか？

自分からもキスするぐらいだし。

・・・待て、それはいかんどう。

親子だし。血は・・・一応つながってるよな。

俺、母さんのクローンだし。

大丈夫なんて言つてられないな。

しかもいろいろと引っかかる部分ありまくじじゃないか！
う～ん、どうしたらいいかな。

「・・・今日せ、」のへりで終わつ

「夜は・・・」

「今日は無し。また今度

「・・・本当にダメ?」

「我慢する。俺だって連續では無理だよ」

うん、母さん相手だと連續でやるのさきつこよ。
頑張つても2日連續が限界だな。
でも、今日はやらん。

何でつて、疲れてるからだよ。

「そ、それそろ煮えたかな。ちよひと味見してみて

「う、うん。・・・いいんじゃないかな

「どれどれ、うん、良い感じだ」

「ーーーーーー

「どしたの?」

「な、なんでもないよーー(か、間接キスー普通のキスよりもな
んか嬉しいーー)」

「?」

こうしてまた一日、夜が更けて行つた。
ちなみに桜のカレーはヴィヴィオとシャナに絶賛されたそうだ。

第25話 高町桜の憂鬱 第三 微（後書き）

次回は・・・そろそろ泊つの回にしてよいかと思います。

連続で戦闘シーンを書くなんて久々すぎるよ!つな気がする。

とりあえず、泊りの回は確定・・・かな?

もしくはその前辺りの話にしたいと思います。

誤字脱字、感想あればお願ひします。

第26話 異世界訓練合宿出発進行！！

「試験終了お疲れ様」

なんやかんやで、ヴィヴィオ達のテストの口。
無事テストを終えて、全員が高町家に集合していた。

「みんなどうだつた？」

「花マル評価頂きました！」

「4人そろつて」

「赤点なし！」

「優等生です！」

全員が渡された点数表を見せる。

みんな一教科80点以上を取つている。
コロナとシャナなんて全教科満点だ。

「あれ？ そう言えばお兄ちゃんは？」

ふと疑問に思った。

みんなの前にいつもいるはずの桜がない。
それにはいち早く気付いたのはシャナだった。

「桜ならまだ寝てると思うよ。最近疲れてたみたいだから」

「私、起こしてくるね

そう言つたなのはとフェイト。

何故かフェイトの肌がつやつやして見えたのは氣のせいだろう。
そして、なのはが立つた時だった。

ドカ！バキ！グギャー！ゴン！ズシャアアアー！！！

階段の方から無駄にすごい音が引いた。

急いで全員が向かうとそこには

「桜！大丈夫！？」

「あははは、足踏み外しちゃいました・・・」

ものすごい体制で階段から転げ落ちた桜がいた。
すぐさまフェイトが駆け寄る。
目立つた外傷はないようだ大丈夫のようだ。

「ん～～！～よく寝た～」

わざと転げ落ちたのが嘘のよつとすべつと立ちあがり伸びる桜。
さらには体中の骨をポキポキと鳴らし、体を動かす。
もはや寝起きの動きではない。

「お？みんなテストどうだつた？今日は誰が一番だ？」

「えつと、今回はシャナとコロナが一番だよ。2人とも満点で」

「おお、そつか。みんな、特に2人はよく頑張ったな」

セツ言つてみんなの頭を撫でた。

まあ、「」のぐらこは別に何の問題はないな。

「」褒美だつけ？」

「はーー。」

「楽しみー！」

「じゃ、おずは「ロナからでいいか？」

「お願ひしますー。」

「それじゃ、よつとー。」

そう言つて桜は突然ロナを持ち上げた。

しかも、お姫様だつこだ。

突然持ち上げられた事に驚きはあるが、ロナはそんなに動搖していない。

前に一度経験しているからだ。

「今回はちょっとアクロバティックに行つてみるか

「ひやつー。」

庭へ出てさらに壁蹴りからの宙返り。

まあ、ご褒美つてのはお姫様だつこで少しの間動き回るつて言つたんだ。

最初にヴィヴィオとロナがそう言つてきて「それでいいのか？」

つて聞いたら「「それでいいー（ここですー）」「」って言われたからなあ。

それから「うーとつてじやなーが」これが主流になつてきている。

「よつと、いろんなもんでいいか」

「あ、ありがと!」やむこめすーーー

「2人ともどしたの?」

「な、なんでもないよ」

「う、うん」

「?」

「「（（羨ましい）なんて言えないーましてや、やつてほしこなんてー）」」

「ま、いいか。そ、次はシャナだな」

「やつたー！」

この後、普通にシャナの分もやつて「」豪美タイム終わった。
なんだか母さんとフロイトさんが羨ましそうな顔をしていたのは僕のせいかな?

「セヒ、 そろそろ来るのかな」

「？ 誰が？」

「お客様」

「お客様？」

「ピンポーン。

インターホンの音がリビングまで聞こえてきた。

「お、 来たな」

セヒ言いながら、ヴィヴィオを連れて玄関に行く。
待っていたお客様はと黙つと。

「ひさしぶり

「よっす」

「アインハルトさん！？・・・とノーグン！」

アインハルトとノーグンだった。
荷物を持っているのを見ると一緒に行くようだ。

「異世界での訓練合宿とのことで、ノーグンさんと桜さんに誘い
頂きました。同行させていただいても宜しいでしょうか？」

「はいっ！ もー、 全力で大歓迎です！！」

AINHARDの手を取つてぶんぶんと上下に動かす。
その顔はまさしく嬉しいそのものだった。

「ヴィヴィオ、上がつてもらおつか」

「あ、うんーAINHARDさん、ビーザー！」

「お邪魔します」

はつと気がついたヴィヴィオ。

すぐさまAINHARDを中心へ案内してつた。

「言わなくて正解でした」

「ああ、予想以上にな」

なんだかいつもよりヴィヴィオが元気に見えた。

それは、昔の俺みたいに、母さんへ対する憧れのように。ヴィヴィオからAINHARDへの憧れのように見えた。

s i d e o u t

『じゃ、それで人数確定ね』

「はいー！」

「あ、メガーヌさん」

『どうしたの桜君?』

「俺の生徒4人ほど連れて行つていいですか?」

『良いけど、食材が足りるかしら』

「なら、俺が買つていきます。それならいいでしよう?』

『ええ、こいつのはみんなで楽しくいかなきゃね』

「では、お世話になります」

『いいえ~、じゃ、待つてるわね~』

メガーヌさんはやつぱりいい人だ。

そう言えば、ルールーと会うのも久しぶりだ。
毎回モニター越しだから懐かしく感じるな。

「桜、急に決めちゃつていいの?」

「え? ああ、大丈夫。もう言つてあるから」

「そりなの?」

「うん。次元港で待ち合わせしてある。俺、バイクで食材買つてから行くから。あ、一人後ろに乗れるけどどうすつかな?」

『私が乗る!』

「つま・・・」

「ノーグンさん以外がそう言つたからビックリだ。

と言つたか、何でそんなに気合が入つてゐんですか？

「あへ、フハイドさんは無理じゃないicusか？車、運転できるのフハイドさんだけですし・・・」

「あ・・・」

「」、「今度、い、一緒に行きましょう・・・」

「や、そうだね・・・」

「じゃあ、誰が乗るの？」

「無難にじゅんけんで勝つた人。俺は準備してゐるから、決まつたら荷物持つてこいよ」

『じゅんけん！ほい！あい』でしょー。』

「早ー。」

ものすゞこ速でじゅんけんを始めていた。
あいこの数が無駄に多いですよみなさん・・・。

ちなみに結局じゅんけんに勝つたのはノーグンさんだった。
どうしてあなたも参加してゐるんですか・・・。

第26話 異世界訓練合宿出発進行！！（後書き）

次回は久しぶりに六課FWメンバー勢ぞろい！！

ルーテシアも今作初登場！！

そしてついに2代目WFメンバー（教導隊チーム）にデバイスが！！

異世界訓練合宿1日目は一体どうなるー？

それはまだ未定です（おい

あれ？でも、これって未定とは言わなくね？

まあ、いいか！

誤字脱字、感想あればお願ひします。

無人世界カルナージ。

アルピーノ親子が住む異世界である。

首都クラナガンの次元港の臨時次元船で約4時間。ゆつたりと旅行の始まりにはちょうどいい。

ミッドとカルナージの標準時間差は7時間。

1年を通して、温暖な大自然の恵み豊かな世界だ。

「あ、そうだ。みんな、今回の合宿は気合い入れてけよ。周りは全員強敵だらけだからな」

「はい、頑張りますよー。」

「先輩ばっかりに負けてられませんからね！」

「それにすついぐ楽しみですー！」

「・・・頑張る」

「それと、あつちに付いたら俺からの嬉しいプレゼントがあるから楽しみにしておけよ」

「嬉しい？」

「プレゼント？」

「ですか？」

「おひ

side out

「みんないらっしゃ～い」

「よっす、ルールー」

「桜兄い久しぶり～！」

「おう、元氣で何よりだ」

出迎えてくれたアルピーノ親子。
直接会うのが久しぶりで話がはずむ。
うん、いいことだ。

「シャナと、リオは直接会うのは初めてだね」

「今までモニターだったもんね」

「会えてうれしいよ」

「そうね。私も会えてうれしいわ。それに2人とも、にもタ一で見るより可愛い」

「ほんとー？」

「えへへ」

なんだかんだで仲良くなってるよ」の3人。
普通に頭なでなでしてるし、見てるだけで仲がいいのがわかる。

「あ、ルールー！」ちらがメールでも話した

「aignhardt・stratosです」

「ルーテシア・アルピーノです。ここのお住人でヴィヴィオの友達、
14歳」

「ルーチャン、歴史にも詳しいんですよ

「えつへん！」

「そういうやエリオ達はどうした？先来てんの？」

「ああ、2人なら今」

ルーテシアが言い終わる前だった。

後ろの方からガサガサと物音がし、後から声が聞こえてくる。

「お疲れ様です！」

「おっす、エリオ、キャロ」

「久しぶりだね桜」

「お前、また背え伸びたか？」

גַּתְתָּה.

一 ああ、なんか去年より田線が高い

一 私も伸びたよ！ 1 . 5 ? !

「前とほとんど変わらねえじゃん！」

こんなヤバい取りもクレしゆけた

「エリオ・モンティアルです」

「キヤロ・ル・ルシエと飛竜のフリードです」

「1人ちびつこがいるけど3人で同じ年」

「なんですよ！？1・5？も伸びたのに！」

「まだ伸びる・・・と思つから」

「その間が気になるよ桜君！」

なんだか甘や口をひきかすの面白いな。

うひいときみかなか

でも、そんなことしたらヒリオが怖くなるからやめておけ。

「aignhardt・ストラトスです」

「うん」

「よろしくねaignhardt」

お互い挨拶を終えたところでキャロがついにあることに気がついた。
そつ、俺の肩と頭に乗つてこりつらだ。

「桜君、その子たち何！？」

「ん？俺の召喚獣。全員挨拶。アルも起きる～」

「ん・・・おはよ、マスター」

「おはよ、みんなに挨拶しる～」

「りょーかーい。アル＝アジフです。よろしく。この青い子はシャンタク、白い子がティンダロス、最後にこの龍がハスターよ」

「ピュイ～

「ギュグワ～～

「キューン

「キュクル」

「フリードも友達だつて認めたみたい」

とまあ、こんな感じでワイワイ話している時だつた。

また後ろの方でガサガサと物音がする。

それにいち早く気がついたのはアインハルトだ。

「！？」

「ていー」

「あう・・・」

「そんな警戒すんなつて。こいつは敵じゃねえよ」

敵だと構えたアインハルトに軽くチヨップを下す。
うん、やられた時の声が可愛かつたな。
とりあえず、田の前にいる黒いヤツに田を向けてた。

「よお、ガリュー。元気してたか？」

「・・・（ノク）」

「やうか。こいつらはつてれつを聞いてたか」

「・・・（ノク）」

「あの、このは・・・」

「このは私の召喚獣で大事な家族。ガリューって言つの」

「し、失礼しました・・・」

「私も最初はびっくりしたー」

「さて、じゃあ俺たち大人チームは着替えてアスレチックに集合な

『了解』

みんなが一斉に返事をしてくれる。

うん、楽しみだな。

こうして楽しい異世界訓練合宿1日目が始まった。

第27話 合宿1日目 01（後書き）

あれ？ そう言えばみんなに『デバイス渡していないような・・・。

次回でいいか！

うん、そうしよう。

次回は・・・まだ未定です。

誤字脱字、感想あればお願ひします。

第28話 合宿1日目 02（前書き）

今回はアインハルトの出番が多い！？（たぶん）

期待させといて少なかつたらごめんなさい。

「よし、アップは終了 なんんですけど、休憩伸ばします?」

「だ・・・大丈夫でーす!」

「バ、バテてなんか・・・いないよ・・・?」

「と黙つてじらじらから休憩伸ばそうか」

「そうだね」

異世界合宿1日目での訓練前のアップ。

俺や母さん、教導隊メンバーはもちろん、スバルさんは普通にこなしていたのだが・・・。

俺たちのような激しい動きを常にしているフェイトさん、ティアさん、エリオ、キャロはたくさんの汗を流し、ハアハアと息を切らしてバテていた。

「そうだ、まだ渡してなかつたな

「? 何ですか?」

「お前らがまだ持つていない、専用デバイスだ」

『・・・ええええええええええ! ! ?』

「ちゅうどいい機会だからさ、まとめて作っておいたんだ。性能はデバイスマスターのお墨付き、限界まで使ってやれよ。これから

パートナーになるんだからな

そう言いながら4機のデバイスを渡した。

徹夜続行で疲れたが、まあこいつらのためだ。苦でもない。ちなみにマリーさんに見せたら「今ならデバイスマスターも夢じゃないわー」と言われたさ。

「名前はまだ決まってないからしつかりつけてやるんだが。それと、お前らに合わせてるからたぶん使いやすことと思つ」

「ありがとうござりますー！」

「本当に桜さんは最高ですー！」

「これからもよろしくお願ひしますー！」

「あっがとう兄さん

なんだか全員にものすごいお礼を言われた。
まあ、誰だって嬉しいわな。

今まで自分で作ってきた訓練用の武器じゃなく、高性能の専用デバイスで戦えるんだ。

俺だって、母さんにWとTを渡してもうった時は母さんに抱きついたぐらこつけしかつたし。

なんにせよ、喜んでもらえて何よりだ。

「俺、先戻つて昼食の用意していくわ。ついでに、ヴィヴィオ達の様子見」

「わかった。美味しい料理、期待してるよ

「はいはー。じゃ、先に上がらせてもらひつよ
」

side out

ドパアアアンシッ！！！

ものす」」音が川の方から聞こえてきた。
もしかしたら、水切りをやつていいのか?
少し急ぎ足で向かづ。

「お、やつてゐな

「お兄ちゃん！」

「桜さん！」

予想は的中。

川ではヴィヴィオニアインハルトが水切りをやつていた。
うん、まだコツを掴んでないみたいだな。

「おっす、そつちは終わったのか?」

「いや、俺は先戻つて昼食の準備。ついでこいつの様子見

「そつか。もう戻るのか?」

「セウツスね、なんもすることなしですしね。」」見てると俺も遊

びたくなりますが

そう言いながらも平たい石を一つとる。

そしてそのまま川へ投げ飛ばした。

ちやつ、ちやつ、と水を切りながら右側まで到達する。
これぞ本当の水切り、なんちって。

「あ、そうだ。AINHARDTちょっとこいつ来い」

「？　はい」

「水切りのコツを教えてやるわ」

「コツ……ですか？」

「ああ。構えの時は脱力して、途中まではゆっくり、だがそれでも少し早めに。インパクト時は遠心力を使い、それに合わせて一気に撃ち抜くんだ。そうだな、動きだけならこんな感じだ」

軽く動きだけをやってみる。

よく判んなかったらどうしようかと思つが。

「なんかよくわかんないって顔だな。しょうがないじい

『防水用バリアジャケットですね、わかつてます』

「ん、頼む

セット・アップして水の中に入る。

うん、防水用だ。水が服の中に入つてない。

「じゃ、見てるよ。構えは脱力、ゆっくりだけじ早く。インパクトは遠心力で、一気に撃ち抜く！－！」

しゅっと拳を突き出す。

すると少しの間をおいてから

ドッパアアアアーンシツ！－－－

川の一部が割れた。

だいたい10メートルぐらい先まで割れたのがわかる。

「まあ、こんな感じだ つてお~い

「す、すごい……」

「関心は良いが、わかつたか？」

「は、はい」

「そりが、なら、やつてみる。もし俺の半分以上行つたら今度は面白いもん教えてやる」

「が、頑張ります！」

やつぱ子供つていいな。

なんにでも力いっぱい取り組めて、頑張れる。
俺も出来たらあかなりたいよ。

「面白い持つて何教える気なんだよ」

「さあ、なんでしょうね」

「教える気なしかよ」

「アインハルトがそれほどの技量を備えているなら、俺はその技量にあつた技術を『えたい』。そう思つていいだけですから。だから、そこまでたどり着けたら考えます」

「なんだかお前がわかんねえや」

「人間だれしも他人はわからないもんですよ。あ、俺、そろそろ戻りますわ」

「了解」

「アインハルトがどこまでできたか報告お願ひしますよ」

side out

と言つわけで僕。

みんなで楽しく昼食だ。

うーん、やっぱ料理は楽しいね。

「はい、完成！」

『おおーー!』

ぱちぱちと拍手が送られた。

えっと、ただみんなの前でチャーハン作ってただけなんですけど・。
・。

「後何かリクエストは?なければ俺も食べ始めるナビ?」

「もう特にはないみたい」

「じゃ、俺も頂くとします」

リクエストを数個聞いて作り終わり、俺もようやく食事。
うむ、我ながらいい味してるぜ。

「だ、大丈夫かアインハルト」

「だい、じょうぶ・・・です・・・」

「ずっと水切りやつてたからな。それといつ、ちやつかり半分行
つてたぞ」

「へへ、頑張ったなー。なら、今度面白いもんを教えよう。約束だ
からな」

「ありがと、『やります・・・』

そんなに水切りやつてたのか。

と言つたが何処まで頑張り屋さんなんだよお前は。
余計にいろいろと教えてくるんじゃないかな。

「さて、何を教えたものかな。ショッパンからレムリアか?それと

も基礎行つてストライクか？うへん、こいつに合つた技がいいよな

悩みは募るばかりだな。

まあ、これは後にしていても問題はないだろ？
別に休暇取つて教えてやれば済むことだし。

「なんか、少し楽しみだな。こいつの未来が」

「？」

どんな強者に成長するかが楽しみでもあつた。
でも、それはまだまだ先の話し。

第28話 合宿1日目 02（後書き）

次回は普通に模擬戦のターン！！

桜 VS スバティアコンビ！

氷結変化を身につけた桜はどう動く！

誤字脱字、感想あればお願ひします。

第29話 合宿1日目 03（前書き）

全開あとがきで氷結資質を使つとか書いたりもしましたが今回ははつ
あつ言つて使いません！

と言つた戦闘描寫 자체がめっちゃ短い方です！

でも最後の方が結構面白くかけたんで許して下さー···。

「よし、次は模擬戦しますか」

「じゃあ、相手は私とティアでいい?」

「了解です。じゃ、母さん達はアウル達とでいい?」

「OK」

1日目の訓練はまだまだ続く。

昼食を終えた後のアップ他からの模擬戦。
変換資質は・・・使わないようにしよう。
俺に変換資質は似合わないからな。

「では、お願いします」

side out

「お、ヴィヴィオ、アインハルト!」

「あ、ノーヴ!」

「ブラブラしてんなら向こうの訓練、見学しに行かねーかー?そろ
桜とスターズが模擬戦始めるんだってさ」

ヴィヴィオとアインハルトが2人で話しているところを見つけたノ

「……」

声をかけて模擬戦の様子を見に行くらしい。

「え？ ヴィヴィオさんのお母様方も模擬戦に……？」

「はい！ ガンガンやりますよ！」

「桜さんはわかります。でもお二人とも家庭的で、ほのぼのとしたお母様で素敵だと思ったんですが……魔法戦にも参加されてるなんて少し驚きました」

アインハルトの素直な感想を聞いてノーヴェは一人、腹を押さえ、笑いをこらえていた。

今にも笑いだしそうなぐらい面白かったのだろう。

「えっと、参加と言うかですね。ウチのママとお兄ちゃん、航空武装隊の戦技教導官なんです」

side out

「アクセル！」

大量の魔法弾を操作する。

そしてさらに加速、それよりももっと加速させる。

「シユートー！」

ティアナはその加速する魔法弾を次々に相殺。

弾の数をどんどん減らしていく。

「…？」

「はああ…！」

爆風の中からのスバルの奇襲。

それに対し桜は宙を一回転するようにして回避をする。
そしてソードにしたZEROで切りつけるが、それはかわされてしまう。

『ヴァリス』

「FHザーシュート、タイプ《クラスター》」

「クラスター拡散攻撃来るよティア！」

「オーライ！」ンビネーションカウンター、行くわよー。」

「シユート…！」

拡散攻撃をティアナが次々と相殺して行く。

そしてその爆風の仲、スバルは一人特攻を仕掛けた。

「おおおおおお…！」

『ソード』

「はー…！」

リボルバー・ナックルと剣がぶつかり合い火花を散らす。薙ぎ払い、そして距離を取った。

「「」」

久しぶりの2体1。

しかもこの2人のゾンビは一筋縄ではいかなかつた。

s i d e o u t

「「」」

「「」」

模擬戦は無事終了……なのかな?

俺は結構来たのにあの2人はピンピンしてゐるぞ?
まあ、いいや。次々。

「2人はこの後、ウォールアクトでしたつけ?」

「フエイトさんとエリオも一緒にだよ」

「じゃあ、母さんとキャロと、瑠璃は俺とやらつか」

「よろしくお願ひします!」

「了解」

さて、まだまだ続きそうだな。

ウォールアクトと後は何があつたかな。

どちらにしろ大変なのはよく判った。

s i d e o u t

だいぶ時間は経つて夜。

午後の訓練、トレーニングも終わり合宿一日目も終わりに近づいてきた。

「おお、こんなに新鮮な野菜とたまごが・・・」

「セインが持つてくれたのよ」

「そりや、ありがたい。なんか」あわしつしなきやな
心なセインは?」

「たぶん、温泉でみんなにサプライズでも仕掛けた怒られてるんじ
やない?」

「リアルな予想ですね・・・」

「あらへ~やう~」

キッチンに置いてあつた食材を見ていた俺とメガーヌさんの雑談。
いや、マジでメガーヌさんの予想が全部当たりそうで怖いな。
と言つた温泉でのサプライズ・・・いかんいかん、鼻血が出てちま
うー。

考えるのをやめるんだ俺！！それ以上はダメだ！！

そんなちよつと口ひ事を考へていた時だった。

ドーン！

急にものすごい音がする。

温泉の方だつたな。

急いで行つてみよう！

走り出して、すぐさま温泉へ到着した。

「なんかあつたのか！？」

がらーっと勢いよく戸を開けながら言った。
いや、まず開けたのがいけなかつたんだろう。
そう、みんな裸なんだから。

『え？』

「あ・・・／＼」

この後全員からフルボッコになつたのは暗黙の了解だつたとやら・・・。

『ふ・・・・・・・。

第29話 合宿1日目 03（後書き）

次回は合宿2日目！

赤組！（ティアナチーム）

フェイト、ティアナ、キャラ、ノーヴェ、AINハルト、コロナ。

青組！（なのはチーム）

なのは、スバル、エリオ、ルーテシア、ヴィヴィオ、リオ。

黄組！（桜チーム）

桜、シャナ、リナ、瑠璃、アウル、リーフ。

3チームのぶつかり合いの「大人も子供もみんな混ざって陸戦試合」が始まる！

10月1! 20月1!

次回からは戦闘描写が長く続きます！

誤字脱字、感想あればお願ひします。

第30話 合宿2日目 01（前書き）

今からは陸戦試合りくせんじごあが開始だ！！

桜たち黄組はどんな活躍をするか！

たぶん見ものです。

「調子は良好。体の大きさにも異常はないし、何よりもつま先昨日飲んだからまだ大丈夫だよな」

翌日の朝。

1人早く起きていた俺はランニングを終え、準備運動を済ませていた。

何度も腕をまわし、手を開いたり握ったりする。
うん、違和感も何もないな。

試合中に子供の姿に戻るなんてあつたらイヤだけど、効力がその時その時で変わってくるのがまた厄介だよな。

「・・・フリーズ」

手の上に小さな氷の塊を作り出した。

変換資質がついてしまい、練習に練習を重ねて使いこなせるようになった。

それにしても、ホントシャマル先生の薬は怖いね。

何度も言つけど人に薬品ぶつかけるだけで変換資質つけられるんだからや。

「はあ・・・出来るだけ使わないようにしよう。うん、危なくなつた時だけ・・・」

「全員そろつたな。では、試合プロトコーサーのノーヴンさんから」

「ア、アタシか！？」

「はい」

「ごほん・・・えー、ルールは昨日伝えた通り赤、青、黄の6人3チーム別れたフィールドマッチです。ライフポイントは今回もDSA公式試合用タグで管理します。後は皆さん怪我をしないよう正々堂々頑張りましょう」

『はーい』

ノーヴンさんからのルール説明（2回目）を聞き終えた後。各チームずつに分かれ、少しの間作戦会議。
そして準備が整い・・・。

「赤組、元気に行くよ！」

「青組もせーの！」

「黄組、氣合を入れるよー！」

『セーット・アーップ！！』

全員が一斉にセット・アップ。
カラーごとの配置とライフはこうだ。

ティアナ	CG	LIFE	2500
フェイト	GW	LIFE	2800
ノーヴェ	FA	LIFE	3000
キヤロ	FB	LIFE	2200
AINHALT	FA	LIFE	3000
コロナ	WB	LIFE	2500

青組

なのは	CG	LIFE	2500
スバル	FA	LIFE	3000
エリオ	GW	LIFE	2800
ヴィヴィオ	FA	LIFE	3000
ルーテシア	FB	LIFE	2200
リオ	GW	LIFE	2800

黄組

桜	ALL	LIFE	2500
シャナ	FA	LIFE	3000
瑠璃	FB	LIFE	2200
アウル	CG	LIFE	2500
リナ	GW	LIFE	2800
リーフ	FA	LIFE	3000

『それではみんな元気に・・・』

メガーヌさんがモニター越しで試合の会図をしようとする。
その後ろには召喚獣チームが今にもゴングを鳴らそうとしていた。

『試合開始～～!!』

ジャアアアアアンツツ！――！

とゴングの音が鳴り響いた。

それと同時に各チームが足場を出す。

「ウイニングロード――！」

「エアライナー――！」

「ウイングライナー――！」

ちなみにリナは前日、スバルさんとノーヴェさん2人に先天魔法を教授してもらい、気合いを入れて練習をして1日でものにした。本当に1回で出来たのを見た時はビックリしたがな。

「行くよリオ！」

「オッケー、ヴィヴィオ！」

「口ナさん、リオさんのお相手をお願いしても？」

「はい、任せてください――！」

各チームが離れたところから中心に向かっていく。
こつちもそろそろ動き始めないとな。

「いいか、作戦通り行くぞ」

「――了解――！」

「頑張るぞーーー！」

「じゃ、お先ー！」

一人最大出力で中心地、ちょうど赤と青が両方見える場所までやってくる。

そして誰も予想が出来ない事をやるために、ZEROをいきなりバスター・ライフルに替えた。

「さあ、ZERO、いっちょ行くぜー！」

『イエスママイスター。ブラスト・バスター』

「圧縮開始」

両手を広げいつでも撃てる隊背に入った。

砲撃の先は赤と青の正面。

カートリッジを2本ずつ消費し、さらに威力を高めていく。
そして、圧縮が終わると同時に撃ち放った。

「！？」

「全員回避ーーー！」

試合開始直後に砲撃による奇襲。

こんなド派手な作戦誰が考えるだろ？

俺以外にいたとしたらそいつと友達になりたいね。

『赤（青）組、全員に通達ー中心にいる桜へ攻撃を集中ー』

ニヤリと笑い、作戦が徐々に進んでいくことに喜ぶ。まさかここまで予想通りに事が運ぶなんてこっちの方が予想外だ。なにせ、俺に対する集中砲火が狙いなんだから。

「うわ、早速きましたか」

「いきなりの奇襲くじひちや誰だつて狙うだろー。」

「一番最初の脱落者になるのが狙いなのかな?」

「まさか。俺ははなからやられる気なんてありませんよ。だって

「はあああ！」

「これが狙いですもん」

攻撃を仕掛けようとしていたスバルとノーヴェを横からリナが攻撃を仕掛けた。

その攻撃は空中と言ふこともあり、しかも突然のことであつたため、2人とも防御が間に合わず、ダメージを受けてしまう。

スバル、ノーヴェ

L H F E
3 0 0 0 - 6 0 0 = 2 4 0 0

「ありや？結構力入れたつもりなんだけどな」

「作戦通り！」そのまま2001に持ちこめよー！」

「了解！」

リナがスバルとノーヴェの方へ走って行く。
今頃は全員が2001の状況を作れていることかな。
そう考え、移動しようとした気だつた。

ガキイイイイン！！！

突如両横に現れたフェイトとエリオの攻撃をギリギリで防御することに成功した。

エリオにいたつては昔よりもスピードが上がっているのがわかつた。

「ちつ、まさかこの2人が先にきちゃうとは・・・」

「いきなりの奇襲で驚いたけど、さすがにやられっぱなしはイヤだからね！」

「今回は負けないからね！」

「はいはい、なら 今度は違う奇襲をするまでです」

「「？」」「

ガン！－！ガン！－！

2人は突如後頭部に痛みが走り、力が緩んだ。
その隙を見逃さず、桜は2人を切りつけた。

エリオ、フェイト

「い、今のは・・・」

「さあ、流れ弾じゃね？」

もちろん流れ弾なんかじゃない、ちゃんと狙った弾だ。

最初の地点、アウルがそこで待機している。

そこからの超精密射撃と兆弾を利用して得られる広範囲への射撃。

そう、俺たち黄組の作戦はこれだ。

第1に俺が砲撃で奇襲をかける。

第2に俺を狙つて集中砲火が来ると予想し、そこへ来た2人組の相手を誰かが引き受けた。

もし、予想が外れたら各自散回、20%の状況を無理やりにでも作る。

そして第3、最後に全員が戦っている中アウルが精密射撃で全員を援護。

地味にライフを減らし、戦っているヤツがどめをさすという作戦だ。

実質20%もある状況、相手の1人は見えない。

実戦でこれが出来ればたぶんほとんどの確率で勝ちが得られるであろう。

「（ヒリオ、ここは2人でフェイトさんをやらないか？）」

「（なんださ。ここの状況ではフェイトさんと一緒に戦つた方が断然有利だよ）」

「（バカだなあお前は。俺と組んで体力とライフを温存しながら戦

うのと、フロイトさんと組んで俺に大量のライフを削られるの、ど
つちが言いに決まってる？」

「（う・・・わかった。やれり）」

これにてエリオの敗北は確定したも同然だ。

俺と組めば確かに体力とライフは温存できるだり。

だが、しかし！その後が問題だな。

エリオが俺とサシで戦つて勝った歴史はアルと出逢つて以来ない！
つまりはエリオは（たぶん）俺には勝てない！

「あ、勝負はこりからですよ、フロイトさん」

「僕達、2人を相手に出来ますか？」

第30話 合宿2日目 01（後書き）

やべえ、なんか書いてて楽しくなつてきてテンション上がりついてきました（笑）

桜の策略が酷い、もといすげー。

自分を餌にしてアウルの精密射撃でライフを削るなんて！
しかもしょっぱながら砲撃はもつとやばいであります！

ついあえず、次回も戦闘描写オンラインです！

誤字脱字、感想あればお願ひします。

第31話 合宿2日目 02（前書き）

今回はシャナ、リーフ、リナの場所を書きました！

3人とも結構頑張ってますね。

さて、それぞれの相手に勝つことはできるのか・・・。

「ロナ、シャナ＆リオ、仲良し元気つ子コンビ」

「雷龍！」

「炎風！」

リオが放った雷龍に対し、シャナは紅い翼から炎の風を送りだし、雷龍の威力をさらに高める。

炎の風を纏つた雷龍は炎龍を粉碎し、片手を地に沈めているゴライアスへ一直線。まとわりつくようになるが。

「ゴライアス！」

ゴロナの合図と同時にゴライアスは埋まっていた右手を無理やり引き抜き雷龍を炎龍同様に粉碎する。

だが、それに乘じてリオとシャナはゴライアスの後ろへ着く。そしてそのままゴロナへ攻撃を仕掛けようと踏み込んだ時だった。

ビキ！ ビキビキ！ ビキ！

ゴオオオオオオ！ ！ ！

すさまじい音を立てながらゴライアスの上半身がぐるぐると行き良いよく回り始めた。

突然の事にリオは急いで防御に入り、シャナは翼を利用して後ろへ下

がる。

「『』、このパンチは乗つたままだと危ないかも~?」

『同感です』

『オーーとリオがいた瓦礫から炎と雷の柱が立つた。中心にはもちろんその柱を出した本人のリオがいる。

リオ

LIFE 2800 - 1100 = 1700

「(す)ごやロロナ。あんなに速いゴーレム操作は並みじや出来ない()」

シャナ

LIFE 3000 - 900 = 2100

「ゴーレムをあんなに速く動かせるなんて、ロロナは(す)ごや!」

『お2人とも予想以上にダメージが少ないです』

「リオは防御もつま()し、シャナはすばしっこいから」

2001の状態にもかかわらず、優勢を保ちつつあるロロナ。そんな中、先に動いたのはリオとシャナだった。

「リオ!」

「うん!雷神装!」

2人はゴライアスへと一気に間合いを詰める。

何かが来ると予想したコロナはゴライアスを防御の体制にする。それを予想していたのか、2人はいきなり狙いをすらした。

「炎衝斬！！」

「轟雷砲！！」

狙いをすらした場所は脚と立っている場所。バランスを崩せばこっちのものだ。

そして足場を悪くしたゴライアスは簡単にバランスを崩す。

「リオ、今だよ！」

「よい」

耐性を保つたままではいられないゴライアスの右腕を、リオは両腕を広げ力の限り持ち上げた。

そしてそのまま背負い投げの要領で投げ飛ばした。

「…………！」

『マスターのお友達は力持ちですねえ』

「ブランゼル、そんなのんきな！」

投げ飛ばされたのにブランゼル自身、焦りが見えない。

それほどコロナを信じているのだろう。

「「イエーイッ！－！」

side out

リーフ（&アウル） vs ティアナ

「あわわわわ－！－！－いで！？」

リーフ

LIFE 3000 - 400 = 2600

現在リーフはティアナを相手にしている。
と言うものの・・・。

「ほらほらー逃げてばっかりじゃ勝てないわよ！」

「俺には無理がありますって！－！」

実力の差が出てきていた。

ぶっちゃけリーフが一番弱いのでいきなりティアナの相手は無理だ
ろう。

だが、残念なことにそれ以外はもっと難しかった。
残っていたのはなのは1人が、ヴィヴィオ&アインハルトのどちらかだ。

キヤロとルーテシア、瑠璃は支援のセッティング中。

どちらにしろ一番弱いリーフではティアナの相手をして時間を稼ぐ

のが精いっぱいだった。

「ぬう・・・」いつなつたら—〇—オーガ

『イエス』

諦めて決心したか。

リーフは逃げるのをやめ、デバイスを構えた。
そして向かってくるティアナの魔力弾を気合いで斬り落として行く。

「おお、やるや！」

「弱いヤツは弱いなりに頑張れるんですー！はあーーー！」

がむしゃらにティアナとの間合いを詰めて一閃。
だがその攻撃は届くことなく、ティアナの姿は消えて無くなつた。

「あれ？ 痛！ー！」

リーフ

LIFE 2600 - 800 = 1800

姿を見失いきょろきょろとティアナを探していくせなか、後頭部に複数の痛みが同時に走る。

弾丸が飛んできた方向へ顔を向けると、もういたはずのティアナがいた。

「私、これでも幻術使いなの。さっきのはフェイクシルエット」

「しまつたあー桜さんと何度も幻術対策してたのにーーー！」

「残念でした。まずは1人目！！」

「ちょ、ま　」

リーフの声はティアナの弾丸の音でかき消されたのであった。

s i d e o u t

リナ ∽スバル&ノーザンエー「ナックル姉妹コンビ」

「おわ、つと・・・ふう」

「なかなかやるな」

「さすがは桜の教え子だね♪」

現在の3人の残りライフ。

スバル：2050

ノーザンエー：1950

リナ：2000

この2人相手にこの残りライフなら上々といったところだろうか。
アウルの援護もあるため十分勝てる可能性はある。
そう、へまをしなければだが。

「つてあれ？」

「あー、ノーヴェー！何処行くのー。」

「後衛攻めさ！今なら弱ったヴィヴィオとお嬢を両方まとめてブン殴れるしな！」

現在、ヴィヴィオはアインハルトとの1-0コ1に敗れルートシアのもとで回復中。

アインハルトはそのままなのはの所へ行き、勝負を仕掛けて敗れ同じように回復中。

この比較的数の均衡を崩すチャンスをノーヴェが逃すはずもない。

「スピードならアタシとジエットが上だ！追いつけるもんなら追いついて見やがれ！！」

「ちょ、ノーヴェー！」

「スバルさんは逃がしませんよー！」

「ええー？」「いや、困ったなあ・・・」

第31話 合宿2日目 02（後書き）

リーフ・・・お前はいつかきっと・・・。

さて、シャナとリオのコンビはなかなかよさそうですね。以外にそのままロロナを倒しちゃうかも？

リナの場合はスバルとの1001！
結果は果たして！

次回も引き続き戦闘描写オンリーです！！

誤字脱字、感想あればお願いします。

フェイトvs桜&エリオ「元六課年少男子コンビ」

『桜さん！リーク君が撃墜されました！』

「何イー！？やっぱりあいつにティアさんの相手は無理だつたか・・・」

「

現状説明と行こう。

今は30%の状況が出来あがっているところもある。

アウルの遠距離兆弾奇襲も相手には読まれ始め、次の作戦に移行。瑠璃がアウルを召喚魔法で呼び、中心からの全方位遠距離兆弾奇襲をしかけた。

魔力散布も充分だ。

これなら集束砲で押し切ることができるが、何分今じゃ分が悪い。速さのフェイトさんとエリオを2人同時に相手が出来る自信はそんなになかつたからだ。

『桜さん』

「どうした！」

『キャロちゃんと一緒に囮まれちゃいました（Ｔ－Ｔ）』

「マジか！－－アウルとシャナはどうした！」

『アウル君はティアナさんを探しながらの援護、シャナちゃんはさつきキヤロちゃんに捕獲されて身動きとれずじまいです～！』

まさか！」今まで黄組が押されているとは。

シャナは捕獲されて、キヤロと瑠璃が赤組に囮まれていて？
ぶつちやけキヤロがやられてくれればうれしいが、こっちも瑠璃を失うのはきつい。

「アウル！ 今どこだ！」

『ティアナさん探しで移動中』

「瑠璃の援護とシャナの救出に行けるか」

『・・・難しい』

「ならチャレンジしてみろ」

『頑張つてみる』

「頼んだぞ」

アウルへの頼みは終了。

瑠璃にも持ちこたえるように伝え、一人で戦っているエリオをそろそろ助けにいかないと。

「悪い、待たせた！」

「別に！ まだまだ平気だけど」

エリオ

LIFE 1600

桜

LIFE 2150

フェイト

LIFE 1800

「ソニック！」

桜がエリオと合流するのを確認したフェイトはソニックフォームへ姿を変える。

ここまで来たらいつに決めるつもりなのだろうか。

大量の魔力弾を華麗にかわし、桜との間合いを一気に詰める。

「エリオ！ 飛べえ！ ！」

「了解……」

剣を逆手持ちにしてクロスさせ、胸の前に足場を作る。

その上にエリオが片足をのせ、桜がばねの要領で勢いよく上空までエリオを飛ばす。

そして空中でフェイトに追いついたエリオが一気に切り裂く。

「うおおおおお……！」

フェイト

LIFE 1800 - 1360 = 340

「追撃、『めんなさい』」

フェイト

LIFE 340 - 300 = 40

ライフが100未満のため治療が行われるまで活動不可、行動不能

「「よつしゃあ！…！」」

side out

「スバルさん！逃げないでください！」

現在スバルは逃走中。

普通に相手をしているさなか、いきなり逃げだしたのをリナは追っていた。

「ええ！？追いついてくるの！？」

「脚の速さには自信があるんです！」

ちなみにリナの脚の速さは異常だった。

100メートルを10秒切っていた。

その上今は桜に圧縮魔法を教えてもらい、瞬発力を高められている。スバルの速さに追いつくことだってできたのだ。

「到着！」

「うえ？」

急にスバルが動きを止める。

それに合わせてリナも動きを止めたがそこには

「お前も来たのかよ」

ヴィイヴィオとのは、ノーヴェがいた。
しかも同じチームがスバルを合わせて3人。
ピンチにひとしいかもしね。

なのは&ヴィヴィオ&スバル「仲良し親子&教え子トリオ」

リナ&ノーヴェ「異色格闘型コンビ」

「ノーヴェさん」

「ああ、わかってる」

「…」
「…」
「…」
「…」
「…」

Sideout

リオ&ルーテシア「知的で元気コンビ」

V
S

キヤロ&瑠璃「サポート最強コンビ」

リオ&ルーテシア「知的で元気コンビ」

「キャロちゃん、ここは3人でどうにかしよう。」

「うん、頑張るー。」

桜とエリオがフェイトを行動不能にした。リナはまたリナとノーヴェが奮闘している。リオとルーテシアに囮された状態のキャロと瑠璃。ちなみに向こう側にアルケミックチェーンで捕獲されたシャナが放置されている。最初は3対2だったにこくなつては分が悪い。

「でも、どうしよう・・・」

「大丈夫。私に秘策があるから」

「ホント! ?」

「うん。だから・・・・。」

「・・・はい、わかりました!」

そう言って瑠璃はその場から早々とたち去る。

リオとルーテシアは「え! ?」みたいな顔をしているが、これなら簡単にキャロを倒せると逆に勢い付いていた。

一方キャロはある作戦を実行するためにはまずは逃げ続けていた。ルーテシアのダガーも魔力弾で淡々と相殺させ、ダメージを受けず逃げ続ける。

「（二十ページ分が悪いけど……）アルケミックチーン！」

「「うふふー 当たらない当たらない！」

「それはそうだよ。当てるためじゃなくて、撃墜のための布石だか
らー。」

その言葉の意味を指すものは少し向こう側。
そこには立ちあがり、復活を果たしたゴライアスとコロナ。
そして先ほど何処かへ行つた瑠璃がいた。

「ナイスです、キャロさん！」

「コロナちゃん、必殺技いくよー！」

「はいー。ゴライアスパーージブラスト！ー！」

「エクストラブースト！パワーアンドスペード！ー！」

「「スーパーロケットパーーーーンチツッ！ー！」

「「へ？」」

ゴライアスは右腕を上げ、発射の構えをとる。

構えた右腕は上半身と同じようにビキビキと音を立てながら回転し
始め、やがてはギュルルル！ーーーとものすごい音を立て高速回転
している。

ただでさえ威力が高く、大きさも半端じゃないのにそこへ瑠璃のブ
ースト。

回転速度はさりに上がり、ゆっくり回っているように見える。
そして、2人の掛け声とともに、『ライアスの右腕は発射された。

突然の事に気の抜けたような声を上げたりオとルーテシアへ向けて
ロケットパンチは一直線。
もちろん、スピードも半端なく、範囲もそれなりに広いパンチを避けられるはずもなく

「「「うそ…………!？」」」

リオ

LIFE 1700 - 3000 = life over

ルーテシア

LIFE 2200 - 3000 = life over

直撃をくらい会えなく撃沈。

まあ、直撃でなくとも撃墜されていただろう。

「撃墜成功！」

「勝利の！」

「バツ……！」

ピンチを脱出し完全に油断していた時だった。

「うく――――!？」

キヤロ

LIFE 1700 - 1700 = life 0

「？」

「これって！」

「キヤ口撃墜に」「ロナちゃん、瑠璃捕獲！」

後ろの方からキヤ口は撃たれ撃隊。

もむかひん、これをやつたのは

「なのはさん、いつの間に！？」

「勝ったと思った時が一番危ない時！現場での鉄則だよー！」

なの
は
だ。

リナ達との戦いから抜け出してきたようだ。

「ブラスター 1!!」

ブラスター システムを使用する。

ブランスタービットが周りに集まり始める。そして試合の終わりが近づくのであつた。

第32話 合宿2日目 03（後書き）

エリオと桜のコンビネーションはスバティア以上でなのフェイ以上です！

つまりは最強！勝てる人はいないんじゃないかな？

そして瑠璃。

キヤロと2人ならサポート最強ですね。

たぶん、この2人が同じチームに入つたらルーテシア一人じゃ勝てないなw

リナの脚の速さは異常です。

本気出したら桜やフェイトはビックリですね。

未だに桜の前で本気の速さ出したことないようですからw

次回で陸戦試合は終わりです。

誤字脱字、感想あればお願いします。

第33話 合宿2日目 04（前書き）

今回はいきなりクライマックス！

ティアナ＆なのはのスタートライトブレイカーが桜へ向けて打ち出された！

桜は果たしてどうする？

「モード『マルチレイド』」

「シフト『ファンタムストライク』」

なのは、ティアナが集束に入る。
目標はもぢりん桜だ。

桜を中心にして、その射線上にお互いを捉える形となつている。

「「スター・ライト」」

それを見越していか、桜はすでに圧縮を始めていた。
右手には限界まで溜まつた魔力あり、白銀の光を出していた。

「レムリア」

「「ブレイカ――――」」

「インパクトオ――――」

次の瞬間、中心地は集束砲のぶつかり合いで光に包まれた。
「これ、なんて最終戦争?」といふセイエンのコメントよじへ、
が見ても最終戦争そのものだった。
その中心地に桜はいたのだ。

「ゼロドライブ――――」

右手のレムリアを地面にたたきつけて巨大なバリアを作るよつこして爆発を起こす。

だが、それだけではもつ気配が無い。

このままではライフがけし飛ぶと判断した桜は最終手段に出た。

左手にも魔力をため始めたのだ。

白き冷気をまとった左手手刀でティアナのブレイカーを。そして熱量をもつ右手でなのはブレイカーを受け止めた。

その刹那。

今度は最初のよりもまばゆい光に戦場は包まれた。

side out

フェイト

LIFE 0

S LB 着弾直前に桜とエリオの攻撃により撃墜

エリオ

LIFE life over

S LB - PS 直撃・撃墜

シャナ

LIFE life over

S LB - MR 直撃・撃墜

「なんだか私、今回活躍で来てないーー！」

『次がありますよ』

アウル

LIFE 5

SLB-MRから逃げるも巻き込まれて戦闘不能

「残念・・・」

ロロナ

LIFE 30

SLB-MRを『ライアスで防御するも防ぎきれず 戦闘不能

「ふにゃ～～」

『大丈夫ですか、マスター?』

「な、なんとか～・・・」

なのは

LIFE life over

SLB-PSを相殺しきれず 撃墜

「あーーん、やーうれーたあーーー！」

ティアナ

LIFE 2390 - 2280 = 110

SLB-MRをなんとか相殺

「な・・・なんとか生き残つた・・・」

瓦礫から出でてきたのはティアナだつた。
ライフはかろうじて残つているものの、かすりでもしたら戦闘不能
だ。

「残つてるのは私と・・・あと、3人?しかも2人は近付いてきて
る!?この速さはスバル!/?じゃあもう一人は!」

「俺ですよ・・・」

桜

LIFE 2150 - 1876 = 274

SLB-MRおよびPSをレムリア・インパクト、ハイパー・ボリア・
ゼロドライブを使いなんとか相殺、ガードウイング（翼×6）での
防御成功

「それとヴィヴィオです!」

ヴィヴィオ

LIFE 1800

「うそお！？何で生き残ってるの！？ヴィヴィオにいたってはなん
でほぼ無傷！？」

上空からは桜、地上からはヴィヴィオの奇襲だった。
この兄妹、コンビネーションが本当に強い。
ヴィヴィオにいたっては無傷だ。

「えへへ！見たか特救魂！」
レスキューだまじい

「あー、くそ。やられた！」

「私こと、ほとんどスルーなんて酷いです・・・」

スバル

LIFE 60

SLB・PSからヴィヴィオを底い行動不能

ノーヴェ

LIFE life over

SLB着弾後、ヴィヴィオの攻撃により墜落

リナ

LIFE life over

SLB・PS直撃・墜落

「ティアナさん、行きます！」

「あんな集束砲をぶつ放してくれたお礼はたっぷりしませんとね」

「別に来なくてもいいし、お礼もいらないんだけど・・・」

ティアナの撃つ魔力弾を巧みにかわしながら高町兄弟は迫ってくる。だが、そんなピンチはすぐに過ぎ去つてゆく。

「霸王・空破断（仮）！――！」

「えー！？」

「わかるかよー。」

桜

LIFE 274 - 700 = life over

ヴィヴィオ

LIFE 1800 - 150 = 1650

「ティアナちゃんはやられません」

「うーじめん、aignhardt・・・れいかのドヂハヤリがちがつた

「ええー！？」

aignhardt

LIFE 1350

ティアナ

LIFE 110 - 600 = life over

桜がやられ際にティアナへ撃つた一撃が当たり撃墜

「ヴィヴィオさん、私達が最後の2人のようです」

「はい！行きますよ、AINHARDTさん！！」

最後に残ったライバル同士の2人の対決。
殴つて蹴つて、守つて流しての繰り返し。
だがそんな中でもお互いを分析、解析をして見極める。
それを繰り返しているうちに2人のライフはいつしか少なくなつて
いった。

ヴィヴィオ

LIFE 900

AINHARDT

LIFE 750

「一閃必中　　」

有効だを決めた後の最大のチャンス。
それを見逃さず、ヴィヴィオはさらなる追撃に出た。

「アクセルスマッシュ！－！」

カウンターアッパーが決まり、AINHARDTのライフが0になる。
それと同時にヴィヴィオは勝ちを確信するのだった。
だが、勝ちを確信するには早すぎた。

「！？」

ふらついていたアインハルトからの蹴り。
それが油断していたヴィヴィオに直撃する。

ほんの一瞬だった。

ほんの一瞬でお互いのライフが0になり、試合が終了した。

『はい、試合終了～～～！』

青組	・	・	行動不能1名	撃墜5名
赤組	・	・	行動不能1名	撃墜5名
黄組	・	・	行動不能2名	撃墜4名

試合時間 21分48秒

全員行動不能につき 引き分け

第33話 合宿2日目 04（後書き）

はい、やっと陸戦試合が終わりましたね。

次回は2日目の夜の話として、出来たらつなげて3日目ですかね。

まあ、できたらどうナビ。

誤字脱字、感想あればお願ひします。

「さて、休憩取つて陸戦上の再構築終わつたら2戦目だな。2時間後にまた集合」

『はーーー。』

「え？え？2戦・・・田？」

桜の言葉とみんなの返事に1人だけ困惑気味のアインハルト。その姿を見てヴィヴィオと桜が近寄り声をかけた。

「い、言つてなかつたか？」

「今日1日で3戦やるんです！休憩はさんだり、作戦組み直したりして！」

「ならよかつた。もつとやりたかつたんです」

「じゃ、解散！2戦目は1-2対6だから」

『え？』

「や！」でー？」

全員に言つたはずが誰ひとり聞いた様子はない。
まさか言い忘れた？まさか、そんなこと・・・ありえるな。
しうがない、メンバーだけでも言つておくか。

「6人チームは俺とフュイトさん、母さん。それとルールーとリオ
とリーフだから」

「ちょっと、それあんまりにも片寄りすぎでない？」

「大丈夫。ぶっちゃけたら数がハンディですから。12対6ですよ
？」

「でも……」

「まあ、まあ。上へこうのつてあんまりないからいいんじゃないの」

「……しようがないわねえ……」

「あ～、意見があれば言つてくれてもかまわないんですけど……
あくまで今のところなんで」

「反対意見は？」

『ありませーん』

side out

第2試合 結果 赤組（6人チーム）の負け

試合時間 34分11秒

赤組 行動不能	3名	撃墜	3名
青組 行動不能	4名	撃墜	3名

第3試合 結果 9人1チームで分けて赤組の勝ち

試合時間 47分51秒

赤組 行動不能5名 撃墜3名（ラストは桜）

青組 行動不能3名 撃墜6名

「ふう、さすがに3連戦はキツイわねえ～」

「ホントだね～」

「でもおかげで大分実戦勘が戻ったかも」

「よかつたよかつた」

全試合終了後、ホテルアルピーノ露天浴場にて。
ティアナとスバル、ノーヴェはゆつたりとくつろいでいた。
ちなみに3人とも浴衣である。

コンコン

戸がノックされ、音が鳴る。

それに反応したティアナがびくびくと返した。

「うひっす。あ、浴衣似合つてますね～」

「あ、桜」

入ってきたのは桜だった。

手にはトレイがあり、その上にドリンクが置いてあった。

先ほどの桜のコメントでノーヴェだけ少し赤くなつてたり、意外や意外、ティアナもちょっと赤くなつてた。

「これ、俺特製のマスカットビネガーのジュースです。結構美味しいですよ？」

「頂きました」

「気が効くわね～」

「サンキュー」

3人とも勢いよく飲んでいく。
喉が渇いていたのもあつたのか、一口が結構長い。

「そう言えば、みんなはどうしてた？」

「あ～、フロイトさん一家はのんびり、母さんとメガーヌさんがキツチンで談笑中、でチビ達が部屋ぐつたり」

「やつぱりか」

「まあ、みんなまだ子供ですから。でも瑠璃やアウルは俺の訓練受けたのになんでかな？」

そう、なんとかあの2人もぐつたりしていた。

俺の訓練を受けたらたいていのやつは体力着くのにどうしてだ？まだ子供だから体力着くのが遅いのか？いや、それはないだろう。ヴィヴィオだった結構体力あるんだから瑠璃がつかないのはかし（長くなるので切らせてもらいました）

「じゃ、俺はチビ達に飲み物あげてくるんで」の邊で

「ジュースありがとね~」

「なら、またその内」

そう言いながら露天浴場を後にした。

そして再びキッチンへ戻りジュース作成。
つてあれ? マスカットが・・・置い忘れたな。

「えっと、これとこれと、これは・・・まあ、いいか」

とつあえずフルーツをたくさん出してみた。
うーん、マスカットはやはりなしか。ならレモンジュースとかどう
だろうか。意外に良いかもしね。

小さめに切ってミキサーの中へ。

他にもフルーツ入れたからすこはね控えめだひつ。

「よし、完成。母さんちょっと飲んでみて」

「あ、美味しい。フルーツジュース?」

「レモンメインだけね」

「良いんじゃないかな?」

「じゃ、渡してくれるわ」

呼びとめようとしてたのを振り切ってキッキンを出る。
もし止まつたら絶対にキスされてたな。メガーヌさんいるのに。
たまに母さんは大胆な行動に出るから怖いんだよな。

おつと、そんなことはどうでも よくないな。
とりあえずそれは置いておいて、ドアの前。

コンコン

ノックって大切なよな。ノック考えた人は天才だよ。
だって入るよ～って言わなくとも伝えられるんだからわ。
ドア越しで出来るつてのがまたいいよな。

「ビバぞ～」

中からルールーの声が聞こえる。
片手でトレイを持ってドアを開けた。

「栄養補給用のフルーツジュースだぞ～、お？インター／ミドルの映
像か」

「や。今、AINHARDTの出場を勧誘中」

「ほ～、いいな（出・・・たい・・・！）～？」

「どしたの？」

「い、いや、なんでもない（今のは・・・）」

頭の中で聞こえた声。それはまぎれもなく自分の声だった。

だけどなにかがおかしい。幼い昔の声だつた。
一体なんだつたのだろうか、謎は深まる一方だ。

一方その頃、ヴィヴィオ達はインター＝ミドルの話で盛り上がり上がっていた。
ちなみに都市本戦上位あたりの選手の中には結構格闘家になる進む
子がよくいる。たぶんヴィヴィオ達が参加して上位に入つたらそつ
なるだろ？

「どうだ、出てみたくないか？」

「あ、その・・・」

「アインハルトさん！」

戸惑っていたアインハルトに、ヴィヴィオがずいと迫る。ちょっと
近すぎたなと思つたヴィヴィオは少し下がつてさらに続けた。

「大会予選は7月からですから、私もまだまだ鍛えます。だからも
つともっと強くなつて、公式試合のステージでアインハルトさんと
戦いたいです！！」

「・・・ありがとうござります、ヴィヴィオさん。インター＝ミドル、
私も挑戦させていただきたいと思います」

「はいっ！」

「なら決まりだな。参加資格2つは問題なくOKなんだが・・・も
う一つがな・・・」

「もう一つって確か・・・」

「ああ、最後の参加資格は『安全のためCLASS3以上のデバイスを所有して装備すること』だ」

「桜兄いは作れないの？」

「^{エンシント}真正古代ベルカのデバイスはさすがに無理だな。それこそあの人達に頼まなきや」

「あの人達・・・？」

「そう、バリツバリに^{エンシント}真正古代ベルカな大家族　八神家だ！」

第33話 合宿2日目 05（後書き）

次回は3日目！

どうなるかはまだ不明です！

誤字脱字、感想あればお願ひします。

第34話 チビ桜再び（前書き）

サブタイトルの別名は『合宿3日目 01』です。

第34話 チビ桜再び

翌日。合宿3日目が幕を開けた。
チビ達よりも大人チームはちょっと早く起き、朝食の用意をしていた。だがその中に桜の姿がない。

「・・・ん」

なのは達が起きたちょっと後、スバルも目を覚ました、
だが何やらちょっとした違和感が胸のあたりにある。でも抱き枕と
してはちょうどいいサイズだ。そう思い抱きしめた。

「にゅう・・・・・スー、スー」

「？」

あれ?なんだかおかしいな?抱き枕って喋るの?
それに私抱き枕なんて持つてきたっけ?と言づか持つてたっけ?

疑問が頭の中に多数浮かぶ。

少し考えていると完全に目が覚めてしまった。
なら、確認しようとわんぱかりに抱き枕だと思っていたものを手
放し、少年だと言つ事を確認した。

「え・・・?」

スバルの朝はビックリで始まった。

「そつ言えば桜の姿が見当たらないけど・・・」

「疲れてまだ寝てるんじゃない?」

「なんせん! なんせん! なんせん!」

「どうたどたと足音を立てながらスバルがやつてくれる。一体何事かと思い、みんながやつってきた。

さらにはスバルの多足音でチビ達も起きてやつてくる。そんな中スバルはなのはに自分が抱いているもの（？）を見せた。

蒼と緑のオッドアイ、さらさらとした黒い髪、頭のてっぺんからはぴょんとハネたアホ毛。シャナよりも小さい体。見るからに

卷之三

誰だかわからない。みんな少し驚いているが、この子は誰?という方が大きかった。

一方少年はスバルの手から離れ、なのはの後ろに隠れてしまつてい
る。人見知りが激しい性格なのだろう。

「桜、大丈夫だよ」

「（フルフル！）」 泣き目で首振り

「みんな襲つたつしないから」

「・・・ホント?」

「うそ」

しゃがみ込み桜と呼ばれる少年と話すのは。
みんな、え? 桜? このちっちゃいのが? みたいなことを思つてゐる。
だがそんなことは気にせず普通に少年は涙をぬぐつていた。

「なのはせき、今桜つて・・・」

「うそ、桜だよ。でもほとんど別人だけじね

「え・・・」

「そ、朝」はん食べよ

「うそー」

side out

朝食とともにみんなへ事情説明。

よつやく納得したか、みんなチビ桜を可愛がつてゐる。

まあ、なんといふかチビ桜は対応が早かつた。
はやでがいなくてちょっと泣きそうになつたがなのはが慰めてセー
フ、さらにはヴィヴィオ達が話していたインターミドールの話を聞き、

「僕も出るー」と言い出した。

そして今はアインハルトのデバイスをはやてに連絡を取つてゐるのだが・・・。

『あ、ルールーオーツス！』

「おいーす、アギト

「アギト～

『おお、桜じやねえか。何でいんだ?』

「合宿～」

『さうか。えつと、デバイスの件だつたよな?ちよつと待つてて』

「うん、お願ひ

八神家に連絡をし、最初に出てきたのはアギト。

チビ桜がルーテシアの家に居るのにちょっと驚くがあまり表には出

さず、すぐさまはやてを呼びに行つた。

しばらくすると人影が出てきた。

そしてその顔は

狸?

『はあい、ルールー。お久しぶりや～

「八神指令、お久しぶりです」

「おぬれさん」

「「え・・・」」

『桜、いい子にしてたか～?』

「うへん、たぶん?」

『そか。みんなに迷惑かけやダメやでっ?』

「うふー!」

話の主題が変わつそづなといひで話を戻す。
ルーテシアはAINHARDをはやてに紹介し、はやてはAINHARD
トを聞いていたらしく、快くデバイス作成を引き受けてくれた。

『桜がレジリエンスして事は、桜も出るんやね?』

「あ、はい。出たって言つてましたから」

『桜、デバイスもつとるや〜?』

「こじはイヤだ! NEROはお兄ちやんのだから使つたくない!」

『兄妹やね?』

「桜兄ちやん」

『え? あ、ああ、そつまつ事かあ』

一瞬どうこうことがわからなかつたが少し考えて整理完了。チビ桜はもう一人の桜の事を知つてゐる。と言うか記憶まである様だ。まさかわざとこれをやつてゐるのでは?と思つがあの無邪氣な顔は演技ではない事を表してゐた。

『なら、どうしようか・・・。AINHARLTみたいに補助形にする?それとも』

「二二二銃!」

『え?』

「ティアナお姉ちゃんみたいなヤツ!』

『ん~、ならクロスミリージュをベースにして、ダガーモードを抜けばええかな』

「やつた!』

『その代わり、全力を出して戦う!』と。ええな?』

「うん!約束!』

拳を前に突き出し、にっこり笑いながらそう言つた。
それに対しはやても快く了承、デバイス作りをすることに。

「桜、今日から頑張つて特訓ね』

「誰にも負けないよ、僕は強くなるからね』

第3・4話 チビ桜再び（後書き）

やばい、もう3巻が終わってしまった・・・。

どうしよう、この先がわからない（まあ、ひる覚えでは若干覚えてます

オリジナル要素入れたいけど、その前に合宿を終わらせないと。

まあ、そこいら辺は頑張って思い出したいと思います。

誤字脱字、感想あればお願ひします。

あ、『桜の花が咲くころに番外編 if story of A C
E S』の方もよろしくお願いします。

第35話 修行開始！（前書き）

3か月ぶりの更新、遅くなつてすいません！
それなのに今回は短め。
本当にすいません。

第35話 修行開始！

4日間の合宿を終えて。

ちびっこメンバーは『DASSSインターMIDル』に出場するべく、修行が始まった。

ヴィヴィオ、アインハルト、リオ、コロナ、シャナの5人はノーヴェガコートになつて教えることに。

チビ桜は当然ハ神家メンバーと桜自身に教えてもらう。

今のところ、アインハルトとチビ桜のデバイスは完成していない。それまでの間はデバイスなしでの特訓となる。

（本当に良かったのか？）

（何が？）

（瑠璃に召喚獣全匹とアルを預けたことだよ。せっかくハ神家のみんながアルを深津させてくれたのに）

ミッドに戻ってきて数日。

実は合宿中にとあることがあった。

それは桜の召喚獣達が異様に瑠璃になつたのだ。

別にチビ桜のことが嫌いになつたわけではなく、魔力の波長があつてゐるからだらう。しかも3匹全てと。

才能はあるし、キャラのように召喚獣を使える方が戦闘ではいろいろ便利だらう。そしてチビ桜の一存で瑠璃に預けることになつた。

そこでの全般的な操作を出来るようにするためにアルも預けた。
まあ、アル本人も瑠璃とは仲がいいのですぐに了承してくれたのだが、そのせいで瑠璃にスター式を教えることになったのはしょうがないことだらう。

(いいの。僕にはお母さんたちが作ってくれるデバイスとICOがあるから)

(使いたくないとか言つてなかつたか?)

(しようがないじゃん。みんな瑠璃になつこちやつたんだし。銃型デバイスだけじゃ不安なんだもん)

(絶対に昔の俺の戦い方思い出しちだろ)

チビ桜と桜の記憶は共有してある。

当然チビ桜が桜の昔のことを思い出せるし、今まで桜が思い出せなかつたチビ桜の記憶も思い出せたりする。

「ああ、今日も修行開始だ!—!—」

s i d e o u t

「あー、なんていうか、寂しいなあー」

場所は変わって教導隊。

基本桜がこれない状況なので、一代目FWは寂しそうだ。

教えるのは桜に代わり、なのは。

教え方は2人とも同じなので支障はない。

だがやつぱりいつも桜なのでちょっと違和感があった。

「なのはさんから頼めませんかね？」

「うーん、桜は八神家にいるからなあ。頼めば時間作ってくれるとは思うけど、今は小さい桜の特訓で忙しそうだし・・・」

「なのはさんじゃ、スター式は教えられませんし」

「あ、そこは大丈夫だよ。ちゃんと練習メニューも立てるから」「

「桜さんって変なところで用意周到ですね」

桜に来て、教えてほしい。

それは全員同じなんだが、中々これないのは知っていた。
だが自分よりも他人を優先する桜の性格上、チビ桜が一番優先される。

インター ミドルに出たい。

そのチビ桜の言葉で桜は教えながら、体を使わせている。
つまり、余裕がないのだ。

「今度頼んでみるね」

「 「 「 「 お願いしますー.」「 「 「

(とつあえず、ここでの戦い方から慣れていくか。銃型デバイスの方は出来てからな)

「（ア解ー）といふことで、ミカヤさんお願ひします！」

現在場所はミッドチルダ南部の抜刀術天瞳流第4道場。正座するチビ桜の目の前には師範代の女性ミカヤがいる。

道場、といふことでチビ桜もしつかり道着に着替えてある。そしてミカヤの手には刀が握られていた。

「えっと、確か桜君のもつ一つの人格の桜君でいいんだよね？」

「八神桜です」

「承知した。まあ、私も出場選手だからね。あまり手加減はしてあげられないよ」

「むしろ負けません！」

「聞けばオールラウンダーだそうじゃないか。銃撃、斬撃、格闘。本当に楽しみだよ」

するりと抜いた刀をチビ桜に付きつけるミカヤ。

チビ桜は全然動じていない。

それどころか楽しそうにしている。

ちなみにミカヤは18歳で桜よりも年上だ。

意外にもノーヴェと知り合いだつたりと結構顔が広い。

「君は格闘と斬撃の修行。私は接近戦型に何もさせずに斬り落とす鍛練。互いに利害は一致したわけだ」

「役に立てるよう頑張ります！」

「おいおい、瞳がそろは言つてないぞ。ぶつた倒す気満々じゃないか」

拔刀の構えに入るミカヤ。

それを見たチビ桜も立ち上がり、魔力刀のサーベルを片手に構える。

「行きます！」

「来たまえ」

第35話 修行開始！（後書き）

次回はついにアインハルトとチビ桜のデバイスが完成！
早速試合で勝つのはどうだ!??

誤字脱字、感想あればお願ひします。

第36話 猫と銃と練習試合（前書き）

今日は何と戦闘描写が2つも！
しかも片方はショッパンから始まります！

第36話 猫と銃と練習試合

「でりやあつ……」

ガキインッ！

魔力刀のサーベルと刀がぶつかり合つ。

ギリギリとにらみ合ひ、チビ桜は苦戦している。それにしては笑顔で楽しそうだ。

左手と頬の切れた所からは血が流れているが、まあ、大丈夫だろう。

ミカヤの戦い方は道場の名の通り抜刀居合。

鞘におさめた刀を抜くき、斬る速さはすさまじい。

チビ桜は最初の一撃は何もできず、ミカヤのやりたい『近接格闘型』に何もさせずに切り落とす』の状況だった。

だが、今は違う。

何度もやっているうちに慣れてきた。

サーベルの使い方も大体わかつてきて、受け止めて斬りあつことだつてできる。

「ぐ・・・ううつーー！」

ガキインッ！

無理やりミカヤの刀を弾くことに成功。

そしてそのまま左で逆手持ちにしたサーベルを首元に突き付ける。

「・・・これで5対5か」

「ハア、ハア、ハア……」

「ふむ、ちょうどいい。今日これでおしまいだ

「え……？」

「君も疲れただろう。それにもう夕方だ」

「あ

道場の外に目を向ける。

気がつくと、空は綺麗な夕暮れに染まつていた。

Side out

同日夜。

チビ桜は基本、高町家ではなく八神家で過ごしているため、帰宅する場所は八神家だ。

そして今は風呂に入っている。
もちろんはやてと一緒にだ。

「いやちち……」

「切り傷多いな～。まあ、湯に浸かってる間は慣れやな

左手、右足、頬に切り傷を作ってしまった。
当然、湯船に浸かるとその切り傷が痛む。

別に大事に至るという訳ではないので、放つておいても大丈夫だろう。

何というか、頬についた切り傷が似合っているチビ桜。

どことなく男の子っぽい感じがして、悪くない。はやても間近で見て、似合っていると思う、と言葉を漏らしているほどだ。

「さ、髪洗おか」

「うん！」

side out

数日後。

今日は待ちに待ったアインハルトとチビ作者のデバイスの完成日だ。先ほど2人にデバイスを渡したところである。

(((猫?)))

(おお、こいつちは弾丸か。デザイントイな)

(?)

一番上がアインハルトと連れてきたノーヴェとチング。で、真ん中が桜で、下がチビ桜だ。

当のデバイスのデザインは普通(?)

AINHARDのデバイスのモチーフは雪原豹というよりは猫。そのせいで先ほどの3人の心の声は重なってしまった。

次にチビ桜の銃型デバイス。

デザインは銀色の弾頭にその下がメタリックな水色になっている。もしかしたら変換資質の氷結と掛け合わせているかも知れない。

「「いやあっ」

「あ・・・」

「触れたげで、AINHARD」

「ごそごそと箱から頭を出す猫。それを優しく取り出してあげた。

（ああ、温かいんだ。本当に生きてるみたい）

優しく包んでいるその子は温かかった。

デバイス、という概念から解かれ、生き物の概念が出てくる。その子もAINHARDが気に入ったみたいだ。

「こんなにかわいらしい子を私がいただいてもよろしんでしょうか？」

「もちろんー」

「AINHARDのために生み出した子ですからー。」

「マスター認証がまだやから、よかつたら名前つけたげてな。桜も

「うん！」

立ち上がりぞろぞろと庭に出る。
中心の辺りで2人が魔法陣を展開した。

AINHARDTはベルカ。
チビ桜はスターだ。

「個体名称登録。あなたの名前は『アステイオン』。愛称は
『ティオ』」

「にゅあ～」

「アステイオン、セット・アップ」

マスター認証を済ませ、そのままセットアップ。
いつも大人モードにバリアジャケット。

今回は肩にティオが乗っている
なんら変わりなしかと思ったが、いつもと違つちよつとした変化が。

「あれ？髪型変わつてないんじゃね？」

「あ、そういえば」

そう、髪型が変化していない。
いつもなら簡単にまとめている状態で、子供の姿のときと違つてい
たのだが、今は子供の姿と同じ髪型だ。たぶんティオが調整してくれたんだろう。

「じゃ、今度は僕だね」

ピィインッ

高い音を出しながら弾丸を上へ向けてはじく。落ちてきたそれをキャッチすると、それは先ほどの弾丸ではなく綺麗な銀色のボディに、これまたメタリックな水色のラインが入った回転式拳銃だった。

器用にそれをぐるぐると回し、また持ち直してから認証を始める。

「個体名称登録。名前は『イタクア』」

『登録完了。始めましてマイマスター。よろしくお願ひします』

「ん、よろしく。イタクア、セット・アップ」

AIN HALTに次いでセットアップ。

小さいため自分で考えなければならないのはしょうがないだろう。だがチビ桜はすでにそこら辺は考え方だ。

はやてたちが着るような上着に、半袖のジャケットとシグナムの付けている小手。下は長ズボンに、これまたシグナムやはやでがの付けている腰当てを付けている。

そして両手には起動状態のイタクアが2丁握られていた。

「よし！想像通り！！」

ガツツポーズをするチビ桜。

大人モード、というものがあつたが桜に、小さい方が有利（かもしない）と言われ、覚えてはいるが考えてはいない。

「さて、2人ともひょこひょこと調整とかしこいか?」

「あ、そうだ!調整終わつたら一回試合しよー。」

「・・・はい、よろしくお願ひしますー。」

side out

なんやかんやで数分後。

場所を八神家道場の開けた庭に移し、アインハルトとチビ桜は対峙する。

ちなみにすでにセットアップ済み。

チビ桜に至つては本気なのでしょも装備している。

腕の辺りが何だかすごくごこしてて物騒かもしけないが、本人は本気なので突っ込んではいけない。

「では・・・開始!」

ノーヴェの合図で試合開始。

先に駆け出したのはアインハルト。

チビ桜はまずは牽制で数発足元を狙つて撃つ。

アインハルトは軽くかわし、さらに近づく。

だがやはり銃を使うので近づかれるのは嫌なチビ桜はバックステップで大きく距離をとるようにしながら逃げる。

『ソニックランサー』

「シユーター」

「つー？」

目にもとまらぬ速さで単発の魔力弾が飛んでくる。

ヴィヴィオのソニックシьюターよりも速いソニックランサーだ。
幼少時代の桜の技の改良版とどちらえどもうればわかりやすいかもしない。

AINHARDTはそれに対し、回避ではなく受けに入った。
それは合宿時にも使った霸王流の対魔力弾用の技。
反射や吸收放出ではなく、受け流し。霸王流・旋衝破だ。

「おっ？」

同じ速さで返ってきたそれを相殺させる。
ちょつとピックリしたか、回避のための脚が止まってしまった。

そのチャンスの逃さず、AINHARDTは一気に距離を詰める。
拳を一気にたたき込もうとした時だつた。

「つー」

ビュンッ！！

頬を掠める魔力弾。

AINHARDTの拳は左手で受け止められ、右手に持った銃はAINHARDTに向けられている。

掴んでいる腕を外側に投げ出し、両腕に持った銃で一斉射撃。

大量乱射能力は前に使つていたイタクア譲りで多大だ。

それを防御なしでアインハルトはまともに喰らい、吹き飛ばされる。チビ桜はそれに手ごたえを感じていた。

「アインハルト」

「？」

「今度は砲撃をするから前にやつたパンチで相殺してね」

「うえ？え、ええと」

「アイス バスター——！——！」

ドゴオツ！——！——！

目の前に現れた魔法陣から放たれる砲撃。

なのはよりも劣るが、それでも威力は十分だ。

（えつと・・・脱力した静止状態。足先から下半身。下半身から上半身。回転の加速で拳を押し出す！——）

迫りくる砲撃にアインハルトは動きを止める。

前の合宿で、なのはの砲撃とバインドを撃ち碎いたあのパンチ。アンチエインナックルを繰り出す。

ドゴオオンツツ！——！——！

見事相殺成功。

拳を前に突き出した状態でアインハルトは呆けている。顔には、またできた、と書いてあるようだ。

(おお、やるなあ)

「（すつ）いやー！僕も負けてらんないねー！」アインハルト、ナイス

！」

「あ・・・はい！」

この後、試合はチビ桜の勝ち。

さうにその後にアインハルトがリベンジして勝ち。

1勝1敗の結果で今日は解散となつた。

第36話 猫と銃と練習試合（後書き）

次回はまだ未定？

またもやミカヤさんとのバトル（半分殺し合い）か。
もしくは久しぶりにミウラのターンか。
はたまた教導隊での日常か。

とりあえず上記のどれかか、それ以外の何かを書きたいと思います。
まあ、ぶっちゃけ全部書く予定なんんですけどw

誤字脱字、感想あればお願ひします。

第37話 裂空 vs 抜剣（前書き）

今回はミカラのターン！

どんな回になるかはお楽しみです。w

第37話 裂空 vs 抜剣

「つ・・・」

朝、といつより早朝。

チビ桜 ではなく桜が目を覚ました。

まさかこんな早く起きるつもりじゃなかつた。
といつか表に出るのがすぐ久しふりな気がする。

いろいろ感想が出るがそれは後回し。

今は顔の辺りにある良い感触が何のかを確かめなければならぬ。
いや、これは知つてゐる感触だ。

(ま、またこれか・・・)

予想通り、はやての胸だ。

フェイトにも同じことをやられたことがあるからわかる。

抜け出そうとすればがっちらりとホールドされるに違ひないだらう。

だが、希望は捨ててはいけない。

ほんの少しの望みに期待を寄せ、はやての腕から抜け出そうとする。

スルツ

(あれ? こんなあつせいしてていいのか?)

意外に簡単に抜け出せたことに少し驚く桜。
こんなのでいいのかと思つてしまふ。

まあ、どちらにせよ抜け出せたのだ。
朝食でも作るうと、キッチンへ向かった。

side out

体が小さいせいで料理に苦戦しながらもしつかり作り終えた桜は、
たまには、と思い例の薬を飲む。
元の16歳の姿が本当に少しばかし久しぶりだ。

最近はチビ桜に体をまかせつくりだったからである。

服はザフィーラのを借りている。

本人には了承を得ていて大丈夫だ。

ただちょっとサイズが合わずブカブカだつたりもするが気にしない。

どんどん起きてきた八神家メンバーは珍しく元の姿に戻っている桜
を見て少しばかし目を覚ましていたりもする。
まあ、基本チビ桜しか見ないからしょうがないだろう。

というかチビ桜はまだ寝ている。
いつまで寝る気なのだろうか。

「・・・あ、そうだ。今日、道場に行ってみてもいいですか？」

「ん？ああ、そうだな。いろいろと腕の立つ子がいる。見てやつてくれ

「はい」

「コーヒーを口に運ぶ桜。

その時、苦いとなぜか感じた。

これもチビ桜の影響なのか。

さりげなくミルクと砂糖を入れたのは秘密だ。

(本当に、これでいいのか？俺にはわかんねえよ、アル……)

side out

「おお、結構いるう」

場所は変わつて八神家道場。

意外に人数がいることに結構驚いている。

これを全部教えるのは骨がいるだろ？

まあ、桜は教導隊で同じぐらいの人数を教えたことがあるらしいが。

「ミウラはいるか？」

「あ、はい！今行きます！」

ザフイーラが一人呼んだ。

たくさんいるこの中から一人、ミウラが出てくる。

見慣れない人物の桜を見てちょっと疑問。

というか16歳の姿の桜を見たことがないのでしきりがないと言えばしようがない。そんな頭に疑問符を浮かべて「ミウラに、ザフイーラは耳打ちしで静かに告げる。

「あれは桜の本当の姿だ（ぼそつ」

「ええええええ！？」

「？」

まあ、当然の反応だつた。
つい先日まであんなにちつちやくて、元気はつらつで、女の子みた
いだけど普通の男の子よりもかつこよく見えてたあのチビ桜がだ。
今じゃ身長が高くて、落ち着きがあり、大人っぽくてチビ桜とは別
のかっこよさがある。驚かないのは心がない人間に違ひない。

驚くミウラを見て桜は、ああー、と思いついた。

記憶はチビ桜のものを勝手に引き出させてもらつ。

うん、告白したね。

ちつちやい桜が、だけどな。

とつあえず未だに驚いているミウラに田線を合図わせる。
軽くしゃがんだ形になつ、右手を出した。

「ミウラ・リナルディ……で、良いんだよね？高町桜だ。ちつち
やこもう一人の俺と仲良くなってくれてありがと！」

「うえ、え、ええと、その、よ、よろしく、お、お願ひしますー。」

緊張しながらも握手をするミウラ。

やっぱり全然別人過ぎてどうしていいかわからない。
だがやっぱり思うことは同じだった。

(かつじこー・・・小さこ桜君もかつじこーかい、いつかの桜さん
もかつじこーなあ)

正直な感想だが口に出せず。

それでも思には変わらなかつた。

(お兄ちやん、おはよー。つて、あ、//カワダ一.)

(やつと起あたか)

(変わつて～！～)

(たまには我慢じる。俺も少し久しづつなんだからよ)

なんだかちょっとどうこいタイミングで田を覚ましたチビ桜。
いつも通り、ちょっとした我儘を言つが断られてしまつ。
我慢、ところは我儘な子供には絶対必要なことだ。

でもつて田の前の//ウカは顔がちょっと赤い。
未だにどうこう顔をしてこいかわからぬようだ。

(ザフイーラれん、みんなどのへりこどもか?

(中々に出来ぬ。//ウカは特に出来るな)

「(やつですか) よし、腕に血信があるやつあかかつて」こー。

桜があんなことを口走つてから早1時間。

ミウラを残した道場の子供たちが1人ずつ桜に挑戦。いろいろとアドバイスをもらいながらも、あっさりと負け。そして今は最後に残ったミウラが挑戦しようとしていた。

「ん~、やうだな~。ミウラ、アドバイス使つてやつてみるか?」

「え? い、いいんですか?」

「おう、実力見せてくれや」

「はい~。」

そんなわけで場所を変えて道場外の砂浜。お互にセットアップをして構える。

ミウラは愛機『スター セイバー』を。

桜は久しぶりに使うもともとのアドバイス『ZERO』を使う。さらに桜にはしっかりとリミッターが付けられていた。ぶつちやけてしまえば魔力等いろいろをチビッ子メンバーと同じぐら~にしてあるため、本当に技術面の対決となる。

「ちよっと無沙汰だな。出番少なくて悪い

『ノープログラム』ですよ。気にしていません

「今回あんまり武器は使いたくないから補助だけ頼む」

『了解しました』

ZEROとの少しばかし久しぶりの会話。

やつぱりチビ桜に体を任せると会話がなくなってしまう。
出番がないのも同じ理由だ。

「頑張るよ、スターセイバー。桜さんは一筋縄ではないから特にね」

『はい。頑張りましょう』

一方ミウラは緊張気味。

深呼吸をして、落ちついひとつとしているが少し落ちつかない。

今更だが、高町桜、という名前は聞いたことがあった。

友達が見ていた雑誌に載っていたあの『翼の英雄』

当時は今の自分と同い年で、あんなすごいことができて少ししゃべられた。

それから少しして、八神家道場に入つて憧れていた桜みたいに強くなりたいと思って上を目指し始め、いつか会つてみたいと思つていた。

そしてついに出会うことができたのだ。

今はそれが嬉しくてたまらなくて、しかもこうして手合わせできる。これ以上に嬉しいことはない。

「では・・・始めー」

ザフイーラが合図をする。
先に駆け出したのはミウラ。
桜がどんな戦法を使うかわからない。

チビ桜の場合カウンタータイプだが、人格が違えば戦い方も違う。ならば先手必勝で出方を見るのが一番だ。

「つー？」

ガキイツ！

ミウラが出したのは瞬速の蹴り。

防御に成功した桜だが、それだけではいけない。

「ハンマー・シュラーグー！」

遠距離から速く重い蹴り。

そこから密着しての重撃の連打。

公式試合であれば、相手のライフを一気に削れるミウラの戦法がこれだ。

「痛つう・・・じゅ、すう・・・」

(ミウラ、強いでしょ？後、可愛いでしょ？)

「（やうだな、お前が好きになるのもうなづける）でも、負けでら
んないな

殴り飛ばされた桜は立ち上がる。

まさかこんなに強いなんて思ってもみなかつたのだろう。
久しぶりに本気が出せそうだった。

「ハーフバウ

「あ、はー！」

「悪いが、早々に終わらさせてもらひつ。次の一撃でな」

「……なら僕も、僕の全てをぶつけたいと思ひます」

何かを理解したか、ミウラは桜のやることに気付いた。
自分の最大にして最強、集大成でもある技『抜剣』

脚に付けた鎧が開く。そして魔力をため始めた。

桜もほぼ同じ。

ミウラの様に脚に鎧は付けてないが魔力をため始める。
圧縮した魔力を縮退、さらに小さくしてもっと溜める。

「裂空

」

「拔劍

」

魔力を溜め、技を繰り出す。

そして同時に動いた。

「衝脚！」

「飛燕！－！」

「バキイインツ！」

空中でお互いの脚がぶつかり合つ。
脚を弾き、再び距離をとつた。

「今度は、裂空

」

「一閃必墜」

また動いた。

空中で桜は上から、ミウラは下から撃激する。今度こそ決める。そのつもりで。

「極深撃！！」

「抜剣・星煌刃！！」

バキイイイツ！！！！

一瞬で勝負は決まった。

ミウラを蹴り飛ばした桜の勝ちだ。

急いで翼を開け、ミウラを抱きかかえるようにして後ろに回って支える。

「あ、負けちゃったんだ・・・」

「大丈夫か！？悪い、本気でやりすぎた！」

「いえ、ありがとうございました」

ちょっと弱弱しい声と笑顔でお礼を言つミウラ。

相手をしてくれた。本気を出してくれた。

そして、桜に会えたこと自体に感謝する。

そんな笑顔に桜も笑顔で返した。

「・・・ああ、ひとつでした。ありがとうございました」

第37話 裂空 vs 抜剣（後書き）

なんやかんやでチビ桜の出番がんなし。
意外なことになつて書いた自分でもちょっとびっくりです。w

そしてなんだか桜がミウラを選びそうw
意外にあの子はガンバリ屋さんですからね。
桜も年下だからといつても惚れちゃうかも？

次回は今回の続きから。

そして教導隊での日常が久々に。
どんなことになるかはまだ未定です。

誤字脱字、感想あればお願いします。

第38話 // 桜の想い 懐かしき想に出（漫書セ）

今日は// 桜がつこー・・・!・!

そしてアルとのかよひとの絡みで、桜が懐かしさを思いだします。

第38話 ミウラの想い 懐かしき思い出

「ありがとうございました！」

ミウラとのマジバトルで大人気ないにしろ勝利を収めた桜。お互いに大技をぶつけ合つたせいで、ミウラは氣絶。チビ桜に怒られながらも看病をした。

そして先ほど目が覚めたミウラからの一言。ミウラは、桜に感謝をこめてしつかりとお礼を言つた。だが当の桜本人はよくわかつてない。

「えっと僕、4年前から桜さん憧れてたんですね。それで、今日相手をしてくれて本当にうれしくて。だから、ありがとうございました！」

「……なんつか、こう正面切つて礼言われるの慣れてねえからなんていえばいいかわからねえけど。その、あれだ。俺はそんなにすじくないぞ？」

「いえ、そんなことないです！僕にとっては、物凄く憧れなんです！」

いつものミウラと、今のミウラは何か違つた。おっちょこちよいで口下手。人見知りも激しかつたけれど、桜にあこがれ初め、八神家道場に入つてから変わり始めた。今もあがり症などは治つてないが、それでもいい方。昔、何もできなかつたときに比べたら比じやない。

「だから、僕は小さい桜君も、今の大んな桜さんもどっちも好きです！」

『ー！？』

ミウラは大きな声で、みんなに聞こえるぐらいの声で言った。
それを聞き、この場にいる全員が驚く。

先ほど本氣で手合させをして、再確認したのだ。

僕は、この人が好きだ。

小さくて元氣で、ちょっと我儘な桜君も。
大人で、落ち着きがあつて優しい桜さんも。
どっちも大好きなんだ。

言つてから、恥ずかしくなつた。
でも、イヤじゃない。

目の前で困つてる桜を見ているミウラの眼は本氣だった。

「・・・本氣で俺ともう一人の俺が好きなのか？」

「本氣です！」

正直、桜は困つていた。

上司に告白され、今度は道場の女の子。
チビ桜が好きだから、自分も好き、といつのは成り立たない。
ならどう返すのが正解だろうか。
桜の答えなんて決まつて決まつて決まつてなかつた。

「・・・悪い、考え中じやダメか？」

「大丈夫です。僕、返事待つてますから!」

「(待たれても困るけどなあ・・・) ありがとな」

～～～

突然携帯が鳴り響く。

驚くことなく取り出し、桜は電話に出た。

「はい、もしもし」

『もしもし、お久~』

「今日は一段とノリが軽い」とで

『そう? たぶん久しぶりに桜君と話すからだと思つよ』

電話の相手はマリナ。

噂をすればなんとやらはまさしくこのこと。

すぐに対話を実行してくれるマリナには、違つ意味で敵わないと思つてしまふ。

「で?」

『みんなが今度、時間があるときに来てほしいって

「・・・了解、今から行くわ」

『え? いいの?』

「ああ。久しぶりに表に出れたからな」

『?』

「じゃ、切るぞ」

『あ、ちよ、ま』

』

ブツツ

何の躊躇も迷いもなく電話を切る。

今の状況 ミウラと顔が合わせず、とにかく速く移動したかった。

逃げる、と言つことになるが気にしない。気にしたくない。今は何でもいいから、考える時間がほしかった。出来るなら、誰かに相談を・・・。

「じゃ、俺、教導隊に行つてきます」

「あ、今の電話マコナさん?」

「え? ああ、やつですよ。みんな来てくれーって

「なのほひやんこもよひじくな

「はー。それと、ミウラ」

「は、はー」

「また今度な

「はい。」

side out

「と書かれてます」

現在、教導隊についてマリナの前で正座中。
今までの説明していた。

まあ、ある程度は母親であるなのはが言つておいてくれていたので、
特に時間がかったた、と書かることはなかつた。
だが、それでもマリナは不機嫌。

それはなぜか。理由は先ほどのウラからのお口だ。

「桜君はどうして、次から次へと女の子を落としきりのかな
」

「わ、わかりません」

「まあ、名前もそういうなんだけ?でも、年下の1~2歳の女の子
にまで手を出しちゃうとは……」

「とりあえず行つていですか?ドアの向こう側で数人ほど覗き見
をしながら待つてゐるんで」

「……わかりました。ではもう行つてくれださー

ドアの方をちらりと見る。

リナ、瑠璃、アウル、リーフ。

二代目FWメンバーが覗き見していた。

卷之三

このまま何かやつたら、むしろ何かされかねなくて怖い。

「さて、久しぶりに模擬戦でもやるか」

「 」

sideout

(前のアルと話したいな)

今では瑠璃の融合機となつたアルを見てふと思つた。

アルは、融合しても魔力が上がりず、補助しかできない融合機。そんな、当初は『欠陥機』と呼ばれていた最高の魔道書の管制人格に、桜は一度も不満を持たず最後まで一緒に戦った。

笑つたり、泣いたり。

いがみ合つて喧嘩したりで、今じゃ懐かしい。

「マスター？」

「ん?なんだ?」

契約を解除し、魔道書ではなく本体の主が瑠璃になつた今でも、二

代目のアルは桜をマスターと呼んでいた。

最初は、マスターは瑠璃だ、と言ったのに聞かず、桜をマスターと呼び続けてきたので、もう諦めてこの呼び方を許している。そもそも、今のアルが桜を名前で呼ぶのはあまりしつくりしない。そのせいで瑠璃本人からもマスターという呼び方を了承してほしいと言われたほどだ。

「なんだかマスター、寂しそう

「さうか？ 別に寂しいとかそういうのはないぞ？」

（ウソ付いてる）

（うつせ。誰にも心配かけたくないんだよ）

「なら、私がずっとそばにいる。マスターが寂しくなによ」

そう言いながらアルは桜の肩に腰を下ろす。

顔を頬にこすりつけてきて、むしろ甘えるよつた様子だ。

やはり懐かしい。

よくではないが、アルは寂しい時などにこんな風に寄り添つてきた。これのせいで、さらに昔のアルと話したくなる。

「あ、そうだ。桜さーん」

「どうした、瑠璃

「ちょうど、アルのことだ」

何
・
・
・
？

第38話 // わの想こ 懐かしき思ひ出（後書き）

次回は瑠璃と桜の話から。
アルにちょっとした異変が？

誤字脱字、感想あればお願ひします。

第39話 涙

「ブラックボックス?」

「えっと・・・その、先日来てくれたデバイスマスターのシャーリーさんに診てもらつたんです。それで・・・」

瑠璃から聞いたアルの異変。

頭の中に、小さなブラックボックスがあるらしい。

リインやアギトで言ひ記憶の部分。

本当に小さく、忘れていることの塊なんじやないか、と言われたが、心配で今日来てくれた桜に話したのだ。

「記憶・・・か」

「何か思い当たることでも?」

記憶、と言ひキーワードに考え、黙り込む桜。
されてこないとの塊、と言うのにも引っかかった。

思ひ当たること、と言わると物凄くある。
と言ひか思い当たるもののがこれしかない。

(最初の記憶かな?)

(かもな)

そう、初代の記憶だ。

ハ神家の調べによると、空っぽではなかつたらしい。

リインは最初は何もないまつさらで空っぽな状態だつたらしいが、アルはほとんど空っぽ。つまり、何かが残っていたのだ。

「桜さん？」

「ん、あ、『ごめん。えつと、ブラックボックスだよな

「疲れてるんですか？」

「大丈夫だ」

「・・・不安です」

意外に鋭い瑠璃。

疲れている、と言つのはあながち間違いではない。
今日はいろいろありすぎて大変だったのだ。

ミウラからの告白。

少し久しぶりの教導。

二代目アルの異変。

一日でこんなに疲れるものなのか。
ビックリするぐらい体力が落ちたと思つ。

「なあ、瑠璃。アルを少しの間返してもらつてもいいか？」

「え？ あ、大丈夫ですよ。アルも桜さんと居る方がよさそうですし

そう言いながら向こう側でみんなと話しているアルを見る。

少し初代と違い、違和感があるがほとんど変わりなし。こちらの視線に気づいたか、手を振つてくる。

「もしかしたら、返せなくなるかもな」

「構いません。それがアルのためならなおさらです」

「瑠璃は優しいな。俺よりもいい」

ポンツと瑠璃の頭の上に手を置く。

そしてそのまま撫でた。髪をくしゃくしゃしたりもする。

なんだか瑠璃は嬉しそうで、その顔を見た桜もうよつと笑顔だ。

「さて、続きをやるか！」

「はーーー！」

side out

時間が経ち夕方。

仕事も終わり、後は家に帰宅するだけとなつた。

「え？ また・・・？」

「どういう意味、それ？」

「いや、だって母さん俺と2人っきりだと何しでかすかわからんないからさ。あ、でも今夜はアルがいる。よかつた～」

桜の言葉通り、今日はなのはと2人。

家に帰つてもヴィヴィオとシャナは特訓＆合宿。フェイントはいつも通り仕事の出張でいない。

そこに久しぶりにアルが入ることによつて桜の救世主となる。まさか一代目アルにここまで感謝する口が来るとは。

桜本人は思つてもみなかつただろつ。

「ま、2人が話しやすかつたけど」

「？」

「何でもない。そ、帰ろ」

「あ、うん」

頭に疑問符を浮かべていたなのはを催促して帰宅準備。

桜自身の頭の上でぐつたりなアルを起こさないように気をつけながら、珍しくなのはの車に乗り込む。バイクの免許は持つても車の免許はない。

と言つかまだ16歳なので取るにとれなかつた。

「今日、母さんの料理食べたいな」

桜の意外な発言。

いつもなら「俺が作るよ」などと言つてゐるのにだ。珍しそうな事を言つので、なのはは少し考え込んでしまつ。

(ど、どうしたのかな? 最近私の料理食べてないから? あ、いや、

それならまだ大丈夫だよね。ならなんで元気ないんだひつ。え、でも、本当になんで？突然すぎてわかんないよお～（

結果、なのはの中でも美味しい料理を作ろうとなつた。

元気がないのならば、どうにかして元気になつてもらえばいい。それでもだめなら小さいころの様に、話を聞いてあげればいい。

だが、改めて考えると本当に桜らしくない。

元気がない、といあいまいな表現だがそれが一番わかりやすいだろう。

ここまで元気がないのは見たことがなかつた。

（でも、なんで桜はそんなに悲しそうな顔をしてるの・・・？）

side out

「ふう、ようやく寝てくれた」

夜。
帰宅してから食事の準備。

アルがなのはの手伝いをするという珍しいことをしている間、桜は特になにもしていない。強いて言えば、ぼーっとするか、なんとか何も書かれていらない魔道書をペラペラとめくつているぐらいいだつた。

さらに、夕食を食べている時になんかぽろぽろと涙を流した。本人は、目にゴミが入っただけ、と言っていたがその後もずっと涙を、ちょっとだけだがこぼしながら食べ続けた。

先ほほどアルが眠りに就いたようで、一息つく。 よつやく、と言つことはなのほど2人きりになるのを待つていたようだ。

「『めんね、なんかいつもの俺らしくなくてさ

「あ・・・」

「ただ、母さんと2人で話したくてね。 小さい俺ももう寝たから、 ちよつといこひかな

静かな声で、表情はやはりかなしそうだ。

どことなく遠くを見つめるような眼は、なのはを優しく見つめる。 なのはの隣で、桜は話し始めた。

「俺、今すぐ不安なんだ。 小さい俺と今の俺。 どちらも両立できる自信なくてさ。 そのくせ馬鹿だからいろんな人に好かれる。 もう、 限界だし無理なんだよ」

一瞬、なのはは桜が何を言つているのかよくわからなかつた。

だがすぐに理解する。 今、桜は極限の状態なんだ。

なのはが理解してくれている、と言つのを少し話を止めて確認し、 押さえられなくなつた涙を流しながら桜はさうに続けた。

教導隊でみんなに教え切りたい。

だがそうするとチビ桜をほつとくことになる。

もう一人の自分を放つておくことはできないから、教導隊に行く時間削つてチビ桜に体を預けていく。

ヴィヴィオやシャナ、チビッ子たちともつと過ごしたい。

チビ桜の中からじやなく、表に出て接したい。
それでも、やはりチビ桜がいるので難しくなる。

他にも色々ある。

そこで一翻身おほしに顔を見て語りたまへ

頭の中で、言葉だけを交すんじゃなく、顔を、眼を見て話したが、

だが無理なのだ。

チビ桜が悪いわけじゃない!

だけと
チビ様がいるから何もできない状態だった

「俺、どうしたらいいの？もう、いつそのこと小さい俺に、今の俺の全てを託せばいいのかな・・・？」

「桜」

「わかんないんだよ！もう、何もかも。全部が・・・！！前のアルはもういない！すごく不安で不安でたまらないんだ！」

今の桜は、出会ったころの様に涙を流していた。

何もわからず、それをどうすればいいかもわからない。
誰も頼れる人がいなくて、不安しかない。

だからなのはは泣いている桜を抱き寄せた。

「不安なら、私やみんながついてるよ。だから、私たちを頼って。

ね
?」

「・・・・「う、うああああああ・・・・!」

「泣きたくなら、泣くのが一番だよ」

「う

静かに泣こうとする桜。

なのはの言葉で、あることを思い出した。

『泣きたいときは泣いてもええ』

『泣きたかったら泣いていいよ』

はやてとフロイトに言われたことがある言葉。

フロイトの言葉は六課時代、アルを失ったときに。

はやての言葉はチビ桜が泣いている時に言われた言葉だ。

そして今、なのはにも言われた。

あんなことを言われ、同じことを思い出したせいで押さえていた涙
が簡単に溢れ出した。

夜だが、大きな声で。

だがそれでも近所迷惑じゃない程度に。
子供の様に桜は泣いたのだった。

第39話 涙（後書き）

今回は桜が泣く回でしたね。

チビ桜は例によつて例が「ごとく出番は少ないです。

次回もまだ続くぞ桜のターン。

アルを再びシャーリーさんに所に連れていくために本局へ向かいます。

誤字脱字、感想あればお願ひします。

第40話 気持ちのない料理

「じゃ、ちょっと本局にいるシャーリーさんとこ行つてくれ」

「うん、行つてらつしゃい」

翌日。

肩にアルを乗せた桜は家を出て、デバイスマスターでありフェイトの補佐官をやつていたりするシャリオ・フィニーーノことシャーリーのところへ向かう。

目的はもちろんアルのこと。
ブラックボックスについてだ。

どうしてこうなったか。

それは昨晩のことだった。

『今の俺の人生全てを、小さい俺に託す』

桜のこの一言から始まった。

いや、それよりも早く始まっていたのかもしれない。

だが桜も思い残すことがたくさんある。

数えれば手足の指だけじゃ数えきれないだろう。

そこで一つだけに絞り込んだ。

『コミッター付きでもいい。本気の本気、全力全開で闘いたい』

最後の願いと言つてもよい。

だが、桜の本当のデバイスはないといつてもよかつた。

そう。正常起動した死靈秘宝とその管制人格である初代のアルだ。今の一一代目アルは桜のデバイスと言えばそうだが、違うと言えば違う。

正直言つて初代を復活させることなんて叶わない。

二代目がいる時点でそれはもう無理だ。だが、ブラックボックスの話を聞いて全てががらりと変わる。

もしかしたら、前のアルに戻ってくれるかもしない。
その可能性は意外と高かった。

シャーリーいわく、そのブラックボックスは忘れていた記憶の塊だ
そうだ。

忘れていた、と言つことは思いだせること。
なにかきっかけがあれば思いだすかもしない、と言つことだ。

「えっと、デバイスルームってどこだったかなあ」

場所と話を変えて本局到着。

一応目的の場所にシャーリーがいるかどうか確認をしたい。
まあ、いなかつたらいいなかつたで探すのだが。
もしかしたらフェイトと一緒にいて、今はいないと言うパターンも
あり得るかもしれないが、出来るだけそのことは頭からはずす。
滅多に本局に来なかつたのでどこがどこだか少しあやふや。
だんだんと思いだしてきたのか、周りをキヨロキヨロして確認はし
なくなつた。

ほどなくしてデバイスルームの前まで着き、ドアをノックする。

『はーい、どうぞー』

曇り声だが声が聞こえてくる。

女性の声なのでもしかしたらシャーリーかもしれない。

「失礼します」

「あ、桜君久しぶり~」

「シャーリーさん。よかつた、いてくれて。今日はちょっと用事で」

デバイスルームにいたのは眼鏡をかけた女性。

この人物こそがシャリオ・フィニーの人だ。

ちなみに自称『メカニックデザイナー』でデバイスマスター。

早速桜は今回来た理由を説明。

さりげなく肩に乗っているアルを指さし、シャーリーもどうこうとか納得してくれた。

「う~ん、どうにも言えないなあ」

アルの精密検査も兼ねていろいろチェック中。

頭の中にある小さなブラックボックスを開けられないか、という桜の頼みは中々に難しいものだった。

今のアルの状況は至つて全開。

魔力上昇はなし。補助はいつでも。召喚魔法の手伝いもばっちりだが、ブラックボックスを無理やり開ける、となると危険だった。

もしかしたら機能に異常を致すかもしれない。動かなくなる可能性だってある。記憶の塊、だといつてももしかし

たら違うものでバグの塊かもしれない、などなど。

たくさんの危険を冒してまで開けるのか、と言われば『NO』と答える。

だが、聞いてほしい、と言うのもまた本心だ。

「でも、どうして急に？」

「・・・このことは、他言無用ですよ。母さんだけにしか話してないんですから」

「大丈夫。口は堅い方だから」

「人の過去を勝手に話したことあるの？」

「昔のことは気にしないの」

「はあ・・・調子のいい人だ」

side out

「さて、帰るか」

「了解！」

一時間程で用事を終えた桜とアルは、特に残る用事も見当たらないので帰ることにした。ちなみに帰宅先は八神家。

用事が済んだので表に出ている理由もない。

チビ桜に体を預ける、となると帰宅先は決まってしまうのだ。

なんでアルがいるんだ、と聞かれると思つが氣にしない。
ちよつと返してもらつた、で済むはずだりつ。

「食材買つてから帰るかな」

「何作るの?」

「アルは何食べたい?」

「シチュー!」

「よし。じゃ、シチュー作るか

「やつた!」

もしかしたら最後の料理になるかもしねりない。

一瞬そんなことを考えたがやめた。

いつ最後になるかわからないのに、そんなことを考えていても意味がない。

だが意外に早くそれが来るかもしねりないと呴つのも事実だった。

『インター・ミドルチャンピオンシップ』

世界中の魔導師が集う大会。

勝ち進めば、上位選手と必ず当る。

アルはユニゾンデバイスだからダメなのでは?と思われるが、しっかりと機能説明をし、補助のためだけだと言えば納得するはずと考へている。(桜の考え)

だがまあ、ダメと言わればそれまで。
インター＝ドルが終わってから相手を選ぶことのあるひじい。

「ま、その時はその時だ」

「？」

「なんでもないよ」

side out

同日夜。

八神家で夕食の支度を終え、疲れて桜は眠ってしまっていた。
アルも桜の隣でおねむだ。

「ただいまー・・・つて桜?」

家にいたのはアギトとフイーラ。

桜とアギトとアルが夕食の支度をしていて、それが終わつた後にア
ギトはどこかへ行つてしまい、ザフイーラはいつも通り道場で子供
たちに教えていた。

そして先ほどはやでが帰宅。

リビングのソファーで顔を伏せて寝ている桜を見つけ、寝顔をのぞ
き込んでいた。

「スー、スー」

「寝顔はちっちゃい桜に負けないぐらい可愛いなあ」

はやての桜の寝顔に対する感想。

なんだか久しぶりにみるのでつい声に出でてしまったよつだ。

さすがにずっと見ているのも疲れてくるので、寝ている桜の代わりに夕食の支度をしようと桜から離れてキッチンへ入る。

だがそこにはすでに鍋が置いてあった。

「？ これ、シチュー？」

鍋の中身は作りたてのシチュー。

まだ温かいので温め直す必要はなかつた。

気になつたはやはてはスプーンで一口いたただく。

「・・・なんか、普通やな」

桜の料理はいつも想像以上においしかつた。

なのに今回のこのシチューは、本当に普通と言える味。

桜が作つたとは少し思えなかつた。

人には得手不得手があると思うが、料理に関して桜に無理なものはなかつた。

なのにどうしてか、この料理は違つた。

まるで作つた本人の気持ちが入つていらないような気がしてならない。

「桜、泣いとるんか・・・？」

ふと何かを思い、顔をリビングへ向ける。

そこにはぽろぽろと涙をこぼしながら眠つていた桜が見えた。

第40話 気持ちのない料理（後書き）

次回は特になしで未定。

誤字脱字、感想あればお願ひします。

第41話 選考会開始！（前書き）

予定よりも早めにインター・ミドル突入！
その場限りのモブキャラつて可愛そ・・・。

第41話 選考会開始！

月日は経ち、ついにインター＝ドール選考会当日。
チビ桜はもうろん参加ジムをハ神家道場にして出場
きや、まさかのフリーで出場。名義も『ハ神』ではなく『高町』だ。
これは全部桜に言われたからだ。

やるなら楽しめ、とのこと。

チビ桜いわく、こうしたら面白いんじゃないか、らしい。

ちなみに予選ブロックは6組。

『雷帝』ヴィークトリア・ダーグリュンがいるブロックだ。

他のメンバーは順に

- | | |
|-------------|-----|
| ・アインハルト、コロナ | 1組 |
| ・ヴィヴィオ、ミウラ | 4組 |
| ・リオ | 5組 |
| ・シャンテ | 6組 |
| ・シャナ | 8組 |
| ・ルーテシア | 10組 |

となっている。

チームナカジマのメンバーでは唯一仲間同士での対戦がある1組は、
一昨年の優勝者であるジークリンデ・エレニアがいた。

勝ち進めば4回戦で当たることになつていてる。

「うわあ、何これ。すごい人」

(まあ、世界中から集まつてきてるからな)

そして「」、「」、「」地区選考会第一会場内では、たくさんの選手と観客が集まる中、選考会が行われる。参加セレモニーがもうすぐ始まるといつひのこ、チビ桜は暢気なものだ。

そしてほどなくして参加セレモニー。

選手全員が綺麗に整列する。

『それでは、昨年度都市本戦ベスト10選手。エルス・タスミン選手に、第1会場に集まつた選手に激励のあいさつをお願いしたいと思います』

呼ばれた選手が、前に出る。

眼鏡をかけたジャージ姿の少女。

彼女が前大会10位の選手エルス・タスミンだ。

「エルス・タスミンです。年に一度のインター＝ドル。みなさん、練習の成果を十分に出して、全力で試合に望んでいきましょう。私もがんばります！みなさんも、全力で頑張りましょう！えいえい！」

『おー——————』

会場の選手全員の声が一つになる。

腕を上げ、全員やる気は十分。気合も十分。

そんな時だった。

『ありがとうございました。では次に、時空管理局員の高町桜選手、お願ひします』

『え？』

「？」

何というアドリブ。

チビ桜はおろか、桜ですかやることなんて聞いてない。

大会側が桜の名前を見つけ、やつてもらおうと勝手に考えたのだ。

さらには会場全体にも疑問符が浮かぶ。

高町桜、といふ名前を聞けば真っ先に思いつくのは『翼の英雄』の異名。

しかも管理局員が参加、と言いつことに驚いてるはずだ。

「え、ええと……」

(代わる。) うつのは俺の方が慣れている。ついでに適当に誤魔化すから)

(う、うん)

素早く人格交代。

全員がきょろきょろする中、小さい姿の桜は前に出た。唯一動く人物に視線が行くのは当然。

まさかこんなちつちつやい子供が桜とは思つまい。

マイクのところまで着くと、大会側の人気が注意してきた。だが本人なので、ちょっとした事を事情説明(嘘混じり)納得してくれたか、桜はマイクの前に立つ。

「えっと、高町桜です。何か言つ前にみなさんに言つておきまわ

「」で先ほども言つた嘘事情。

選手全員がつばを飲んで耳をすませた。

「今の僕、記憶喪失なんです。体が小さいのは、なんでかわかりません。ホントですよー!」

嘘を大暴露。

見事に騙された係員はきっと間違つてはいなはずだ。
こんな小さい子が真剣に言つているんだ。嘘なはずがない。
そう思つてしまつたからだ。

さらには会場の選手も騙されている。

理由はたぶん同じ。みんな純粋なのだろう。

「それと、何か一言とのことなので、早速一言。・・・全員、本気
の中の本気、全力全開で頑張りましょう!」

side out

参加セレモニーとアドリブの一言が終わり、選考試合開始。
ゼッケンを付け、軽いスパーをすればいいらしい。

ちなみにチビ桜のゼッケンの番号は3013。

番号がシャンテと近いため、お互いに勝ち進めれば2回戦で当たる。
こう知り合い同士で戦う、となると緊張感が少しない。

「それにしても物凄い誤魔化し方したな」

「…ちの方が都合いいからだつてさ」

選考試合を待つチビ桜。

一緒にいるザフフィーラは、先ほどの誤魔化しに呆れていた。

「そりそろ呼ばれるだらうから、アップしておけよ」

「りょーかい」

軽く返事をし、早速ストレッチ。

向こうにミウラがいるが、とりあえずは緊張してなさそう。人見知りなため、がちがちに緊張するかと思ったが違つて何より。ノーヴェとヴィヴィオが挨拶に来て、話に花を咲かせてもいた。

「マスター、頑張りましようね！」

「うん。でも、今日はアルの出番はないかも。お兄ちゃんは、保険つて言つてたし」

「あう・・・」

それはさておき、アルが大会で使用出来ることが分かつた。

銃型、籠手型、魔道書型の3つを登録し、アルは魔道書の管制人格と言つことになつてている。大会側には、ユニゾンしても魔力が上がりない、と説明したらOKしてくれた。

それ以外にも、デバイスの2つ以上の使用を認めてくれたことにも感謝しなければならない。他の選手はたいてい1つなのに、チビ桜

だけは3つ。

普通ならダメと言われるかもしかつた。

『ゼッケン367・554の選手、シリングに向かってください』

「367つてい川の番号。応援行かないとな」

「了解です！」

ミカラの番号を覚えていたチビ桜は、アルを肩に乗せてミカラのところへ向かつた。

呼ばれた本人は先ほどの落つけた雰囲気から一変、緊張し始めた。

そこまであたふたする、と訳でもないのだががちがち過ぎるのでないか。

まあ、それがミカラのかもしだれ。

そろそろ続けて、ヴィヴィオも呼ばれた。

早速お出ましなので、気合も十分。

テンションも結構高めど、コントローションは悪くない。

「ミカラ、頑張つてね」

「う、うんー」

肩をポンポンッと叩き、軽く落ちついてもらひ。

それでもやつぱり緊張してこむミカラを見ると、上がり症はまだだ治らなそうだ。

『それではシリング・エリングの選考試合を始めます』

準備が整い、ヴィヴィオとミカラの選考試合開始。

ヴィヴィオの相手は武器をもつていて、身長が少し高め。

セコンドの属性は、怪我をさせなことによつことに注意をしてくる。

対してミカラの相手は素手の格闘型で、やはり身長差がある。
さらにはがちがちに緊張したミカラを見て勝てると確信していく、
一撃で仕留める気だ。

『ヤコング・アウト。シ(エ)ロング、スタンバイ・セット。レディ・
マーク。』

side out

『アーリング、ゼッケン3013 VS ゼッケン2936』

チビッ子メンバーが全員終わり、少ししてから。
よつやくチビ桜の出番となつた。

相手選手は長身で槍型の武器を持
チビ桜との身長は差まさしく雲泥の差。
はつきり言えば見上げないと顔が見れないほどだ。

「うわっ、ちひちゃ。これが翼の英雄……？」

「相手に失礼の無いよつにな」

「了解」

参加セレモニーで見たようだがやはり信じられない。
こんな小さいのが桜だなんて思はずもなく。だがそれでも勝つ氣
でいるようだ。

「・・・」

「油断だけはするなよ」

「・・・（口クリ）

「頑張れマスター！」

セコンドのザフィーラとアルが声をかける。
チビ桜は集中しているのか、返事はない。
うなずき返してはいるが、眼は相手選手を見ている。

選考会では武器は使わない、素手だけ。
小さく深呼吸し、拳を握りしめた。

『セコンドアウェト。アリング、スタンバイ・セット。レディ・ゴー
！』

カーンンッ！

甲高い鐘の音がする。

それと同時に、相手選手は突っ込んできた。

「はああ！」

槍を構え、チビ桜をとらえようとして迫る。

対してチビ桜は構えたまま一向に動かない。
それどころか田までつぶつていた。

当るか当らないか。

そんなギリギリのタイミングまで引き寄せ、チビ桜は姿を消す。

「つー？」

「星流 裂空・衝脚！..」

ド「オッ！」

渾身の一撃。

魔力を纏つた最高の蹴りが、相手選手の腹をとらえた。

魔力を圧縮し、脚に集中させる。

そしてそのまま勢いよくぶつけるだけの単純な技。

単純だからこそ、威力も高かった。

「ふうっ・・・」

『Aリング、選考終了。勝者、ゼッケン301-3』

第41話 選考会開始！（後書き）

次回は・・・どうしよう。

今のところは未定としか言えません。

誤字脱字、感想あればお願ひします。

第42話 トップファイター（前書き）

今回は例のあの3人が登場！
うち1人とは知り合いです。

第42話 トップファイター

チームナカジマメンバーや、他の多くの参加選手の選考試合が終了して行つた。チビ桜の選考結果は『スーパー・ノービスクラス』からのスタート。

相手選手を10秒足らずの一撃でKOしたのでまあ、当然の結果だ。チームナカジマの5人やミウラ、情報によると第2会場にいるルーテシアにシャンテと言つたメンバーも無事スーパー・ノービス入りを果たしたそうだ。

初参加選手としては最良のスタートとも言つていいだらう。

現在チビ桜は、内側にいる桜と代わつて休憩中。

集中しすぎて疲れた、と言つていたが、これしきで疲れてしまうと次の試合ではもたないんじゃないかと思つてしまつ。

だがやるときはやる子だと桜は知つていたため何も言わなかつた。

「つ」

今は観客席の方に上がり観戦。

注目するような強い選手はいないかと試合の方をみていたが、観客席にいる1人の人物に気が付いてしまつた。

「ジークツ」

「？」

一昨年の前の大会。

偽名を使って参加した時に知り合つた1人の選手。名をジークリング・エレミア。略称はジーク。

一昨年の世界大会優勝者だ。

そしてその隣にいるのが予選6組のシード。
『雷帝』ヴィークトリア・ダーグリュンだ。

「えっと・・・」

「一昨年前は『シエル』って偽名だったけど、今は桜」

「桜君の身長、前の人なんや」

「ジークを覚えていた事にツツ」「!!なし?」

「そう言えば記憶喪失やつたね。嘘なんやろ、あれ

お互いが顔見知りなため軽い会話から始まる。
嘘だと見抜かれていた事に対して桜は「そそ」と、これまで軽く返
した。

ジークの隣にいるヴィークトリア（以降ヴィクター）は何が何だか
わからない様子。桜とは戦つたことがないのでしょうがない。
すぐさまジークから紹介をされてようやく納得した。

ちなみにジークは桜の大人の姿も知っている。
まあ、会った回数は指で数える程度しかないのだが、結構衝撃だつ
たのでジークはしっかりと覚えていた。

「今回はもう一人の僕が相手をするよ。ちなみに言つておくけどす
つ』べ無邪気だから気を付けてね」

「ウチは予選で当たらへんから、当たるとしたら本戦でやな。ヴィクターとなら勝ち進めば当たると思うけど」「

「うん、その時”だけは”僕がやるつもりだよ。最後の相手としてね（ボソッ」

「今、なんて？」

「ううん、なんでも。あ、もし当たるときは正々堂々と

「ええ。その時は、お互いい良い戦いをしましょ

握手を交わす2人。

勝ち進めば予選3回戦で当たる予定。

もちろん桜（チビ桜）も当たるまで負けるつもりはないし、ヴィクトーも当たつたらねじ伏せるつもりだ。

その後3人で軽く話をしていると、向こうから声が聞こえてきた。女性の声で、しかも複数人。気になった桜は顔を向けた。

「お？」

そこには赤毛のポニー・テールをした少女。

さらにその後ろにマスクをした子、サングラスをした子、その2人よりも少し背が高い子の3人の女の子がいた。すぐによろこびに気がついた赤毛の少女は、座っている3人を見る。

「ん？ 1人見ねえ顔だけど、誰だお前」

「あ、これは失礼。僕は时空管理局航空武装隊戦技教導官高町桜一

等空尉と申します。現在は一部記憶喪失で、今回は初参加です

「え、ええっ？」

赤毛の少女『砲撃番長』ハリー・トライベッカは、一瞬で出てきた言葉にどう反応したらいいか困ってしまった。

まあ、一度にこんなたくさん言葉を並べられれば誰だつて困ります。桜はわざとらしく頭の上に「？」を浮かべ、ハリーを見ていた。

「リーダー、この子、翼の英雄ツスよ」

「自分で高町 桜って言つてたじやないですか」

後ろからぼそつと助言（？）

それを聞いたハリーは、思い出したかのように声を出した。

「あ～～・・・って、ええ！？」、「こんなちつこのがたしより一個上で管理局員！？」

「リーダー、失礼ツスよ」

「気にしなくていいですよ。一部記憶喪失ですから」

「それ、あんま関係ないんじゃ・・・」

軽くツツツミを入れられるがスルー。

なんだかこれが楽しくなつてきいていた桜だった。

そして今度は横でヴィクターとハリーがいがみ合いを開始。それを見ていても楽しくなつてきた桜は、止めようとするジークに

加勢はせず笑顔で見守ることに。

だがさすがに「さくなつてきたので止めようとした時だつた。

「「...?」

「なんですか。都市本戦常連の上位選手^{トッププランカー}がリング外で喧嘩ですか？」

いがみ合いをしていた2人にバインドがかけられた。
すぐに行つた張本人のエルスが声をかけた。

「ジーク、顔隠して」

「え？ なんで？」

「いいから」

インター＝ミドルがガラの悪い子ばかりの大会だと思われたらどうするんです！と、2人に思いつき注意しているエルス。
参加選手の家族が会場内にいる中、そういう風に考えるのは普通だが、リング外で魔法を使うこともどうかと思う。
それを櫻が言うと、こちらに気づいて顔を見られてしまった。
主にジークの。

「ああ！ チャンピオンに翼の英雄！？」

案の定大きな声で叫ばれてしまった。

ジークはフードをかぶろうとしていたのを見られ、急いで手に持つていたジャンクフード（ポップコーン）の入った器で顔を隠すが、ほとんど意味がない。

さらに下のリングの方にいた選手たちも見上げている。

こんな注目の的になるのをリング外では慣れてないジークにとっては大変だった。

見上げる中にはチームナカジマのメンバーもいた。

ジークはその中にいる碧銀の少女AINハルトを見つける。勝ち進めば4回戦で当たるであろう彼女にサインを送った。

「騒ぎになるのはめんどくせえし、今回はおとなしく退散すつか」

「まったく、貴女と会つて、どうしていつも毎回グダグダになるのかしぃ」

ブチブチとなんの苦もなくバインドをちぎるハリーに、パキンッと簡単にバインドを碎くヴィクトー。

それをみたエルスは驚くほかなかつた。自信のあつたバインドをこうも簡単に壊されでは落ち込むか、逆にやる気が出るかのどっちかだろつ。もちろんエルスは後者の方で、気合を入れ直していた。

「じゃ、僕もそろそろ退散しようかな

「あ、うん。また今度」

「うふ。また今度ね」

第42話 トップファイター（後書き）

次回から予選、本格的に開始！
誰を一番最初に書くかは不明。

もしかしたらランダム（鉛筆ころがし）で決めるかもです。w

誤字脱字、感想あればお願ひします。

第43話 スーパーノーヒス（前書き）

今回はチビ桜とシャナの戦闘シーンのみ！
どうかといつもシャナメインです。

第43話 スーパーノービス

インター ミドル地区予選。

現在数日間にわたり、スーパー ノービス戦を行つてゐる。

チームナカジマの4人（シャナ以外）、聖王教会のシャンテ、八神家道場のミウラ、そしてフリーで参加しているルーテシアの試合はすでに終了済み。

結果は全員勝利で、無事エリートクラスへの出場を果たした。

そして今日、チビ桜の試合が始まるうとしていた。
本人はミウラほどではないが、結構緊張している。

『本日のSNCクラス第25回目の試合は、あの翼の英雄、初参加の高町桜選手と、同じく初参加。新人のジャック・ライト選手です』

相手選手は身長的に15、6歳くらいだろうか。

自慢の大剣型デバイスを素振りでぶんぶんと振り回している辺り気合十分と見れる。

対してチビ桜は緊張氣味。

試合が始まれば大丈夫だろうが、今はダメダメ。

表には出してないが後ろで見ているハ神家メンバーにはバレバレだつた。

「落ちつけ。まずは深呼吸して、それから相手を見ろ

「う、うん」

すー、はー。

軽く深呼吸で大分楽（？）になつた、いくらか緊張はほゞけたみたいだ。

実況の説明も終わり、ようやく試合開始の準備が完了。高い鐘の音と共に、試合開始だ。

高町 桜

LIFE 12000

ジャック・ライト

LIFE 12000

たんつ、たんつと、軽いステップでリングに入る。
お互い先にしかけず、静かに相手の動きをうかがつた。
そして先に動いたのはチビ桜だ。

ガガガガガガツツ！！！

牽制、にしては大量に魔力弾を乱射。
しつかりとガードされるが、それが狙いだった。

「なつ！？消え

」

「はあ！…」

バキイ！

一番最初のヒットは、全力ではないチビ桜のアッパーだった。

ジャック・ライト

LIFE12000-800=11200

「くっ、油断した！」

威力は少なめなため、ダメージはさほどない。
すぐさま体制を立て直す相手選手は、再び剣を構えた。
そしてそのまま走りだし、勢いよく振り下ろす。

ガキインツ！

直撃したかに思えたその攻撃だが、当たった音が違つ。
まるで剣と剣がぶつかるような音だ。

「いい！？マジかよ！」

渾身の力を込めて振り下ろしたはずの攻撃は止められていた。
先ほどまで持っていた銃はしまわれ、その手にあつたのは魔力刀の
サーベル2本。受け止めているチビ桜の顔はなぜか笑顔だった。

「星流……ナイト・オブ・トゥーンード・トゥーガン剣聖銃神騎行曲改」

受け止めている体制から、無理やりスマーソルトで蹴りあげる。
防ぐことを出来なかつた相手は、そのまま宙を舞う。

ジャック・ライト

LIFE11200-1200=10000

クラッシュユニコーン

軽度脳震盪

「まだまだー！」

今度はイタクア 持ち替え、魔法陣を展開したのち砲撃を放つ。
空中では何もできない相手は、見事直撃。

氷結変換の入った砲撃の威力は、文字通り強力だった。

「ラストオッ！？」

相手に休ませるひまもなく、チビ桜は飛んだ。

右腕に持っていたサーベルに魔力を込め、切れ味を高める。
そしてそのまま一撃をガラ空きの腹部にたたき込んだ。

「がはつ！？」

ジャック・ライト

LIFFE1000 - 5470 = 4530

クラッシュユニコーン

あばら骨2本骨折

体温急速低下

『リングアウト・ダウン！ 桜選手、ニュートラルコーナーへ！ ダウンカウント10！ 9！ 8！ 7！ 6！ 5！ 4！ 3！ 2！ 1！』

あつという間にカウントは0に。

相手選手は立ち上がりつては来ず、ダウンで負けだ。

つまり、チビ桜のダウン勝利と言つことになる。

『試合終了！－勝者、高町 桜選手！－強烈な技で相手選手をダウ
ンさせました！－』

「イエイ－ブイブイッ！－」

side out

チビ桜が大勝利を収めてすぐ。

今度はチームナカジマのシャナの番だ。

先ほど試合が始まつたばかり。

FHをソードモードにし、構えて待つ。
珍しく普段は持たない鞘を持つて。

「はああ！－」

相手選手は素手で格闘型。
ヴィヴィオやリオとの組み手を何度もやつたシャナにとつては、や
りやすい相手かもしねりない。

突っ込んでくる相手選手の勢いに対し、シャナは静かだ。
ゆっくりと居合の構えをとり、魔力を刃に集める。
そして間合いに入つた瞬間だった。

・・・チンッ

一瞬一閃。

向かつてくる相手選手に対し、一瞬で切りぬいた。

「拔刀居合、炎刀」

シオ・ジムト

LIFE12000-3540=8460

クラッシュユエミュレート

腹部軽度火傷

格闘型に対し、この技は相手が拳を繰り出した時。

攻撃のときは誰もが隙ができるもの。この技は後だしなのだ。
じゃんけんでも後だしをすれば必ず勝てる。

それと同じで、この技も必ず当たる。

先手必勝、という言葉もあるがこれは後手必勝と言えるだろう。

だが相手もまだ終わっていない。

ダウンカウントを取られたが、すぐに立ち上がりてくる。
再び拳を構え、走り出した。

「FH、フォルムナックル」

『 a.i.i r i t h t .』

刀の形から、姿を変えて籠手の形に。
シャナもストライクアーツができる。
ここからは格闘対格闘だ。

「たあつーー！」

「はつーー！」

ドゴオツ！
バキイツ！

相手のパンチをかわし、シャナは先ほど傷を負わせた腹部へ拳を叩きこむ。

クラッシュショーミュレーントの痛みがあるせいで、余計にダメージがある。

対して相手はダメージを負いながらもシャナの頬を攻撃していた。相討ちの状況だが、どちらかと言えばこちらが不利。腹部の痛みがさらに強くなつた。

シオ・ジムト

LIFE8460-1930=6530

シャナ

LIFE12000-1300=10700

クラッシュショーミュレーント

軽度脳震盪

「ぐう・・・まだまだ！！」

『flame shot』

得意の炎熱変換を使ったパンチ。

身体強化を合わせ、さらに速度を上げる。

さながら弾丸の様な速さの拳は再び相手選手の腹部をとらえた。

弱点集中攻撃。

ライフを多く削れるのであれば、削れるだけ削りたい。

最初の一撃も、この弱点を作るためだ。

「うあつ……」

シャナに負けじと、相手選手もこの体制から攻撃に入る。チビッ子に負けられないと言う意地もあるのだろうか。空いていた脚でシャナの腹部を蹴りあげた。

「が・・・・!?

「ぐ・・・・!?

シャナ

LIFE10700-2180=8520

シオ・ジムト

LIFE6530-1120=5410

クラッシュユニコーン

火傷悪化（中度火傷）

『ダウン！シオ選手、ユートラルコーナーへ！ダウンカウント1

0-』

ついにダウンしたシャナ。

相手も強い。それはわかつていたが、実践じゃやはり違う。再確認すると、よろよろと立ちあがり、再び構えた。カウンターは少し危うく4。

後ろからノーヴェが声をかけてくるが、大丈夫と返した。

「一撃で全部削れるかな？」

『It can do, if it is master.』
(マスターなら出来ます)

「そつか。じゃ、あれやつてみよつか」

『aii riitht.』

FHをソードモードに戻す。

そしてしっかりと握り、強く構えた。

『Explotion』

カートリッジは出ないが、刀身に炎が宿る。

剣の師匠のような存在で、高く評価してくれた人。

同じ炎熱変換を持っていて、とても強い心を持った女性。

シグナムの必殺の一撃。

シャナは、今それをやろうとしていた。

「紫電」

一気に踏み込み、走り出す。

そして勢いよく切りぬいた。

「一閃ツ！－！－！」

第43話 スーパーノーヒス（後書き）

次回は未定。
どうしようか迷っています。

誤字脱字、感想あればお願ひします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3435r/>

魔法少女リリカルなのはvivid 鮮烈で桜色の物語

2011年12月17日21時51分発行